




シンポジウム報告書

平和のための 文化イニシアティブの役割

～日独からの提言～



Conference Report
Fostering Peace through Cultural Initiatives:
Perspectives from Japan & Germany

2009



平和のための 文化イニシアティブの役割

～日独からの提言～

Fostering Peace through Cultural Initiatives:
Perspectives from Japan & Germany

主催：国際交流基金、ゲーテ・インスティトゥート

共催：毎日新聞社

協力：青山学院大学国際交流共同研究センター

Organized by the Japan Foundation & the Goethe-Institut

Co-hosted by the Mainichi Newspapers

With cooperation of Aoyamagakuin University

Joint Research Institute for International

Peace and Culture

目次 / Table of Contents

<日本語版>

- 004 1. はじめに：国際交流基金における文化と平和構築に関する取り組みについて
- 005 2. 報告書刊行にあたっての序言 ハンス＝ゲオルグ・クノップ
- 006 3. シンポジウムを終えて～考察～「平和構築と文化」 小倉和夫
- 009 4. プログラム
- 012 5. 参加者発表原稿
- (1)5月14日専門家ワークショップより(発表順)
- 午前セッション：アーティストによる事例紹介と評価
- ①井上廣子
 - ②リタ・ザクセ＝トゥサーン
 - ③ヘレーナ・ヴァルトマン
 - ④白瀧八洲彦
 - ⑤永岡泰則
 - ⑥エーバーハルト・ユンカーズドルフ
 - ⑦ウリ・ガウルケ
- 038 昼食時スピーチ
- ⑧ロナルド・グレーツ
- 044 午後セッション
- ⑨ハンス＝ゲオルグ・クノップ
 - ⑩小倉和夫
 - ⑪平野健一郎
 - ⑫西川恵
 - ⑬渡辺靖
- 064 (2)5月15日公開シンポジウムより(同上)
- ⑭ハンス＝ゲオルグ・クノップ
 - ⑮ファリード・マジャーリ
- 他の発表者は前日の資料に基づき発表。



<ENGLISH>

- 078 1. Preface: Japan Foundation's work on "Fostering Peace through Cultural Initiatives"
- 079 2. Foreword to Publication Hans-Georg KNOPP
- 080 3. Peacebuilding and Culture Kazuo OGOURA
- 083 4. Program
- 087 5. Presentation Materials by Participants (In order of presentation)
- (1) Presented on May 14th, Experts' Workshop
- MORNING SESSION
- ① Hiroko INOUE
- ② Rita SACHSE-TOUSSAINT
- ③ Helena WALDMANN
- ④ Yasuhiko SHIRAKATA
- ⑤ Yasunori NAGAOKA
- ⑥ Eberhard JUNKERSDORF
- ⑦ Uli GAULKE
- 117 LUNCHEON SPEECH
- ⑧ Ronald GRÄTZ
- 124 AFTERNOON SESSION
- ⑨ Hans-Georg KNOPP
- ⑩ Kazuo OGOURA
- ⑪ Kenichiro HIRANO
- ⑫ Megumi NISHIKAWA
- ⑬ Yasushi WATANABE
- 147 (2) Presented on May 15th, Public Symposium
- ⑭ Hans-Georg KNOPP
- ⑮ Fareed C. MAJARI
- Other presenters based their speeches on the materials presented on the previous day.

<添付資料 / Appendix>

- 162 (1) 参加者略歴 Introduction of Participants
- 168 (2) 毎日新聞告知記事 2009年5月13日「もよおし」
(3) 毎日新聞掲載記事 2009年5月30日「西川恵の GLOBAL EYE」
- 169 (4) 「遠近」No. 30, 2009年8/9月号「文化交流活動は社会の中でどんな意義を持つのか」
- 172 <写真 / Photos>

はじめに： 国際交流基金における「文化と平和構築」に関する取り組みについて

今日の世界では、国家と国家による戦争がない状態を即ち平和であるとは言えず、「戦争未満」の状態でも、様々な紛争の火種が個人や民族や地域の関係の中に内包されていると言える。

そのような認識のもと、国際交流基金は、文化、芸術活動や、青少年交流が、より平和な国際関係、地域間関係のために果たしうる役割は多岐にわたっているとの視点に立ち、2008年3月、過去数年間に国際交流基金が行ってきた各種文化交流事業の中で、文化を通じて平和に資する試みを行った事業例をまとめ、「文化が創る国際平和：平和構築と文化」と題した小冊子の形で刊行した。

2008年度からは、この「平和のための文化イニシャティブ」という理念の共有と討議、過去の事例の洗い出し、そして将来に向けたプログラム開発を目的として、ドイツの文化交流機関であるゲーテ・インスティトゥートと国際シンポジウム・シリーズを開始した。

2008年12月に、ゲーテ・インスティトゥートからハンス＝ゲオルグ・クノップ事務総長とクリストフ・バルトマン事業部長を東京での準備会合に招き、二機関の過去の事例について集中的に討議した。また、その成果を踏まえ、2009年5月14日-15日に「平和のための文化イニシャティブの役割：日独からの示唆」と題した国際会議を東京にて開催した（主催：国際交流基金、ゲーテ・インスティトゥート／共催：毎日新聞社）。本報告書は、同会議の専門家ワークショップ（初日）および公開シンポジウム（2日目）の概要を主に発表原稿、資料をまとめたものである。

両日とも、ゲーテ・インスティトゥートからクノップ事務総長とバルトマン事業部長の参加を再度得るとともに、同インスティトゥートの紛争地における事務所勤務者（アフガニスタン、レバノン）や、彼らの文化イニシャティブに参加したアーティストにもご登壇いただき、日本側からも、平和や紛争の問題に取り組んできたアーティストや有識者をお招きして、有意義な議論を尽くすことができた。

上述の小冊子刊行のための調査および全体のコーディネーションについて福島安紀子国際交流基金特別研究員の助力、またシンポジウム・シリーズの開催にあたっては青山学院大学国際交流共同研究センターの協力を得たことをここに感謝とともに記す。

会議開催にご協力いただいた登壇者、共催者、および関係各位に感謝するとともに、この記録が今後の更なる事業開発の参考となれば幸いである。

2009年12月
国際交流基金

報告書刊行にあたっての序言

平和のための文化イニシャティブについて

ゲーテ・インスティトゥートと国際交流基金（ジャパンファウンデーション）は、数年前から密接に連携を行って参りました。姉妹関係にあるこの2つの組織は、国際的な文化間の対話と交流を促進することで、それぞれの国の対外文化政策に重要な役割を果たしています。ゲーテ・インスティトゥートも国際交流基金も、自分たちの目標と活動を、政治家にとどまらず、自国の市民に広く知っていただき、応援の声を得たいと考えています。

そこで私たちは、国際交流基金から東京でシンポジウムを開かないかというお申し出があったとき、それを有り難く受けさせていただいたのです。テーマは、平和維持における文化の役割——これはゲーテ・インスティトゥートの基本方針でも重要な地位を占めるものです。「平和のための文化イニシャティブの役割」が、日独両国から報道、学界、文化交流の実践の現場から経験・知識の深い人々を集めて2009年5月に開かれたこのシンポジウムのタイトルです。シンポジウムの目的は、危機や紛争にさらされた地域で文化的な対話を涵養するために両国がとっている戦略や手法を学ぶことでした。

アフガニスタン、パレスチナ、インドネシアその他の世界各地から、事例が報告されました。これらは、内戦中や内戦後、自然災害や政治危機・紛争下で文化イニシャティブがどのように有益な役割を果たし得るのか、多くの示唆を与えてくれる事例となっています。文化は暴力的な状況において無限の可能性を持っているとは決して言えませんが、だからといってその力を過小評価すべきではありません。狭義の芸術といった意味にとどまらず、たとえばスポーツ、大衆芸能、工芸などを含めたより広い意味での「文化」は、紛争後に残るトラウマを克服し、平和と安全の下での共存という考え方を促進すると言えましょう。

我々の基本的な目標は類似しているように思いましたが、一方で、方法論における違いが明らかになりました。文化イニシャティブを通じて平和を育む方法に日本風とドイツ風があるらしいという知見が得られたと言えます。日本側の事例は、より地道なものであり、伝統芸術や大衆芸能といった形の上に行われたものでした。これは、社会的相互作用の重要性を強調したものです。一方のドイツ側の事例は、もっと現代的な芸術の形を指向したものであり、これが社会変革の原動力となることが示されました。シンポジウムは互いのスタイルから学ぶがあると教えてくれる機会でもあったわけです。そしてここから、国際交流基金とゲーテ・インスティトゥートが危機・紛争下の地域にそれぞれのノウハウを持ち寄ってそれぞれの活動を融合する試みを行うべきではないか、そういう時宜があるのではないか、という提案もなされました。この提案が賛意を得たことから、やがて新たな一連の話し合いがもたれることになるでしょう。それが文化イニシャティブを通じて平和を育むという目標をもった共同プロジェクトへの道を開いてくれることを願ってやみません。

2009年12月

ハンス＝ゲオルグ・クノッ普

ゲーテ・インスティトゥート事務総長

1. 平和と文化との関係

文化の違いが紛争の原因となるという考え方は正しいのかどうか——これが平和と文化の関係を考える場合第一に提起されなければならない問題であろう。もちろん、民族文化や地域文化の違いにも関わらず共存共栄してきた社会は歴史的に世界中至るところに存在しており、文化的な違い自体が摩擦や紛争の原因そのものであると考えることは控えるべきであろう。しかし、民族的あるいは文化的違いが経済や政治的利害と結びついた場合、文化が紛争や摩擦を激化させる原因となってきたことは否定できないであろう。したがって文化的違いが経済的、政治的利害の対立と結びつくことをいかに防止するか、そのような意味での共存共栄の条件は何かが問われなければならない。もちろんこれは各国国内ないし地域社会においても当然問われるべき問題であるが、国際社会全体においては、普通の国家内部や民族内や地域内における以上に、人類社会全体のコミュニティ意識、共通意識を育てることが難しいだけに、より深刻な問題となり得るといえる。この問題に対して国際文化交流がどのような役割を果たすべきかが、平和構築と文化との関係でまず問われなければならないことであろう。

その際、人類共通の理念の共有、相互理解の必要性、感性の共有、異なる感性についての理解、それらを通じて違いを許容していくことが人類社会全体の共通意識を育てる上で必要である、という前提が認められなければならないであろう。

2. 紛争防止と文化交流

文化交流を相互理解の増進やお互いのアイデンティティについての相対化の育成、という観点から考えると、文化交流は一方で同化・吸収・統合のプロセスであり、同時に独立と抵抗と隔離のプロセスであり触媒である。こうした二面性を持つ文化交流だけに、文化交流が十分その意味を発揮する条件は何か、という点が問われなければならない。

紛争防止という点から考えれば、相互理解そのもの、即ち人類共通の共同体意識の育成自体が紛争防止に役立つと考えることもできる。例えば核廃絶に向けての人類の共通意識の強化のための文化活動があげられよう。(日本のウルドゥー語を勉強している学生たちが「はだしのゲン」をウルドゥー語で演劇化し、その劇を核兵器の保有をめぐってインドと争っているパキスタンで上演することによって、核兵器の被害がいかなるものか広く人々に理解されることに寄与するといった形の文化交流もこの一例といえよう)。

3. 長期的な紛争の拡大を防ぐ意味での文化交流

すでになりにかなり長期にわたって紛争が存在している地域において、文化交流が紛争の拡大防止にどのような役割を果たしうるかについて考えると、まず紛争が当事者の文化アイデンティティを歪曲した形で強化している点を是正するという観点がある。即ち、相手方に対する憎しみによって、相手や自分自身のアイデンティティの特定の部分だけが不当に歪曲した形で強化され、それが紛争激化の一つの兆候であるとすれば、それを解きほぐしていくための文化交流の役割が考えられよう。(イスラエルとパレスチナ、双方の少年を招いて広島を見学してもらい、一緒にサッカーゲームを行うという「ピースキッズサッカー」は、この一つの例といえよう)。

また、紛争が長期化すれば、その地域の人々の真の生活や姿が第三者から隔離され不透明になってくるといった問題がある。即ち紛争地域で苦しむ市民の姿よりも紛争そのものが世界に伝わるために、紛争地域の人々と他の地域の人々のつながりが紛争だけに集中してしまい、人々の

実際の生活、心理、感情が世界によく伝わらないという状態が現出する。したがって紛争地域が他の地域から心理的、文化的に隔離されることを少しでも防ぐこと、即ち、紛争地域の市民と他の社会とがつながりをもてるようにすることが文化交流の一つの役割といえよう。(バグダッド市民の演劇活動グループを日本に招待し、公演会を開催する試みなどはこの例といえよう)。

4. 紛争が収まりつつある段階での文化交流の役割

(1) 心の癒し

紛争が収まりつつある段階では、軍事のおよび政治的に紛争で傷ついた人々の心の癒しに、いかに文化交流が役立つかを考えることができる。紛争によって対立、抗争した人々、なかんずく、かつては同一の村なり集団に属していた人々が紛争によってきりさかれ、抗争を余儀なくされた場合の心の傷痕は大きい。こうした心の傷を癒すためには双方の気持ちを表現する何らかの文化交流活動が役立つことがあろう。(アチエで国軍に抵抗して戦った人々と、国軍に参加した人々の心の溝を埋め、同じ民族に属しながら紛争であい分かれて争った人々の心の傷を癒すため、共同の演劇ワークショップに参加することを通じて対話の成立を図るという試みはこの一例といえよう。)

(2) 紛争の記憶、苦悩とその伝承

物理的な損害は見えやすく、計算しやすいが、苦しみはそれに悩む人々の心が開かれねばあきらかにならない。しかし苦しみを受けた人々はそれを語ることを躊躇する場合も多い。苦悩を経験した人々に自己の表現の場を与え、そうすることによって心の傷痕の「記録」を残し和解のプロセスや将来の紛争防止に役立たせることができよう。そのためにも文化活動が役立つ場合も少なくない。(ベトナム戦争で傷ついたベトナム人の心の苦しみをどのように後の世代に記録し伝えるかについても、文学や演劇、国際シンポジウムなどいろいろな形の活動が考えられよう。)

(3) 文化的、民族的な誇りの復権

紛争は自己のアイデンティティの破壊や歪曲につながる場合も多く、また、多くの場合、民族的アイデンティティの対象となっている文化的伝統が破壊されるプロセスである。したがって紛争後の平和構築のプロセスの中では物理的なものにしる、無形の芸能にしる、民族文化の象徴を復権、復興するための活動が、民族の活力を鼓舞するために役立つ場合は少なくない。(アフガニスタンの陶工を日本に招待して、内戦で破壊された陶芸を復興することに役立たせるプロジェクトはこの一例といえよう。)

5. 平和構築のための文化活動についての実施上の問題点

平和構築に実際に文化交流を役立たせようとする、実践上の困難や課題が存在する。まず、現地での必要性や現地の人々の意向をどう把握し、どういうプロジェクトを優先するか、平和構築に役立つ文化交流は多くあっても、どの時点でどれに関与し、何に役立たせるかについての優先度の設定は実際には容易ではない。また、文化交流をいたずらに平和構築と結びつけること自体、文化交流をある意味では専ら政治的目的のための手段として使うことにつながりかねず、どのような形でプロジェクトを実現するかは文化交流の原点に関する問題でもある。いいかえれば文化交流が持つ本来の文化的価値と、それを平和構築に役立たせることとの関係についてのやり方、程度、考え方が問題である。紛争が完全に収束したあとであれば、心の傷跡の存在、文化的誇りの復権の必要性が比較的発見しやすく、また、現地コミュニティと外部の協力者との接点も見つけやすいが、紛争防止や拡大防止段階においては判断がきわめて難しい。現地の人々

の意向や、プロジェクトの形式や優先度設定をどのように行うかの考え方をつめる必要がある。

第二に軍事的ないし、安全上のリスクがある。これらのリスクを文化交流活動において誰がどう負うのかの問題がある。一つの方法として、なるべく紛争地域の人々を外に招待し文化交流を行い、紛争地域に戻って文化交流の触媒となってもらおうという方法もあるが、それでは第三者の関与はあくまで間接的になってしまうであろう。他方、紛争地域で“プロテクトド・スペース”を作ってもらおうという方法もあるが、誰がどうやって作るのかという点と考えると文化活動をこえた問題が多くからんでこよう。他方、文化交流を行うことそのものが“プロテクトド・スペース”を作り出し、その中では安全上のリスクが軽減されるという逆説もあり得ることに注意しなければならぬ。

第三には政治的リスクの問題がある。紛争当事者のいずれかから見れば、どちらの当事者にも与しない中立の文化交流があり得るのかという問題があり、そこには常に政治的リスクの問題がからむ。したがって、政治的リスクの回避方法にはどのようなものがあり得るかも考えなければならぬであろう。また、紛争地域における文化交流を行う主体（特に政府関係団体）からすれば、紛争地域に介入する政治的リスクをどのように負うか、安全リスクをどこまでとったかといった、自国内の政治リスクも存在することに注意を要しよう。

第四に、評価の問題が挙げられる。平和構築に文化交流がどのように役立ったかはきわめて測定しがたく、また長期的視野を必要とする。特に軍事的あるいは政治的リスクがあればあるほど、効果をどうとらえるかが、説明責任との関係でも大きな問題として残るであろう。

プログラム

「平和のための文化イニシアティブの役割：日独からの提言」

主催：国際交流基金、ゲーテ・インスティトゥート

共催：毎日新聞社（15日）

協力：青山学院大学国際交流共同研究センター

1. 趣旨

グローバル化が進む現在、これまでの戦争がなければ平和という「戦争と平和」の二者択一の世界から様々な「戦争未満」の状況が人々の平和を損なう状況となっている。そのため長期的な視野に立った貧困撲滅、格差の解消、そして他者を認め平和を希求する心を育むことの大切さに目を向けている。そのような今日において、文化・芸術活動や青少年交流が、より平和な国際・地域間関係の創造のために果し得る役割は、紛争前の対立状態にある地域における信頼醸成のため、また紛争後の相互信頼回復のためなど多岐にわたる。

国際交流基金とゲーテ・インスティトゥートの事例をもとに、平和のために文化事業に求められる役割はどのようなものか、より効果的なインパクトを残すためにはどのような事業実施が望ましいのか、文化事業実施の際の難点・留意すべき点とは何かを議論する。

2. 日程：2009年5月14日（木） 9時30分～17時、非公開ワークショップ
17時～18時 簡易レセプション
2009年5月15日（金） 15時～18時、公開シンポジウム
18時～19時、レセプション
19時30分～ゲーテ・インスティトゥートによる映画上映

3. 場所：14日：国際交流基金本部2階さくらホール
15日：ドイツ文化会館（ドイツ文化センター）

4. プログラム

(1) 2009年5月14日（木）非公開ワークショップ（和英同時通訳）

9:30-9:45 開会

小倉和夫 国際交流基金理事長

ハンス＝ゲオルグ・クノップ ゲーテ・インスティトゥート事務総長

ハンス＝ヨアヒム・デア 駐日ドイツ連邦共和国大使

9:45-13:00 第1セッション：アーティストによる事例紹介および評価

国際交流基金とゲーテ・インスティトゥートによる最近の事業に参画したアーティストたちによる事例報告を行う。事例紹介に続き、各事業の評価のためのコメント、受け入れ地域からの感想・所感等、受け入れ側からの視点に立った議論も行う。

議長：クリストフ・バルトマン（事例2）

ウーヴェ・シュメルター（事例4）

高橋毅（事例1および3）

1. 井上廣子 造形美術家
「Inside-Out：世界のフィールドワークから見えてきた現実と表現」
2. ヘレーナ・ヴァルトマン 演出家・振付家
「ブルカによる束縛」
リタ・ザクセ＝トゥサーン ゲーテ・インスティトゥートカブール所長
「アフガニスタンにおける文化発展：カブール国際ドキュメンタリー・短編映画祭、演劇フェスティバル」
3. 白瀉八洲彦 砥部焼伝統工芸士
「イスタリフ焼との出会いと今後」
永岡泰則 陶芸家
「イスタリフ焼を伝統の薪窯からガス窯へ」
4. エーバーハルト・ユンカースドルフ ドイツ映画協会会長（欠席のため代読）
「ドイツと朝鮮半島の映画事業協力のためのグローバルな映画協力」
ウリ・ガウルケ 映画監督
「夢の中の同志～ ドイツー朝鮮半島の初の映画共同制作事業：その開発と国際的な評価～」

13:00-14:30 昼食：ランチョンスピーチ

進行役：福島安紀子国際交流基金特別研究員

ロナルド・グレーツ 対外文化関係研究所（IFA）事務総長

門司健次郎 外務省大臣官房広報文化交流部長

14:30-17:00 第2セッション：平和のための文化イニシアティブの理念および役割

モデレーター：高橋毅 国際交流基金参与

基調講演：小倉和夫 国際交流基金理事長

ハンス＝ゲオルグ・クノップ ゲーテ・インスティトゥート事務総長

【パネリスト】

ハンス＝ゲオルグ・クノップ ゲーテ・インスティトゥート事務総長

ロナルド・グレーツ 対外文化関係研究所（IFA）事務総長

平野 健一郎 東京大学・早稲田大学名誉教授

西川恵 毎日新聞社

小倉和夫 国際交流基金理事長

渡辺靖 慶應義塾大学教授

(2) 2日目：5月15日(金) 公開シンポジウム (和英同時通訳)

15:00 開会・基調講演
歓迎の辞 ウーヴェ・シュメルター ゲーテ・インスティトゥート東京所長
来賓挨拶 松永文夫 外務省広報文化交流部部長代理
【基調講演】
小倉和夫 国際交流基金理事長
ハンス=ゲオルグ・クノップ ゲーテ・インスティトゥート事務総長

15:45-16:45 第1セッション：実践者による報告および評価

モデレーター：ウーヴェ・シュメルター

【報告】

井上廣子 造形美術家

「Inside-Out：世界のフィールドワークから見えてきた現実と表現」

ファリード・マジヤーリ ゲーテ・インスティトゥート ベイルート所長

「行き詰まりの先に ～紛争解決における芸術の役割～パレスチナ、イスラエル、
レバノンの文化協力～」

白濁八州彦 砥部焼伝統工芸士

「イスタリフ焼との出会いと今後」

永岡泰則 陶芸家

「イスタリフ焼を伝統の薪窯からガス窯へ」

16:45-18:00 第2セッション：パネル討論

モデレーター：西川恵 毎日新聞社

【パネリスト】

平野健一郎 東京大学・早稲田大学名誉教授

ハンス=ゲオルグ・クノップ ゲーテ・インスティトゥート事務総長

ファリード・マジヤーリ ゲーテ・インスティトゥート ベイルート所長

小倉和夫 国際交流基金理事長

ヘレーナ・ヴァルトマン 演出家・振付家

渡辺靖 慶應義塾大学教授

18:00 閉会 ゲーテ・インスティトゥートおよび国際交流基金

18:00-19:00 レセプション

19:30 ゲーテ・インスティトゥートによる映画上映

“Comrades in Dream” by Uli Gaulke & ドキュメンタリー “My Kabul”

アーティストによる事例紹介および評価

Inside-Out : 世界のフィールドワークから見えてきた現実と表現

井上 廣子

1992年より現在まで、現代美術の作家として作品制作・発表をしてきました。1998年、大阪トリエンナーレ、彫刻部内で特別賞を頂き、ゲーテの支援のもと、1999年渡独、作品制作、発表を行い、現在も日本とドイツを往来しながら作家活動をしています。

1995年、日本の本州の中央部に位置する兵庫県を中心にして大地震が勃発しました。阪神淡路大震災です。一瞬にして約5,000人の尊い命が失われ、この被害を目のあたりにしました。震災後、人々の心の奥に刻まれた傷が癒やされないことや、仮設住宅での孤独死、そしてそれを管理する社会の仕組みに関心が行き、以降精神病院や少年院の窓の内側、外側、ドイツの強制収容所、世界の子供達をモチーフとして自覚的に社会性を持った作品制作に取り組んできました。

世界の紛争地に入ったことはありませんが、アジア、ヨーロッパ、北米、アラブ等の辺境の地に入っています。世界はグローバル化と言われながら派生する社会的問題さえも、現代都市であろうと辺境であろうと差異はないのです。以下、どのような国に滞在し、アーティストとして何を感じ、それが作品としてどのように結実したのかをお伝えしたいと思います。



1992年 初個展 当時テキスタイルアーティストとして出発。

1995年 阪神淡路大震災勃発

町は復興しても人々が受けた衝撃は心中でトラウマとなり、特に子ども達への影響は多大であった。この事実が私を精神病院の窓の1枚を通して、内側、外側の写真を撮るという行為に向かわせた。この13年間、世界各地の異なった場所の窓、隔離された施設の窓をモチーフに作品制作をしている。一つの窓の内側から外側を、外側から内側を見る人の視線のズレを表出し、窓一枚の境界を通して自分はどこに居るのか、他者とどの様に繋がっていくことができるのかを問いたいからである。

1997年 アート・フォーラム谷中・東京での作品展

精神病院の窓の作品 (ライトボックス)



1999年デュッセルドルフ・ドイツでの個展

精神病院の窓の作品 (ライトボックス) →布に写真を現像し、それをキャンバスに張りライトボックスに組み込んでいる。

1999年以降、ドイツにアトリエを持ち、強制収容所を回り始めた。この窓はチェコ、テレジン・シュタットの強制収容所の窓だ。この窓にカメラを向けた日は、夏の暑い日で窓の向こうに青空が広がっていた。

かつてここに居た人々は、この場所から出て行く事は出来なかった。私が立っているこの場の私の後には類々と過去の人々がいる。そして現在の私につながっている。この悲惨な現実決して過去の事ではなく現在のことなのだとして強く感じた。

2000年 兵庫県立美術館・神戸<魂の記憶>孤独死の人々へのメモリアル

1998年7月25日現在220名の孤独死があり、震災がなかったら、仕事もあり、家族も家庭もあったかもしれない人々は震災で全てを失い、アルコールにおぼれたり、外界との接触もなく一人で亡くなった方達に私達は貴方を忘れないというメッセージを込めて作品制作をした。



2002年 アメリカ・アンカレッジからさらに飛行機で北西に2時間30分、ベーリング海に面したアラスカの町ノーム市に行った。イヌイトの人々に出会うためであった。晩夏、終日風が吹き、広大な大地、過酷な気候の中で、若者は仕事も少なく、夢もなく飲酒に走る。1か月間の滞在中、酒に酔った若者たちの間で2件の殺人事件があった。

アラスカのこの辺鄙な町の犯罪のトップは、ドメスティックバイオレンスであり、子どもを含めた弱者が犠牲になっている事に驚いた。現代社会が捉える諸問題が、老人や子ども、他の社会的弱者に集約されている。日本でも多くの若者がひきこもりやうつ病をかかえている。ここで初めて、アーティストとして作品の中に子どもをモチーフとして選びたいと思った。目を閉じた子どものポートレイトを表出する事により、この混沌の様相の中で、今人間は何を欲し何に向かって歩み続けようとしているのか、そして貴方は何をという問いかけでもある。

2003年 東京ドイツ文化センター・東京<汝・何を欲するか>
中京大学C・スクエア・名古屋<汝・何を欲するか>
ムルハイム私立美術館<汝・何を欲するか>

2004年 クンストパラスト美術館・ドイツ・デュッセルドルフ<汝・何を欲するか>

2003年 アラビア半島の南西端 イエメンに1か月間滞在
ここは約10数年前、国内北と南に分かれ内戦があった処である。人々の心中にはその当時の影をまだ引きずっていた。主都サナアから東南に約300km、マーリブという町へ移動。この町は現在も部族間の争いがあるところである。マーリブはかつてシバの女王の時代、広大な神殿が建ち、周囲は緑でおおわれ、川には水が流れ交易で栄えた場所であった。現在この町は全てが砂漠化していた。荒廃し、廃墟となった神殿や、墓地らしき跡に、人骨と砂のゴミが散乱しているのを見た時、この光景は、私にとって東京の未来の姿と重なった。



2005年 文化庁から文化交流使に任命され1年間オーストリアに滞在した。その際、ウィーン近郊にあるオットー

ワグナー精神病院内シアターにて作品展を行った。この病院は第二次世界大戦時、ナチの時代、約470名の身体障害のあったオーストリア人やロマの子ども達が人体実験の犠牲になった場所でもある。この場所で、オーストリア人と日本人の高校生18名の目を閉じたポートレイトを直径7mのサークルに設置、現在と過去を交差させようと思った。また、1902年に建造が始まったこの古い精神病院内の色々な窓のカラー写真をライトボックスに仕立て床に展示した。〈貴方はどこへ歩もうとしているのだろうか〉

2007年 アメリカ・サウスカロライナ州のクレムソン大学に1か月間招聘された。彫刻空間デザインを学んでいる学生達と大学構内に有機的素材を使った彫刻を作るというプロジェクトであった。大学の前身はプランテーション農園であり、かつて多くの黒人の人々がアフリカから船で運ばれチャールストン湾に上陸した処である。学生達と歴史を調べ、ミーティングを重ねた結果、色々な民族のミーティング・ポイントとなる〈メディテーション〉の場を作ることになった。構内に自生している約1,000本の竹を切り、全長約17mの彫刻が完成した。太陽の移動と共に竹の影が動いて行く静謐な場所である。

2009年 アメリカ・モンタナ州に4月上旬から下旬まで滞在。モンタナ州北西にあるリビイ(Libby)という町に入った。ここは町全体がアスベスト公害で苦しみ約300人の人が、ガンで亡くなり、現在も約1,000人の人が病気で苦しんでいる。土壌が汚染されているため、自分の庭でガーデニングもできず、子供が近所の川で泳ぐこともできない町である。



色々な辺境の地に滞在してそこから見えて来ることは、現在の地球の現実であり、むしろ辺境の地だからこそ、全体の社会構造や問題点、人々の生活が見えてきます。辺境で起こっている問題は他の場所でも起こっていることだと思います。また、日本のように生の実感のない、行き先の見えない不安な時代、個人の内部では生についての絶望や空虚感と戦っています。これも一つの戦争ではないかと考えています。

芸術は人間の夢や希望や苦悩を表現し、社会の実相を切り取り、メッセージとして形を通して伝える力があると信じています。現代社会の混迷の時代を人々ほどの様に記憶し、乗り越え、次代に何を伝えようとしているのかを美術として創出したいと思っています。

私達が〈今、あること〉への切実な問いかけになればと思っています。

アフガニスタンにおける文化支援――

カブール国際ドキュメンタリー・短篇映画フェスティバルと全国演劇フェスティバル

リタ・ザクセ＝トゥサーン

小倉理事長、大使閣下、クノップ事務総長並びに紳士淑女の皆様。皆様はアフガニスタンに行かれたことも、今後行かれることもないかもしれません。そこで、アフガニスタンの写真をお見せしようと思います。主にカブールのものです。写真に解説はありません。その後で、市民社会復興を狙いとした文化支援の事例を2つ、お話することにしましょう。

(写真スライドを上映)

アフガニスタンの印象はいかがだったでしょうか。さて、ここからまず、アフガニスタンでの私たちの文化事業のベースになる枠組みとなる状況を検証することにいたしましょう。次に、ゲーテ・インスティトゥート・カブールの文化活動を検証します。そして、アフガニスタンが膨大な課題を克服することができるようにする上で、アフガニスタンや援助国の前に横たわる課題を指摘します。最後に、国際映画フェスティバルと全国演劇フェスティバルの展開に焦点を当てます。

では、枠組みとなる状況説明から始めさせていただきます。

- ・アフガニスタンには、関心や意欲の高い若者が潜在的に多数存在します。ゲーテ・インスティトゥート・カブール、若手芸術家、大学教員、学校教員、学生の支援を行っています。
- ・イスラム法のような社会問題や、もっと個人的な取り組み、たとえば会社創設やお店の開業のようなことが、参加者を惹きつけ、高い関心の的になっています。
- ・アフガニスタンの崩壊した経済状況のことは皆様ご存じと思いますが、特に失業が特徴的で、これが汚職と犯罪の激増につながっています。
- ・公衆秩序がいまだに確立していません。
- ・治安状況では、犯罪の増加のことは先に申し上げましたが、加えて、政治的な背景をもった犯罪が増加しています。そのため、アフガニスタン警察や平和維持軍の反応が予測できないものになっています。
- ・エリート層が国外に流出してしまっています。
- ・伝統と現代の対立、厳格な階級社会構造の間の対立に社会が直面しています。
- ・ほとんどの女性が一般社会へのアクセスを拒まれるか、制限されています。
- ・そして何より、政治状況が安定しません。

2003年の再開以来、ゲーテ・インスティトゥート・カブールはこういった状況に直面させられてきたわけです。

再開した初年度には、文化イニシャティブの対象として4分野を選定しました。映画、演劇、写真、文学です。カブール大学美術学部や国立劇場、その他のパートナーに技術支援を提供しました。さらに、美術学部で画家や学生を対象にワークショップを開きました。

重要なのは、芸術家それぞれの個別の状況を考慮に入れ、それぞれのニーズに応じて芸術家をサポートできるよう、適切な注意をひとりひとりに払うことです。たとえば、女優であるとい

うことを理由に命を狙われている女優がいるわけです。

私たちの文化活動、たとえば映画フェスティバルは、こういった芸術家たちに全国的、国際的な交流の場を与えます。

フェスティバルの構造に関しては、いまだ発展の過程です。私たちのプロジェクトの着眼点は、質の管理（クオリティ・マネージメント）と持続性です。私たちの企画、たとえば映画フェスティバルの主催をアフガニスタンに移していくのは、いずれもまだ時期尚早でしょう。このような移行は、芸術家の質や、文化マネージメントにあたる人々の質が十分かどうかにかかっています。この段階が完了できたら、ゲーテ・インスティトゥート・カブールは文化事業の方向性を見直すことになるでしょう。

私たちの活動は、文化領域の復興に寄与しているのですが、これはその他の社会領域に劣らず、アフガン社会にとって重要な領域です。言葉を替えれば、病院、学校、道路建築などと比べて、文化分野の復興は決して重要性が低くありません。ここを復興してはじめて、アフガニスタンは次のような難問に取り組むことができるようになるのです。

- ・ 社会の再定義
- ・ 価値観の確立
- ・ 国家的アイデンティティ
- ・ 安定した市民社会の構築

次に、私たちの2つの活動を紹介します。国際ドキュメンタリー・短篇映画フェスティバルと全国演劇フェスティバルです。

短篇・ドキュメンタリー映画の発展促進を決定した理由は2つあります。

1. この媒体が現実の状況とともに歴史を反映するのに適切であること。
2. ドキュメンタリー映画が比較的小規模の機器・予算で制作できること。

私たちの狙いは、映画制作者に全国交流・国際交流のプラットフォームを提供し、それによって国際的な映画フェスティバルへのアクセスをもたらし、徐々に映画制作のクオリティを高め、フェスティバルの構造を確立することです。

2006年には、3か国が参加しました。アフガニスタン、ドイツ、フランスです。ゲーテ・インスティトゥートとフランス文化センターが後援・主催者となりました。協賛者にフランスのテレビ局ARTE、アフガン・フィルム、情報文化省が参加しました。そして広報の方法を探りはじめました。組織の構造を作りあげ、参加・選考の規則と基準を定めねばなりません。フェスティバル開催中、ゲーテ・インスティトゥートは国外から専門家を招いてワークショップを開きました。

持続可能性は、私たちの活動においてもっとも重要な基準のひとつです。したがって、私たちは若手映画制作者のために通年のワークショップを追加しました。特に、フランスの共催者、パリのアトリエ・ヴァランとのワークショップです。そこから生まれた最新作「カブールの子どもたち」は、今年のカヌヌ映画祭に参加しています。

2009年には、ゲーテ・インスティトゥート、フランス文化センター、ブリティッシュカウンシルの3機関の後援のもと、参加国は9か国になりました。アフガニスタンの映画制作の質は年々高まっています。組織構造も改善してきました。

カブールの映画フェスティバルにプレミアは不要でしょうか？—いいえ、必要ですし、疑いもなくあるべきでしょう。スポンサー探しに一層の力を入れていきますし、基準や規則にいつもの透明性を確保してきました。つまり、フェスティバルはずっとプロフェッショナルになってきているのです。

地方から演劇集団を集めて行われる全国演劇フェスティバルの創設と運営も、映画フェスティバルと同様です。ただ、いくつか付け加える側面があります。

- ・これは役者や監督に全国的なプラットフォームを提供しているのですが、これが唯一の交流の機会だということ。
- ・文化間の交流を通して、作品のクオリティが高まること。たとえば、2007年にはゲーテ・インスティトゥートはゲスト・パフォーマンスにヘレーナ・ヴァルトマンを招待しました。
- ・2009年にはフェスティバルに先立ってカブールで4回、地方で3回のワークショップを開いたこと。
- ・監督や役者にドイツへの招待プログラムの支援を行ったこと。たとえば、2009年にはある人形劇役者が、ベルリンのエルンスト・ブッシュ演劇学校でのワークショップに出席する機会を与えられました。2009年9月には、この人はベルリンに1年留学するよう招待されたのです。

これらイニシアティブの結果、5名の若手人形劇役者がアフガニスタン最初の人形劇アンサンブルであるParwazを結成しました。


才能ある若手の視野を広げ、彼らに社会復興に参加するよう動機づけをするという文化イニシアティブの重要性を示すのに、以上に優る実例は見当たらないでしょう。

ご清聴、ありがとうございました。

 GOETHE-INSTITUT

GOETHE-INSTITUT
Kabul
Examples of Cultural Development:
Documentary & Short Film Festival Kabul /
National Theatre Festival
 Fostering Peace through Cultural Initiatives
 Tokyo, May 14-15, 2009
 Rita Sachse-Toussaint

1-1

 GOETHE-INSTITUT

Focus

Framework conditions

Cultural activities of GI Kabul


Tasks for AFG and supporting countries

Challenges for AFG

Examples of cultural development: filmfestival, theatre festival

2

1-2

 GOETHE-INSTITUT


Framework conditions

- high potential of young people: interested, motivated
- more participation in social processes, individual initiative
- disastrous economic situation – unemployment
 - corruption, criminality
- insufficient public order
- absence of sense of right and wrong
- security situation – politically motivated attacks
 - unpredictability of Afghan police + international military
- no access to education for parts of population
- insufficient educational situation
- elite in foreign countries
- conflict between tradition and modernity
- hierarchic social structure
- restricted access for women to public life
- unstable political situation

Cultural development in AFG

3

1-3


 GOETHE-INSTITUT

Cultural activities of GI Kabul since 2003

- evaluation of the situation + identification of areas for cultural initiatives (film / theatre / photography / literature)
- technical support + reconstruction / production means
- qualification of artists
- appreciation / attention for artists + support for their activities
- platform of exchange for artists (e.g. festivals)
- intercultural exchange (e.g. festivals, workshops, experts)
- development of festival structure (cultural management)
- quality management
- sustainability
- autonomy
- Afghan ownership
- new steps

4

1-4

 GOETHE-INSTITUT


Tasks for AFG and supporting countries

Necessity of building up all social areas

policy - economy - culture - social policy - environment

5

1-5

 GOETHE-INSTITUT


Challenges for AFG

- definition of society
- definition of values
- national identity
- building up a civil society
- stability

Teil der Präsentation (angepasst über Anwerbskopf- und Fußzeilen)

6

1-6


 GOETHE-INSTITUT

Examples of Cultural Development
International Documentary Filmfestival

- Why short & documentary film?
- targets: establish a festival structure / platform for exchange / access to international festivals / quality of productions
- festival structure 2006
 - participating countries: AFG/ GER / F
 - 2 supporters: GI, French Cultural Center
 - cooperation with partners: Ministry of Culture, Afghan Film, ARTE
 - public relations
 - organisation structure: organ. committee/selection committee/jury
 - definition of rules (Call for Entry, selection criteria, criteria for jury)
 - workshops during the festival (ARTE, experts from abroad)
 - guest programs for Afghan filmmakers during the year
 - workshops in cooperation with Ateliers Varan Paris

7

1-7

 GOETHE-INSTITUT

2009

- 3 supporters: GI, CCF, British Council
- 10 participating countries
- increased quality of productions
- improved organisation structure:
 - festival director
 - event manager
 - improved public relations
 - sponsoring
 - more transparency for rules/criteria
 - more professionalism

8

1-8

DÖRNER-INSTITUT

**National Theatre Festival
theatre groups from Kabul and provinces**

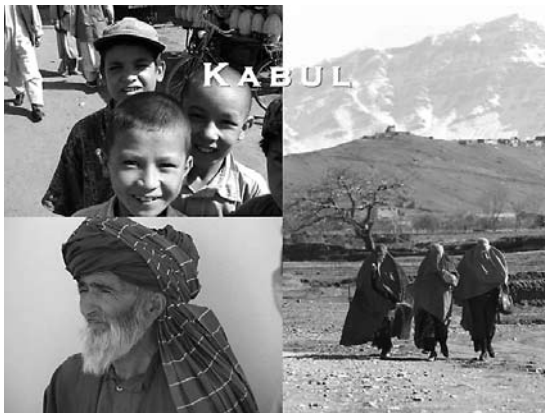
Additional aspects:

- national platform
- increase of quality of productions:
 - intercultural exchange (guest performance H. Waldmann 2006)
 - workshops during the festival (e.g. Helena Waldmann)
 - workshops between festivals (Fac of Fine Arts)
 - workshops in provinces (2009)
- guest programs in Germany for actors, directors
 - (e.g. puppet theatre actor at Ernst-Busch-drama school Berlin, foundation of Puppet Theatre Group „Parwaz“ in 2009)

1-9



2-1



2-2



2-3



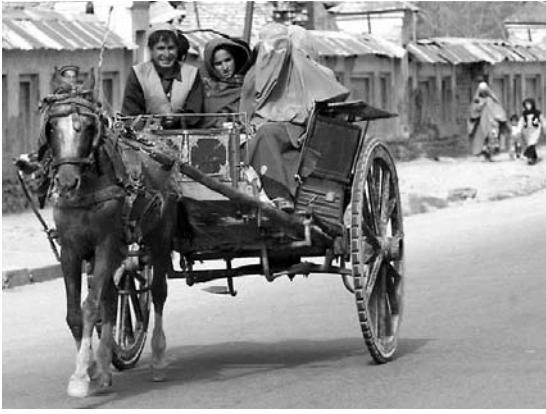
2-4



2-5



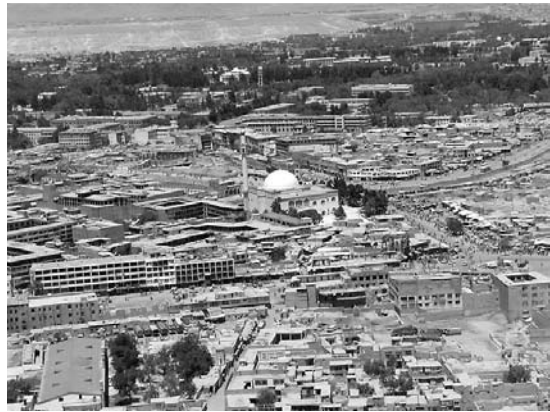
2-6



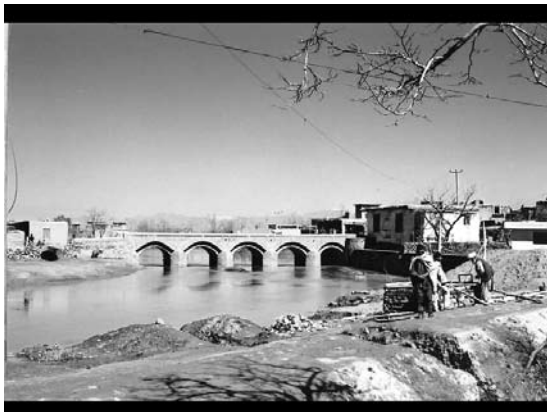
2-7



2-8



2-9



2-10



2-11



2-12



2-13



2-14



2-15



2-16



2-17



2-18



2-19



2-20



2-21



2-22



2-23



2-24



2-25



2-26



2-27



2-28



2-29



2-30

「ブルカによる束縛」と文化の絆

ヘレーナ・ヴァルトマン

ご来場の皆様。まず最初に私は国際交流基金とゲーテ・インスティトゥートに感謝したいと思います。今回招いていただいたこともそうですし、私の演劇作品に関心をもっていただけてきたこともそうです。1990年以来、演劇を専攻した大学を卒業してから、そしてハイナー・ミュラーのような有名脚本家、ジョージ・タボリのような有名監督と仕事をしてきて、もともと「リアル」な存在である舞台の上の「リアリティ」とは何だろうと思うようになりました。現在はフリーの舞台監督、演出家として仕事をしております。2000年以来ベルリンに住んでおりますが、たいていは国際的な枠組みで舞台監督を務めております。



☞たとえばブラジルのサルヴァドル・ダ・バイアで私がプロデュースした《ヘッドハンターズ》という作品ですが、これはユネスコ賞を受賞しました。

イランの演劇芸術センターとともに、《レターズ・フロム・テントランド》という作品をプロデュースしていますが、これは2005年、本日もご出席のマジャーリさんとの仕事です。ちなみに、マジャーリさんは当時パレスチナのゲーテ・インスティトゥート所長でした。☞



☞ラマラを拠点とする舞踏団、それからガザを拠点とする演劇集団との仕事で、《エモーショナル・レスキュー》というダンス映画をつくりだしました。これら演劇作品のテーマは、ゲーテ・インスティトゥートから大きなサポートをいただいたわけですが、私たちが出会った人々のリアリティと強く結びついたものでした。人権抑圧と女性差別といった大仰な主張をしたつもりは全くなかったのですが。

けれど、それが必ず舞台の上の「リアリティ」となりました。私の関心は、決してこういった政治論争ではありません。私の関心はロビー活動を行おうと接近したり、議論を評価しようとする人々とは異っていました。議論するまでもないのです。殺すな。抑圧するな。それだけでしょう。

こういったことがすべて起こるのです。私は法律家ではありません。舞台監督です。舞台監督として、私は問いかけます。現実の状況すべてをどのように舞台に表現するのかと。そしてその舞台そのものも現実なのです。

なによりもまず、関心のありかからいえば、私はヨーロッパ的ではないかもしれません。私の関心は人に向けられています。それもベルリンに住む人ばかりでなく、東京、カブール、テヘラン、ラマラ、サルヴァドル・ダ・バイアといった場所に住む人にもおとらず関心があります。私にとって、それがリアリティだからです。私が今日お話ししようと思っていることは、皆様にはヨーロッパ人ほどには珍しいことに感じられないかもしれません。この話というのは、これほど異なる国

もないだろう、という2つの国、日本とアフガニスタンで私が見てきたことです。

アフガニスタンでは2001年、ほとんど2000年前のバーミヤン仏像群がタリバンに破壊されました。



仏像は、38～55メートルあって、立像としては世界最大の仏像でした。古代世界でシルクロードに位置するこの仏教世界はガンダーラと呼ばれ、アジアとヨーロッパ、東洋と西洋を結ぶ文化のつぼでした。今日のアフガニスタンに



あるこの歴史景観は、非常に珍しい文化の混交を生じています。この混交文化の類まれな冒険の歴史は、解放と適応、変容と変化の物語です。仏像の爆破によって、タリバンはほとんど全

世界を敵に回すことになったのですが、実のところタリバンは400年も前に始まった一連のできごとの仕上げをしたに過ぎません。ムスリムがこの地域を支配するようになって始まった破壊活動のことです。実に16世紀にはもう、仏像の顔と手は破壊されていました。



300年前には、仏像は足を失い、性器のあった痕跡も消し去られました。

タリバンの観点からいえば、特に数トンにも及ぶダイナマイトを使って3日で仏像を消滅させたオマル師の観点からいえば、先祖が何世代にも渡って試み続けてきたこと、すなわちバーミヤン仏像群の破壊を繰り返したに過ぎないのです。



狂信的なアフガニスタン人は、自分たちの歴史だと思われぬ歴史の痕跡を除去しようとしたわけです。これら仏像群が破壊されたとき、全世界は驚愕し、仰天しました。仰天したというのは、——日本から来たビジュアルアーティストのババアツシに聞いたのですが——、ドイツ人研究チームが仏像の残骸から非常に古い巻物を発見した中に、「万物は永遠不滅ではない」を意味する言葉があったからです。「万物は永遠不滅ではない」という言葉。つまり、洞窟に仏像群を構築した何世代にも渡る人々は、自分たちの行為の有限な本質をはっきりと自覚していたということです。自分たちが信じる宗教が減びると思っていたわけではありません。そうではなく、モノとしての自分たちの苦勞の結晶がすべて最終的には滅びると信じていたわけです。どれだけ苦勞をしてもいつかは無に帰るとわかっていました。それが3トンのダイナマイトという形をとって

現実になったわけです。そしてその中で数千、数万の犠牲者が出ました。主にアフガニスタン人です。形に残された労苦の有限性、それを表すのに、ダンス作品以上のものはありません。同様に軍隊の行った行為を表現するにも、これ以上のものはありません。ダンスの本質にある有限性。これは動き、所作を信じることであり、一拍目のステップから有限だということです。万物は永遠不滅ではないのです。



☞ 私が初めてカブールの地を踏んだのは、第4回全国演劇祭の開かれた2007年夏でした。

タリバンが勢力基盤と権力を失ってからたった4年です。私がこの演劇祭に招かれたのは、《レターズ・フロム・テントランド》の続編上演のためでした。☞

☞ 《レターズ・フロム・テントランド》は、ミュンヘンのゲーテ・インスティトゥートとイランのテヘランにある演劇芸術センターの協力によるものでした。2004年、私はテヘランに招かれてイラン人女優だけを対象にしたワークショップを開きました。「覆い隠されたダンス」とでもいうべき小品を創作するためです。



☞ 《レターズ・フロム・テントランド》は、世界各地で公演をおこなって高い評価を得ましたが、その故郷はダンス禁制で検閲が常識の国、イランなのです。《レターズ・フロム・テントランド》は、イランの有名女優たちがテントの陰に隠れて語り、踊るという作品でした。

テントは、ペルシャ語でベールを意味するチャドルと同義語です。☞



☞ 一年後、この作品がイランの現状に対して批判的でありすぎるといことがわかってくと、上演は禁止されました。私は亡命中のイラン女優たちに声をかけ、公演ツアーを続けました。この続編は禁止された本編に対する返事という意味で、《リターン・トゥ・セNDER（差出人へ返送）》と題しました。☞



☞ 亡命中の女たちが、あの作品を演じることを禁じられ、私に連絡をとることも強く戒められているイラン人女優たちに「レター（手紙）」を書き、自分自身でそれに答えるという趣向です。こういった活動をご紹介したのは、それがカブールに招かれたきっかけだったからです。アフガニスタン観衆に対して《リターン・トゥ・セNDER》を上演するためでした。ここでもまた、カブールのゲーテ・インスティトゥートのお世話になり、ワークショップを開催したのですが、ここでアフガニスタンの人々がどれほど感動したのかを知らされました。どれほど自分の状況を自由に話したいと願っているのかも。そして、アフガニスタンの人々にとって自由に話せるもっとも効果的なプラットフォームは、実は舞台なのです。こうい



た明解な事実を知って、私はアフガニスタンについてもっと知りたいと思うようになりました。そして、若い女優たちと仕事をするため、カブールを再訪したのです。



この女優たちは、自分たちは「レイン・ジェネレーション」だと言いました。「雨の世代」、これはどういう意味でしょう。それは、非常に強い原理主義に彩られた歴史の泥沼に足をとられた世代です。もちろんこのとき、タリバンは権力の座にいませんでした。それでもイスラム国家であり、イスラム教の枠内での自由とはタリバンの定めたものと大差ありません。しかしそれは、より自由なパキスタンで定められたものとも大差ないのです。余談になりますが、この自由であるパキスタンがタリバン勢力の大部分の隠れた拠点となっているのは皮肉なものです。ともかく、「レイン・ジェネレーション」を一言で言えば、進むべき道を見失った世代です。

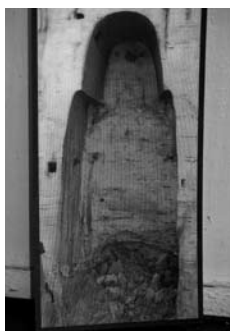
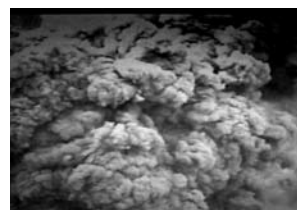


さて、その同じ年である2008年、私は日本舞台監督協会とゲーテ・インスティトゥートの招きでワークショップ開催とシンポジウムのため大阪と東京を訪れました。このとき日本の現代批評家を代表する方々にお目にかかれたのですが、そのなかに堤広志さんがおられました。ここで私は初めて、「ロスト・ジェネレーション」という言葉を聞いたのです。自分たちには未来がないと考えている若い日本の芸術家を説明する言葉でしたが、これは、おそらくは偶然の一致でしょうけれど、バーミヤン仏像群の破壊以後の世代の行動を表した言葉だったのです。ただの偶然かもしれません。けれど、私はとっさにアフガニスタンの「レイン・ジェネレーション」と日本の「ロスト・ジェネレーション」の間で経験の共有と近縁性を感じたのです。

どちらも絶望し、どちらも未来を必死で求め、どちらも現在に見出したものに抵抗し、どちらも「リセットボタン」とでもいうべきものを探し求めていると。



これが正しいかどうか、皆様がご判断いただいてもいいのですが、日本側の友人である川口ゆいやババアツシとの議論を重ねる中で、そしてアフガニスタン側の女性との議論を重ねる中で、インターネットをコミュニケーションのツールとして使うことができるので、私は提案したのです。日本、アフガニスタン両サイドが検閲やコメンテーター、批評家の目の届かないところでチャットして、どの程度自分たちが異っていてどの程度共通する部分があるのかを話し合ってはどうかと。会話の出発点は、バーミヤン仏像群の爆破、あるいは消滅でした。



日本側にとってもアフガニスタン側にとっても、爆破後に残された空虚な間隙は、存在を許されない何ものかの枠組みのように見えていました。両

者が問いかけます。この枠組みを爆破すべきだったのか、枠組みの内側にあるものを爆破すべきだったのか。両者とも、強制された透明性のなかに自分自身の姿を写します。自分自身の身体が消えてしまったところに自分を見ます。両者とも、爆破後の砂煙の中に自分をおいてみます。両者とも社会からの耐えられない圧力の強さを語ります。伝統、道徳規範、羞恥心からできあがった限界を語ります。両者とも、自分自身の爆破を語ります。両者とも自由な天国への強い切望を語ります。さらにまた、両者とも鳥についての伝説を共有していますが、おそらくその起源は共通しているのでしょうか。アフガニスタンでは再生とリセットの鳥はシームルグと呼ばれます。日本では鳳凰です。

自由の役割に関しては、さらに多くが提示されました。ブルカの役割に対するアフガニスタン女性の追求と比較して「縛り」を教えたくれた日本のダンサーに関連して、ドイツ、アフガニスタン、日本の共同で制作する予定の演目タイトルは「ブルカの縛り」となりました。☞



これは、2009年10月にベルリンで公開予定です。お話も終わりに近づいてきましたが、ここで改めて私がかこれまで仕事をしてきた文化機関の皆様すべての実り多いご支援に、個人として感謝したいと思います。特にテヘランの演劇芸術センターには、互いにほとんど相手のことを知らない2つの文化の間の実験的な出会いの場を自信をもって進めてきていただけました。



☞ アフガニスタンは日本のことをほとんど知らないし、日本の人々はアフガニスタンのことを知りません。☞

ましてドイツは、アフガニスタン北部のクンドゥズに駐屯するドイツ軍部隊の役割といったわずかの軍事情報以上にはアフガニスタンのこと知らずにきました。私の経験上、文化機関のもっとも重要な役割は、メディアがつくりだした文化的な偏見を弱体化させることです。



そして、若い芸術家の果たす役割を強化することに積極的なことです。こういった若い芸術家は、国家を代表する「大芸術」ではあり得ません。しかし、現代、そして未来をつくりあげていくと考えるといい世代の声には注意深く耳を傾けるべきでしょう。ポスターにはこう書いてあります。あなたの道は永遠だ。ほら、未来の声がか呼んでいるよ、と。(Dein Weg ist ewig. Hey, das ist ein grosser Schrei aus dem Hals der Geschichte.)

私の発言が次の議論のいい出発点となることを願っています。

ご清聴、ありがとうございました。



イスタリフ焼との出会いと今後

白濁 八洲彦

本日のプログラムにイスタリフ焼を入れて下さりありがとうございました。私、砥部焼の一介の取人を国際交流基金のプロジェクトに参加させて下さりイスタリフ焼との出会いをいただきましたことは本当にラッキーでした。ありがとうございました。しかし、私以上にラッキーだったのはイスタリフ焼かも知れません。それではイスタリフ焼のことを少しお話しさせて下さい。

300年の歴史を有しながら外との交流は少なく40年以上前にフランスの陶芸家が来て以来だと90歳の長老(写真1)ヌールの祖父からよく来たかと歓迎されました。この時がイスタリフ焼との本当の出会いでした。

窯元の有る村は山の急斜面に広がり、道も車の入れる所は少なく、まだインフラ整備も進んでおりませんでした。

(写真2) 2003年のメインストリート・バザールの通りと安藤さんです。(写真3) 2006年日本大使館からの資料を見て電柱が立っているのには驚きました。今は電気も来ているようですがよく止まるそうです。アフガンはまだまだ大変ですがイスタリフの生活は大きく変わろうとしている時機に国際交流基金がイスタリフ焼へ支援してくれた事は大きな力に成ったと思います。

イスタリフ焼は低火度で焼きますが、ここからはその製作過程に入ります。

(写真4) 古い土堀場です。村から約1kmです。土は袋に入れ担いで来る。これは重労働だと言うので、同じイスタリフに生まれても焼物作りに向かない人も居るはずだから分業にしたらどうかとアドバイスしておいたら、今はそうしているとのこと。

土練りは鍬で切返ししながら足で踏んで練る為、踵が割れ血が出て痛くてかなわんとこのことで、日本の田植足袋を昨年12月に差し上げました。これは大変喜んでもらえ、今後何十足でも送ってやりたい物の1つとなりました。

(写真5) 蹴ロクロです。(写真6) ヌールの親父さんです。ロクロの技術力は高く、日本でよく使うトンボ(口経と深さを同時に計る小道具: サンプル1)の話しをしたら、自分達は手が覚えているから必要ないと言われ、これには1本取られました。この蹴ロクロはイスタリフの大切な伝統技術ですから今後も絶対に守って行くようにと強く伝言しておきました。電動ロクロは入れないようにとも言っておきました。

釉薬は大変です。原料はカプールの専門店から買って来るのですが後が大仕事、石臼や石に掘った穴を使い手で細かくします。この作業は早く機械化したいところです。それともう1つの難問が、焼けた釉薬から鉛分が出る。今世界的に規定が厳しくなっており、今迄通り食器として売るのは難しくなるかも知れない。釉薬は大きな問題ですが今は何もしてやれないのが現状です。

窯は外は角で中は丸い(写真7) 薪です。(写真8、9) 窯積みです。これは実に効率のよい積み方ですから将来もしガス窯に成ってもこの積み方は残すように伝言してあります。

(サンプル2) 三足です。これが窯積みの必需品で1回の窯に器が千個前後も入りますので、同じ数だけ必要です。三点の先がすぐだめになるし作るのも大変。器の中にも三点の跡が残る(サンプル3) この跡がイスタリフ焼のトレードマークだから残したい。

しかし改良も必要で2005年の研修に合わせて砥部焼の磁土で三足の三点に付ける“トチ”(サンプル4)を1,700個あまり持たせましたところ、跡が小さくなり何回も使える。小さなトチですがイスタリフ焼300年来の大きく画期的な事であったと思います。ただ1,000個や2,000個ではとても足りない。砥部の土を100kgでも送ってやりたい。

イスタリフには女性だけしか入れない職業訓練センター的な建物(写真10)が有る。ここにイギリスが小さなガス窯を設置してくれたそうで磁土さえ有れば彼等でトチを作れるのだが今は無理です。

もう1つ広いアフガニスタンの何処かに耐火度の高い土が有るかも知れない。それを探すのも今は無理。本当に残念です。

(写真11)ファルク・アーセフィさんが窯焚きをしています。焚き口の上の小さな穴から火の色を見て焼き上がりを経験と勘で火を止めます。焼き上がりにむらは有りますが、火の色が見えることを自慢にしておりました。

今は薪が高騰して焼くのが大変とのこと。イスタリフ焼は900℃くらいで焼く軟陶器です。土の耐火度は1,100℃(サンプル5)くらいで、砥部焼のように1,250℃以上で焼くと(サンプル6)のように熔けて形も無くなりますが、1,100℃までで焼けば鉛害も解決するし、強度も増し製品の幅も広がることを知った彼等はガス窯の導入を強く願望しておりますが、これも残念ですが実現は先の事でしょう。

焼物作りは色々大変ですがもっと大変なのが売ることです。イスタリフ焼には大きな強味が有ります。歴史の中で確立された知名度と販売ルートです。それと商才にも長けております。私達が現地で買った鉢が2ドルでしたがカブールでは75セントで売られており皆で苦笑しました。

2005年の陶工13名、日本での研修は彼等にとって一生の宝物になったと思います。エピソードも多々ありますが次にするとして、資料として配布したアーセフィさんのレポートを見て下さい。

昨年12月に再度来日できた、ラッキーボーイのマティーンとヌールの2人の研修についても配布資料を見て下さい。

私が2人に指導したのは、イスタリフに手びねりで小物(サンプル6)を作る素地がありますので、これを大きく作り、彼等の感性で陶彫、装飾品等を新しい特産品を生まれさせたいとの思いからでした。今回は信楽焼の県立陶芸の森でお世話になり、2人も生まれて初めての大作(写真12、13)作りの楽しさに大喜びでした。同じ物を作るのに有効な石膏型作りにも挑戦してもらいました。時間をかけてイスタリフに育ててもらいたいと思います。

焼物作りは一生掛けてなんぼの仕事です。長い目で見てやって下さい。彼等の将来は明るいと思います。アフガニスタンに早く平和が来る事を願って終わります。ありがとうございました。

-イスタリフ焼との出会いと今後-

白瀧八洲彦

国際会議「平和のための文化イニシアティブの役割
～日独からの提言～」

“Meeting with Istalif and Our Future”

Yasuhiko Shirakata

Presentation at “Fostering Peace through Cultural Initiatives
-Perspectives from Japan & Germany-”
May 14 & 15, 2009



写真 1



写真 2



写真 3



写真 4



写真 5



写真 6



写真 7



写真 8



写真 9



写真 10

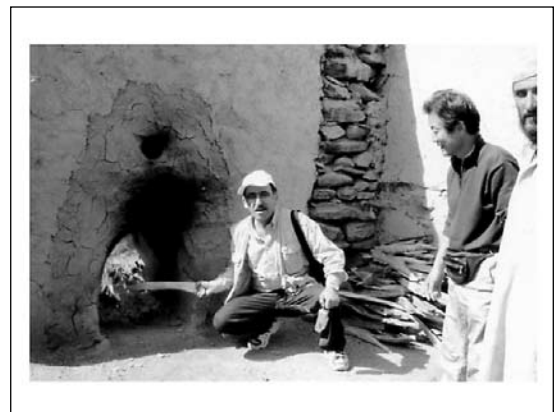


写真 11



写真 12



写真 13

イスタリフ焼を伝統の薪窯からガス窯へ（発表要旨）

永岡 泰則

岐阜県で焼物を焼いています永岡です。第1回目の研修で帰国後イスタリフではガス窯の試作を始めたと聞きました。それまでは伝統的な薪窯を焚いていました。これは大量の樹木を必要としますので環境には良くありません。ガス窯は日本では一般的な窯ですが見た目より複雑なので試作は苦勞すると思いました。それで国際交流基金にお願いして日本でのガス窯製作研修の企画を立ててもらいました。昨年12月にこれが実現して、選ばれた2人の若い陶工が来日して私の工房にて、ガス窯製作が始まりました。初冬の寒いなかでしたが、彼等は通訳を介してプロの窯職人の指導のもとに、質問や写真、スケッチ等をしながら完成させました。イスタリフに帰ったら村の共同窯を作りたいと2人は希望を語っていました。これからのイスタリフ焼はこれまでより高い温度で焼く為の粘土や釉薬の改良、ガス窯のメンテナンス等といった日本の陶工と同じ問題をかかえることとなります。そのために必要な支援は分野ごと（ガス窯・粘土・釉薬）の専門家のアドバイスが必要になると考えます。



研修生とともに（中央が永岡氏）



研修風景



信楽研修

韓国で国境を越えるドイツの映画協力

エーバーハルト・ユンカースドルフ

はじめに、健康上の問題のために本日の会議への参加が叶わなかったことをお詫びいたします。体調不良は深刻なものではありませんが、残念ながら東京行きを諦めざるをえません。ゲーテ・インスティトゥートおよび国際交流基金に対して、私を招待いただいたことに心から感謝いたします。

私の理解では、平和とは、政府の統率力や、強力な人物または国家が弱いものに対して勝利することによって得られる結果ではありません。平和が最終的な到達点や結果を目指すことは稀でしょう。平和は継続的なプロセスであり、脆弱な成分である平和というものを壊さないために毎回新たに適切な意思決定が必要な数多くの局面の積み重ねの結果なのです。

平和を醸成するプロセスにおいて重要な役割を演じることができ、また演じなければならないものはもちろん、文化でしょう。これはヨーロッパにおいても同様に当てはまります。ヨーロッパではほとんどすべての国々で近代的憲法国家の根源的な基礎が実施され、また受容されています。ドイツ文化の仲介者として、世界中のゲーテ・インスティトゥートは平和を情勢するプロセスの中で重要な役割を演じています。この役割は、対話と相互理解を促進する正常なプロセスがまだ発展していない地域や国々に対して特に有効です。

以前の冷戦最盛期では、鉄のカーテンを少なくとも時々突き破って、人間同士の接触を可能にすることができたのは、主として文化とその代弁者でありました。これらの接点が、学びの過程と、その結果としてのより良い相互理解を通じて人々を近づけるという結果をもたらしました。

分断されていたドイツでは、旧東ドイツにおいて西ドイツの芸術家が表に出ることは、常に東ドイツ市民にとっては非常に大きな関心と呼ぶものでした。例えば西ドイツのロックシンガーのウド・リンデンベルク (Udo Lindenberg) は、「パンコー《East Berlin の一地区; 東ドイツ政府の所在地であった》行きの特別列車がある」と題した彼のコンサートツアーで一種の開拓者になりました。彼はまもなく東ドイツの若い世代のシンボルになり、東ドイツの若者たちはその後、公式的には退廃的と呼ばれていた西側世界の音楽をあえて聴くようになり、彼の存在は東ドイツのロックシンガー達にとっては抑圧を恐れること無く西側の音楽を演奏する一種の拠り所となったのでした。

私が生まれて初めてソウルのゲーテ・インスティトゥートの招きで南北朝鮮を訪問した時、私は、1961年のベルリンの壁の建設と1989年のその崩壊を経験したベルリン市民の一人として、分断状態にある国家との遭遇に対して精神的にうまく備えられていると考えました。旅程を始めるにあたり、私は緊張し、好奇心に溢れていました。私は、南と北とで上映したいと考えた自分の映画をいくつか荷物に入れて出発しました。まず私はソウルに行きました。ここは、かなりアメリカ化し、生氣あふれて活動的な都市でした。通りや商店や市場にいた人々からは直ちに勤勉で効率的な印象を受けました。私は映画学校の学生と教員の議論では、ドイツ映画とその映画製作者について彼らが持つ正確な知識に驚かされました。国際的な映画文化についての彼らの大きな関心と広範な知識は、実に印象的でした。彼らはドイツ政府の映画助成金の仕組みを称え、彼らが似たような条件を持たら韓国の映画産業を大変助けるであろうと考えていました。私は長いこと毎夕売り切れを続出していたある劇場をソウルで訪れました。そこでは、ベルリンGRIPS劇場のフォルカー・ルー

トヴィヒ (Volker Ludwig) によるドイツミュージカル『Line Number One』が上演されていました。このミュージカルを元に、私はラインハルト・ハウフ (Reinhard Hauff) 監督とともに非常に成功した映画を製作していたのです。

私は、典型的なドイツのミュージカルが現地ですでに3,000回以上も上演されており、そしてそれが非常に上手に異なる文化世界、異なる言語に翻訳されていることに大いに驚きました。俳優たちと話したときに分かったのですが、どの国にも若者が直面する類似の問題というものがあり、そのため、この舞台作品が韓国でこのような成功を収めていたのです。

私が、二つの国家を再統一することに関する彼らの考えについて聞いた時、会話はいっそう複雑になりました。「北朝鮮が主張し続けている政治指導権を危惧する」、「再統一は、北朝鮮に不足しているインフラストラクチャーの再整備を行うとしたら、南の良い経済状態を破滅させるだろう」……といった答えがありましたが、この答えは再統一のための時期は成熟していないが、いずれその時は願わくは来るであろうとの印象を私に持たせました。

韓国における多くの印象から、私は平壤 (ピョンヤン) に行き北朝鮮の首都を見て、そこの人々に会うのを大変楽しみにしていました。南から北への旅は想像されるようになり複雑でした。というのも、片方からもう一方への単純な移動は不可能であったからです。ソウルから北京に飛行機で行き、そこではほぼ同じ空路を辿って平壤に行く必要があります。この旅程が、南北関係の状況を示していました。平常の空港における歓迎は、徹底的なパスポートと税関のコントロールがあり、旧共産圏国家に到着した場合とよく似たものでした。その国の最初の印象は、私の予想とは逆に、驚くほど良いものでした。空港から市へと通じる広い高速道路は、車よりも歩行者が多く利用しているようでしたが、清潔な都市へ私を導き、そこでは人々が忙しそうにあらゆる種類の品物を非常に単純な手押し車や自転車に乗せて運んでいました。交通信号はありませんでしたが、交通は非常に魅力的で美人の若い女性警察官によって規制されており、彼女達は非常に効率的に仕事をしていました。

ソウルと平壤の間の差異は私にとってはある種の異なった文明の衝突であり、文化的側面に関する対話を想像するのは容易ではありませんでした。しかし、責任者達との最初のミーティングの直後に私は、信頼のための基礎づくりのために重要な文化交流についての理解にはむしろ速くたどり着けるであろうと確信しました。当時、現地では、外国人とコミュニケーションする機会が非常に限られていたため、個人的な接触が非常に重要であり不可欠な役割をもっていたためです。

平壤での日々は、特に、アニメーション映画の製作のための協力および/またはサービスに関してどのような種類の可能性があるかを見つけるために計画されました。担当の政府機関は私が国有 SEK アニメーションスタジオを訪問するあらゆる種類の機会を与えてくれ、そこで私はアニメーターや他のアーティスト、さらにスタジオの幹部達に会って話をする機会があり、私は彼らがドイツとの協力に真剣に関心を持っているとの印象を受けました。

アーティストたちは皆、完璧に訓練されており、特にアニメーターや背景画家達はそうでした。困難なことは、彼らのほとんどがハンゲルしか話さず、英語力が欠けていたことでした。さらに、最新のハイテク装置やコンピュータアニメーションの基礎である信頼できる電力供給のためのインフラストラクチャーも欠けていました。

私は政府があらゆる種類の文化を子どもたちの教育していることに大変驚きました。政府の制度の適用を受ける、音楽の才能がある子どもたちは、10歳に満たないにも関わらず、すでに楽器を名人芸で演奏でき、非常に誇らしげに演奏してくれました。画家、アーティスト、著述家、軽業師、俳優には職業教育までも与えられており、彼らは第一級の教育されたアーティストになるための素晴らしい特別校で訓練されていました。

文化外交の傑作のひとつはゲーテ・インスティトゥートによって実現されていました。いわゆる読書室(Reading room)が設けられ、私は建築中のこの施設を見学しました。2004年にオープンしたこの情報センターは世界中の強い肯定的な評価を受けました。というのはこの施設が、ほとんどの市民に対し外国メディア製品、特に西側諸国のものの消費が禁じられているこの国で、今日ある唯一の外国文化施設であるからです。

私は、自分の訪問が、関係者をお互いに近づけ、自信と信頼を築くことに助力できたと確信し、平穰を去りました。この過程を始めるにあたり、私は、南北朝鮮に対し、有能な韓国人映画技術者が、ミュンヘンで言語を学び、またドイツ映画がどのようにして、またどのような技術的装置を使ってつくられるかを学ぶという6か月間の奨学金、3名分を申し出ました。この協力は、ミュンヘンの有名なArri-Companyとバイエルンのラジオおよびテレビ局のBayerischer Rundfunkと一緒に子ども向けのテレビ・アニメーション・シリーズの製作に関して実現されるはずでした。この好意に対するお返しとして、南北朝鮮側からは、次回の平穰での国際映画祭の審査委員長としての招待を受けました。私はこれを大きな榮譽であり、親善と信頼を築く意思表示であると捉えました。

2006年9月に私はこの招待を受諾しました。私は2004年にベルリン映画祭で会ったきりとなっていた古い友人達に再会するのを楽しみにしていました。その場で彼らは初めて、ソウルのゲーテ・インスティトゥートとの協力を通じて、彼らの映画のうちの何作品かを、非常に厳しい批評で知られる国際的な聴衆に見せたのでした。そう、ドイツと南・北朝鮮間の映画に関する協力は機能するように見えたのです。

このフェスティバルに与えられた「独立、平和、友好関係」というモットーは、これらの言葉の一つさえもほとんど存在しない国のものとしては、驚きに値します。それと同じくらい私にとって驚きであったことは、コンペティションでのいくつかのドイツ映画に関する結果でした。それらはすべてゲーテ・インスティトゥートによって推薦され、フェスティバルが受諾したものであり、自由、独裁、紛争という課題を集中的に扱っているものだったのです。

既に2004年の『ローザ・ルクセンブルグ』のような映画での権力の乱用に対する非難が表現され、また、暴力がどのようにして実現に至り、どのような結果につながるかを表した『カタリーナ・ブルームの失われた名誉(The lost honour of Katharina Blum)』がこのフェスティバルで上映されました。コンテストで受賞したマルガレーテ・フォン・トロッタ(Margarete von Trotta)の映画の『約束(The Promise)』は、自由のない東ドイツから自由な西ドイツへの4人の若者の脱出を扱っています。3人の亡命者は成功しますが、一人の男子は捕らえられて逮捕され、一方で彼のガールフレンドは西ベルリンへ到達できます。二人の関係は何年間も破壊されてしまいます。『約束』は平穰のフェスティバルでグランプリを授与されました。この映画は、北朝鮮の現状を明確に喩えていると言えます。

フェスティバル審査委員団は、2名の女性、1名の中国人学者、1名のロシア人映画製作者、1名のイタリア人フェスティバル・ディレクター、1名の文化省代表の北朝鮮当局者、および議長を委託された私自身から構成されていました。彼らの大半はもっぱら通訳を通してしかコミュニケーションができませんでしたが、この審査団の雰囲気と環境は第一日目から最終日まで非常に良いものでした。コンペティションの映画が審査団に見せられたホテルから「文化ハウス」の間の日々の移動はいつも通りでの状況を発見する瞬間であり、例えば、私は、非常に美人の女性ばかりからなる交通警察官が交通をどのようにさばいているかを目撃しました。

私はコンペティションのドイツ映画にハンゲルのサブタイトルが付いていることを高く評価しましたが、これはゲーテ・インスティトゥートが、現地の聴衆がオリジナル音声の対話を聞くことができるように管理、監督したものでした。このフェスティバルの間に見せられた73の映画のほぼすべてが聴衆の関心を引いて上映が売り切れになり、12,000人以上の観客が毎日映画を見に来ました。彼らが支払ったのか、または支払わずに映画を見るよう委託されたのかは私には判りませんでした。しかし、このことは私には何ら重要ではなく、もっと重要なのは彼らが、自由がないこと、人権侵害、検閲、言論の自由の欠如、また軍事的独裁を扱う批判的映画を見ることができたという事実でした。私が確信していることは、知的な聴衆には、自分の国についてのある種の推論が実際に伝わり理解されたということです。

私の動機づけは、我々が当たり前としている言論の自由や民主的生活が存在しない国に行き、普通の観客として私ができるよりもっとオープンなやり方で審査委員長の立場で人々に話することに挑戦することでした。そして映画を見ている聴衆の関心や受容、時には熱狂的な反応を発見するのは素晴らしい体験でした。

フェスティバルの主たる賞は『Napola (訳注：ナチ・エリート養成学校)』に与えられましたがそれはアドルフ・ヒットラーの悪名高いエリートカレッジの一つについての物語でした。監督は物語を、最初は体制によって惑わされたが徐々に疑い始める16歳の生徒の観点から話しました。特別賞は『ベルンの驚異 (The wonder of Bern)』と『ソフィー・スコールの生涯 (The life of Sophie Scholl)』に与えられました。ドイツの批評家の中には表彰されるべきもっと良い映画があったらと不満を言う者がおり、そのフェスティバルに参加することは単なる宥和の行為でしかないと嘆く者もいました。

私は、賞を与えるのに他の映画があったであろうという点には合意しつつも、賞を受けた映画は他の映画ができなかつたらう仕事を十分やったことを確信しています。私は不平を言う人々には同意しません。困難を抱える地域に行く場合、参加することだけによってその国の仕組みを変えられると期待する人は勿論誰もいません。そういう地域への各々の参加者は、一定の啓発を起こす一本のろうソクを立てる以上の何もできませんが、多くのろうソクはおそらく精神的な照明につながる可能性があります。

文化や文化イニシャティブは境界と障害を克服することができます。文化的協力はおそらく和解のための試みを助けます。政治的に困難な仕組みに対処するには、不在であつたり非活動的であつたりするよりは、関与することこそが、間違いなく、より良いものです。相互に関与することは対話と親善につながり、不在や拒絶は行き詰まりにつながるからです。

夢の中の同志 ～ドイツー朝鮮半島の初の映画共同制作事業：その開発と国際的な評価～ (発表要旨)

ウリ・ガウルケ

北朝鮮で映画を撮影するという事は、人工社会の虚像と現実とに直面するという事であり、これがリアリティなのだを教えてくれる危険に遭遇することである。このことに対処する私の方法は、主人公を見つけることである。観衆の視線に触れ、観衆がついていかずにいられないと感じるような強い力をもった主役女性である。この主人公の外見の矛盾と存在の開放性は、当局にとって悪夢となる事がわかる。自分の個人生活について語る様子は、撮影を通じて絶え間ない論争の種となった。目立たず、どこにでもいて流れに逆らわないものとして北朝鮮女性のイメージを映像化することが、私に期待されていた。それが私の映画の出発点だった。当局が私のカメラの前で人々がどのように演じるのかを決定する権利を保有しているというのが、映画作家として私には受け入れられなかった。私の狙いは、主役女性の個性が自己実現できるだけの空間をつくりあげることだった。こうすることで、周囲のリアリティにある多くの不条理や危険が明らかになっていった。いつもプロジェクトを潰そうとする脅威にさらされていた。ゲーテ・インスティトゥートの庇護だけが失敗するかもしれないぎりぎりのところを救ってくれた。失敗ということになれば当局の面子を潰すことになるのだ。ゆっくりと、しかし確実に、両サイドが歩み寄らざるを得なくなり、異なった視点を理解しようと努めるようになった。この映画は、世界50か所以上の映画祭で上演された。この映画を抱えて旅をするなかで、人々が好奇心をもっていることに遭遇した。誇りを傷つけられることを怖れるあまり開放的になることに怯える国に対してである。よその人々、よその文化を理解し、興味をもつということは、この恐怖に直面することである。このようにして、理解が可能になる。私は、私の映画がそのために役立つことを願っている。



ドイツの対外文化に関する取り組みの3つの原理 ~ ifaの経験と反省~

ロナルド・グレーツ

ご来場の皆さん、ご来賓の方々並びにご講演の皆様、この場に立たせていただく機会を与えていただきに光栄に存じます。本日は、文化と摩擦の問題についての対外文化関係研究所 (ifa) の経験をお話ししたいと思います。まずは自己紹介させていただきますと、私はロナルド・グレーツと申しまして、ifaの事務総長を務めております。差し支えなければまずわが国外務大臣フランクヴァルター・シュタインマイヤーの言葉を借りてお話を始めたいと思います。「文化や文化交流は、平和条約ではない。持続可能で堅固な平和に達しようとする真剣な努力において常に必要となる核心的な道具なのである」。

対話や文化行動のような建設的な平和手段を通じて解決が試みられる紛争は、自由、法治、正義、ひとりひとりの人権尊重につながります。国家間の健全な関係を構築する役割とともに紛争地域に草の根の信頼と対話をもたらし、促進する役割は、多くの場合、学び、発展し、変化するために人をもっとも奮い立たせる手段であるのです。

しかしながら、ご存知のとおり、もっとやっかいな一面もあります。差異と変化が暴力によって治められることも少なくありませんが、これが文化的暴力を通じて合併症となるのです。社会的排斥、(たとえばメディアにおける) 分極化、(たとえば教科書における) 民族純血を主張する歴史的事実の歪曲、周縁化の手段としての単一言語政策、集団・個人のアイデンティティそのものや価値観への攻撃などです。

これらコインの両面を前提として、では、何ができるのでしょうか。成功への秘訣を申し上げることはできません。そんなものは存在しないからです。けれど、私どもの経験、そして最近の反省をお伝えすることならできましょう。

ドイツの対外文化政策は、3つの個別の原理から見ればよく理解できるでしょう。第一には、自分自身を国際社会に紹介し、地位を確立することです。第二に、対話を促進し、自身と他者の間に信頼関係を構築しますが、これは暴力の発現を抑える手段になります。第三に、危機にある地域に第三者として介入します。よって、文化外交は国際関係において、また危機的状況の予防において、さらに紛争の変革と平和構築において、働くことになります。

皆様、ここからのお話をこの3つの原理にそって構築させていただきたいと思います。その上で、ifaの危機的状況の予防と紛争の変革における経験について特に強調させていただきます。最後に、いくつかの難問やジレンマに焦点を当てることで私どもの成果に対する反省を知っていただき、私どもの仕事のガイドとなり源泉となる考えをお話いたしましょう。

ドイツ文化外交政策の3つの原理

1. 国家的アイデンティティと国際協調

第一の原理、すなわちドイツを国際的な舞台で紹介し、地位を確立することに関して、2つの主な政策課題が私どもにはあります。国家的アイデンティティと国際協調です。これは加害者としての過去を見つめ、それを償うことであり、第二には将来の危機を予防するため堅牢な関係を構築する作業をおこなうことです。

過去に対処するドイツのアプローチは、長年の間に劇的に変化しました。極度の罪悪感と触れることのできない恥辱によってもたらされた「麻痺したような沈黙」がありました。国際関係の緊張を破るために、ベルリンの壁のどちら側でももっとも疑いようのないドイツ文化の伝統が用いられました。これがもっともよく現れたのは、一方の側でゲーテ・インスティトゥートの創設と命名が行われ、もう一方の側でヘルダー・インスティトゥートの創設と命名が行われたことでしょう。戦争世代の子どもたちが成長してようやく、学びと対話の雰囲気が生まれました。特に注目してほしいのは、ドイツとフランスの青少年交流プログラムの実現です。ここで、親の世代は自分たちの子どもにかつての敵国を訪れさせるようになったのです。

これは、世紀後半の冷戦終了とともに、文化政策手段の重要な変化と位置づけられます。たとえば、ドイツとポーランドの関係育成についての集中事業があります。これは、ドイツとポーランドの600以上の姉妹都市提携、さらには市町村区のパートナーシップ、学校・大学の姉妹校提携、学会の提携が象徴しているでしょう。さらに加えて文化関係でのこの進展を象徴するものとして、ワルシャワでのドイツーポーランド国際校の設立があります。これは2005年のドイツ連邦共和国とポーランド共和国の条約提携の成果です。映画、文学、演劇、記念施設、ダンスなどはっきりとした記念政策がドイツの国際社会への復帰の道筋をつけました。今日ではこれは、紛争後諸国の和解プロセスのモデルともみなされるようになっていきます。

しかしながら、未来に向けて備えるには、さらなる作業が必要です。国際社会の舞台に登場する諸国はドイツを含め、希少化する資源の問題に取り組まねばならず、また、経済の中心、政治力の中心の変化についていかなければなりません。欧州委員会の統計局による最近の調査では、多くの西ヨーロッパ諸国の人口は縮小傾向で、これが見えないところで教育や社会サービスに長期的影響を与えていきます。この人口縮小の例外はイギリスで、ここでは移民が鍵を握ると推定されています。私たちの計画と戦略立案は長期的視野に立ったものでなければならず、文化横断的協力が全面的に必要なものなのです。

2. 危機予防、信頼構築、対話促進に取り組む

第2の原理は、「危機予防」あるいは別の観点からいえば「平和促進」です。国際舞台の諸国とドイツの間で平和と寛容を促進する関係構築は、どのようにすればいいのでしょうか。

活動は万華鏡のように多彩ですが、ここでは2つの分野に注目しましょう。これは、今日、この時代、特に重要だと思われる領域です。すなわち、ヨーロッパとイスラム世界の対話、そして

教育とトレーニングです。特にメディア報道に中庸よりも極端が多くスペースを割かれる近年の傾向からいえるならば、私どもはヨーロッパとイスラム諸国の間の対話促進を静かに、穏やかに継続してきたといえるでしょう。

ヨーロッパとイスラムの文化対話プログラムは、学校間の提携や、生徒、教員、研究者の交流を通じて相互理解を促進してきました。これを支えるのは、インターネットの対話ポータルであるQANTARAや文化交流インターンシップの交換プログラムなどです。前者はifaがゲーテ・インスティトゥートとの提携で先鞭をつけたものであり、イスラム世界と西欧世界の間のインターフェイスの役割を果たし、後者は若手専門職やボランティアにそれぞれの専門力や文化間での活動能力を成長させるという視点に立ったインターンシップの機会を提供しています。

さらに、教育とトレーニングについていえば、ドイツは教科書などのバイアスのかからない教材開発を促進するイニシアティブをサポートしてきました。ゲオルク・エッケルト国際教科書研究所はエジプトやヨルダンなどの多様な諸国の機関と提携し、アラブ諸国とヨーロッパ諸国の教育メディアにおける「自身」と「他者」をあらわすものを分析する作業をおこなう長期的プロジェクトを継続しています。

二つ目のトレーニングの例として、お伝えしたいのは、ヨーロッパ-地中海青少年議会です。これは2007年ドイツが議長国期間中のEUで設立されたもので、100人の青少年のトレーニングに関するものです。目標は地中海地域の文化的対話の促進を継続することであり、国際コミュニケーション技術と政治的意思決定の理解における発展的トレーニングを提供することです。

3. 紛争の変革と平和構築への取り組み（特に第三国として）

最後にドイツの関わる文化活動の根底にある第三の原理は、特に危機にある地域における利害関係のない国としてのものであり、つまりは紛争の変革と平和構築事業です。これについては、東ヨーロッパ南部とアフガニスタンでおこなわれている地域的な試みのいくつかを用いてお話ししましょう。市民社会の核となるグループ、特に青少年グループとの私どもの取り組みです。

政策とNGO活動の交差点にあるのが内戦解決のためのifaのzivikプログラムです。これは非政府組織とドイツ連邦外務省の両者に対する仲介機関、諮問機関としての役割を果たします。そして地域の平和活動団体が推進する平和プロジェクトを経済的に支援します。さらに成功例や教訓などの——そこには文化活動も含まれますが——評価、分析、発見、記録の実施もその仕事です。

東ヨーロッパ南部では、安定協定の枠内でのifaの仕事は自由なメディアの発展支援に集中しています。南東欧安定協定は、民主的構造の再構築や人権の確立、市民社会の強化のための文化・教育プロジェクトへのドイツの取り組みの好例となっています。

自由なメディアの発展と促進に関しては、ifaは旧ユーゴスラビア地域諸国とアルバニア、ブルガリア、モルドバ、ルーマニアにおける集中プログラムを開発してきました。たとえば、モルドヴィアでは、当時の変革プロセスに焦点を当てる上での在来メディア機関の限界に対して直接、

Media-ImPactが2003年に設立されました。これは詳しくいえば、開かれた社会と民主主義の価値観に向けたメディア機関、世論、知識人コミュニティの啓発をサポートする狙いをもっています。加えてMedia-ImPactは、メディア制作の質を高めるトレーニングとサポートを提供しました。

同様に、アフガニスタンの安定協定は、はっきりと述べられた目的の下、同じく広い活動範囲をもっていました。その中には「文化活動を通じたアイデンティティ形成と独立メディアの確立」がありました[11]。これには、学校や高等教育提携、奨学金の促進が含まれています。さらに、女性やジェンダーの問題を対象とした手段もあります。

法治社会実現や統治改善に関しては、マックス・プランク比較法国際法研究所がアフガニスタンの家族法に関する教科書出版に取り組んでいます。これは成文法と不文律のイスラム法、地域の慣習法の共存から起こる国家機関に対する不信の広まりと、その結果としての法律上の不確実性に対する直接の反応でした。もうひとつの例としては、伝統的な部族構造での対話促進に取り組むハインリヒ・ベル財団があげられます。この財団の取り組みが特に重要なのはアフガニスタンの民法、刑法の改革で、たとえば少女の強制的な結婚といった問題に幅広い議論を巻き起こす上で重要なインセンティブを提供しています。

このことからさらに続いて、市民社会の核となる集団との取り組みについて少し注目してみたいと思います。青少年集団です。多くの方がご存じのとおり、青少年はかつてないほど戦争や略奪のための動員と徴兵の対象として脆弱な集団となってきています。しかし、青少年が民主化のための平和的社会変革において貴重な役割、さらには必要不可欠な役割を果たすことは、国際的な経験から明らかです。ドイツの取り組みとして、これは実施レベルで認められており、ドイツ技術協力公社 (GTZ) の機構内に見られるような組織としての青少年セクターの創設にみることができます。私ども ifa としては、さらに継続してこの流れを称讃、支持していきます。

このこととは別に、2つの個別の青少年プログラムを外国文化政策の枠組み内で指摘させていただきます。D@Dalos と、モバイル文化コンテナプログラムです。

ユネスコの人権と民主主義のD@Dalos教育サーバーは、東欧南部を対象に、政治教育に関する教材、トレーニング教材を提供しています。10か国語で利用可能で、さらに国際姉妹校提携や学校プロジェクトの創設にも機能します。サーバー利用者が月に10万ビジターということからも成功の度合いがわかるでしょう。

欧州安全保障協力機構 (OSCE) メディア代表部の監修の下、モバイル文化コンテナプロジェクトが2001年に開始されました。このプロジェクトは青少年政策の交換とメディアへのアクセスのためのスペースを提供する16のモバイルコンテナのコンセプトを巡るプロジェクトであり、音楽、演劇、映画のイベント含みます。青少年が出会い、未来について語り合う安全なスペースの創設がその牽引力です。

難題と指針となる概念

このお話の最後の部分で、私どもの仕事が直面する難題やジレンマ、解決していない疑問を

提起したいと思います。そして、私どもの仕事を導き、奮い立たせ続けてきた概念を示したいと思います。難題としては4つがあげられます。

文化の両義性。文化そのものは、平和の原因にもなれば紛争の原因にもなります。冒頭で述べたシュタインマイヤーの言葉を繰り返しますと、「文化や文化交流は、平和条約ではない」のです。これは触媒をもたらす手段です。あいにく、文化は分極化と暴力の手段としても用いることができます。文化における介入では常にこのことを意識しておく必要があり、紛争の場においてはなににおいてもこの両刃の剣を十分に理解し、どのようにして介入が変化を支援するだけでなく悪化させてしまうかを知る必要があるでしょう。

文化の絡み合い、アイデンティティ、記憶。ドイツでの私たち自身の経験から、過去と向き合うとき、私たちの国家的アイデンティティは文化とつながっているということに気づかされてきました。特に和解の作業では、これら三者のうち一つと関わって他の二つに触れずにいることは不可能だと理解することが必要です。

影響や成功の度合い、効果の測定。文化がそもそもの定義からして感知不能である場合が多いという私たちの分野では特に、自分がどれほどの役に立ったのか、知ることも評価することも、まだまだ十分にはできません。過去十年には紛争研究において確実な進歩があり、私たちの仕事を評価する上で前進がありました。特にDo No Harmのような平和・紛争影響アセスメントといった専門用語で語られる様々な方法論においては、さらなる研究が分析においてもアセスメントにおいても必要です。仲介、平和教育、対話プロセスといった紛争介入の効果のアセスメントする上でこの分野の研究に立脚しても、私どもはまだまだ文化行動の紛争への影響をアセスメントするには「研究者のヤマ勘」に頼るしかありません。あいにくなことに、まだ将来に期待をかけているような段階なのです。

最後の難題は、**文化事業あるいは外交をより幅広い枠組みのなかに位置づける必要性**です。平和のみならず紛争が社会のあらゆる局面に関わってくるものであり、生活のあらゆる部分に影響し、その帰結からは誰も逃れられないものであることを私たちは知っています。問題は、多くの場合痛みをともなうジレンマとしてつながりあっています。平和プロセスか法の統治か。開発がなければ平和がなく、平和がなければ開発がないこと。原則にもとづいた交渉と、休戦下でも絶え間ない小規模な対立や安全保障の崩壊が続く現実のリアリティ。自分たちのささやかな努力がより大きな構図のなかにどのように嵌るのかに目をつぶってなどいられないのです。実務的で微小なプロジェクトと学術的理論の間になんとかバランスを見つけねばなりません。コラボレーティブ・フォー・ディベロプメント・アクション(CDA)の「平和実現プロジェクトの反省」によって、これが「Peace Writ Large」という用語の下でどのように嵌るのかを検証する手がかりが得られるようになったところです。

それでは最後に、私どもの試みを導く概念を少しお話しして終わりにしましょう。この分野の草創期から続いている概念もあります。しかしながら、私たちは日常の仕事の中でも常にそこに戻り、忘れないようにすることが大事だと思うのです。

長期的な関与。社会交流は時間がかかります。苦しみと社会的なトラウマ体験の癒しは、多くの場合、一世代では済みません。対話と信頼構築の試みは何であれ長期的視野がなければ

ならず、一定の忍耐力を維持しなければならないことも認識しておくべきでしょう。

文化事業における利害関係のない第三者の限界。極度に孤立化した社会では、もっとも建設的な役割が、単にさまざまな場からやってきた人々が学び、相互理解へと進むフォーラムの創設である場合も少なくありません。ときには相互理解を保障する安全な場所を仲介して提供することが最良の手段であることもあり得るのです。

地域的な文脈の特異性。文化事業においては特に、取り組みの形態は地域の文脈によって定められるべきです。さらに加えて、過去数年の評価書や影響アセスメントでは、プロジェクトの効果は非常に多くの場合、ターゲットとなる集団や時節との関係でこの文脈に非常に強く結びついていることが示されています。万能の解決策やあらゆる場所で通用する解決策はありませんが、あらゆる失敗に共通するものは存在します。プロセスが地域の手を離れて存在するとき、持続的な平和はあり得ないのです。

戦略的パートナーシップの増強と政策・草の根のつながり。社会的な記憶に取り組む事業では特に、芸術家、文化従事者、平和・紛争研究者、その他あらゆるセクター・専門領域からの関係者の間の緊密な交流が必要です。政府機関、議会、市民社会からの支援がそれぞれあってはじめて、堅牢で揺るぎない文化的記憶が政治・社会に統合されるのです。

最後に一つ概念をお話しして、終わりにしましょう。ここまで私のお話の中でさまざまな成功事例を取り上げてきましたけれど、忘れてはならないもっとも重要なことは、それが国際関係に関することであれ文化的行動、危機予防、平和促進、紛争の変容や平和構築に関することであれ、バランス感覚です。自分たちの努力は大きな協調した試みの中のほんの小さな一部分に過ぎず、慎みを忘れてはなりません。このお話を、ドイツの戯曲家ベルトルト・ブレヒトが提示した質問で締めくくります。

「ピラミッドをつくったのは誰か。歴史書には諸王の名があふれている。しかし、石工や左官の名は忘れられた。」

ご来場の皆様、ご来賓、ご講演の皆様。長時間ありがとうございました。皆様の今後のご活躍を心よりお祈り申し上げます。

[i][i] "German involvement in Afghanistan - stability and reconstruction", German Federal Foreign Office, 15.02.2006 at <http://www.auswaertiges-amt.de/diplo/en/Aussenpolitik/RegionaleSchwerpunkte/AfghanistanZentralasien/EngagementDeutschlands,navCtx=3D265692.html#t18> (Accessed 020509).

平和のための文化の役割について

ハンス＝ゲオルグ・クノッブ

ありがたいことにドイツと日本の間には平和をつくりだすための文化イニシャティブは必要ありません。両国間にはいわゆる平和が存在するわけですが、この会議のコンセプトの根っこにある「平和」という意味でも平和なのです。プログラムに書いてあるように、平和とは単に戦争がない状態ではありません。まさにそう思います。そして、この「平和」がドイツと日本の中に疑いもなく存在すると認め合えるのは、喜ばしいことであると。こういう状況であれば、「戦争がない状態」に加えて「何」がなければ平和とはいえないのか、その「何か」についての研究をスタートさせることができます。本日の集まりもそういうことですし、これを継続していくこともまたそうです。そして、この「何か」の役割を果たすのは、多くの場合、文化なのでしょう。

この「何か」には、信頼が必要です。そういった信頼が、日本とドイツの間にはあります。そして本日と明日、とりわけ国際紛争や危機的状況に対処する上での文化イニシャティブの役割についてともに語り合おうというこのときにあってさえ、ご挨拶の冒頭で次のように指摘させていただくことは決して不適切ではないと思います。すなわち、平和の状態にあってさえ、このようなイニシャティブは決して無用ではないのだと。平和が平和であるための「何か」を構成する一部として重要なものであると。

ドイツと日本の関係は、満足すべき方向で進んでいます。現在進行中のこの2国間の文化イニシャティブは、第一には、双方が平和指向の文化に関心を示していることを表明することにもなります。第二には、両国間の関係をさらに強化する役割も果たします。さらに第三に、文化イニシャティブによって経験の交換ができるようになります。この経験とは、特に、20世紀の負の遺産をどのように克服してきたのかという両国の歴史経験のことでもあります。

けれど、これはまた、現在の日々はどう対処するのかという経験についてのことでもあります。すなわち、当然ながら何よりも現代のグローバル化の問題に関わってくるわけです。こういった交流が当事者双方にとって非常に有益であることに、疑いの余地はありません。

小倉和夫さん。この集まりを東京で開催できたということは、日本がこういった交流に関心を示していることのあらわれです。私の側、ドイツにおいても、こういった交流に対する関心が高くなっています。国際交流基金とゲーテ・インスティトゥートの共同作業の成果は多様であり、非常に豊かだと私は思うのですが、これこそがこの関心の生の結実でしょう。私どもの側から申し上げれば、このような交流が存在するのは日本文化に関して何かを学びたいという結果を求めてのことばかりではありません。このような経験の交流が、自らのドイツ文化に対する理解を深める機会を常に与えてくれるからでもあるわけです。文化交流が自分たち自身について新たな発見をもたらしてくれる機会となることには疑いの余地はないと思います。以前には当たり前だと思っていたことを分析する機会が与えられます。それほどストレートではないかもしれませんが現代においては必要とされるこのプロセスには、平和を平和たらしめている「何か」が必要となるわけです。

実のところ、自分自身の見解とアイデンティティを分析するこのようなプロセスは、どんどん複

雑に、わけがわからなくなっていく世界ではとても大切なことだと思います。レベルの高い共感にはこれがないといけないのですが、そういった共感がいろいろな文化、国家をすり合わせていく上で力になります。すなわち、はじめなじみのなかった視点へと、さらには地球的な視野へと自分自身を考えていく能力なのです。

この能力がなければ、21世紀の文化の難問をこなしていくことはとても難しいことになるでしょう。

ある意味では、この集まりそのものが既に日本とドイツの間で分かち合うさまざまな文化イニシャティブの一部分を形づくっているともしえますし、そのおかげでこういった経験の交流ができ、さらに共感の交流ができるのでしょうか。ゲーテ・インスティトゥート事務総長として、この集まりのコンセプト形成から開催準備を共同で行っていただいた皆様に心からお礼を申し上げたいと思います。実のところ、ゲーテ・インスティトゥートにとって、文化イニシャティブを利用することでどのように異なった社会の間の平和志向の関係が作りあげられ、サポートされるのかという問題は、とても大切なのです。そして、経験の交流一般のため当地に国際交流基金を訪れる機会をもてたことはとてもすばらしいと思うのですが、さらに、両機関が持続的に実施している作業が多様かつ、私の見るところでは大きな成果をあげていることがすばらしいと思うのです。

けれど、始めるにあたってもうひとつ述べさせていただきたいことがあります。ここで話しする機会を与えていただいたことに、一個人として感謝を申し上げたいのです。個人ベースの話し合い、直接の交流は、文化間の対話プロセスにおいて大変重要だと思います。個人対個人の交流は、何事にも替えがたいものです。ある意味、このような交流を可能にしたこと、より正確に言えば対等の立場で可能にしたことが、今回の作業の核心であるといえるかもしれません。目を見合わせるができる人々の交流は、平和の特徴である「何か」の一部を形づくっていきます。ホストである皆様も、まさにそのように感じておられるのだと信じられることはまさに喜びであります。さらに、ここで話しできる機会を与えていただいたことは、個人として大きな名誉に感じるところでもあります。ほんとうにありがとうございます。

実際、すべての国際関係、文化間関係がドイツと日本のあいだほど十分に機能するかといえば、残念ながら全くそうではありません。世界を見渡せば、多くの地域で実りある文化間交流の基礎を置くのによりやく手をつけはじめたばかりというのが実状です。その上に何かを建てる作業は、まだまだこれからなのです。そして世界の地域によっては、こういった作業がそうやすやすとは進まない土壌があるわけです。ときには、よりやく手に入れた相手国の窓口がすっかり潰されてしまうのを防ぐために努力しなければならないと思われる場合もあります。したがって、目標設定にはある程度の注意が必要になってきます。文化摩擦に取り組むにはまだまだ、まして摩擦解消などは問題外で、まずは文化の触れ合いをどのように始めるかが問題になる場合もあるわけです。

あるいは、こうも言えるでしょう。平和を支える文化イニシャティブに関して語るとき、ネットワーク形成に関する話題が出ることがあります。世界の中には、まず第一歩の必要条件として、築き上げようとするネットワークを裏打ちする基盤あるいは定点を見出すことを目標としなければならない地域があります。ときにはこういったことでさえ実に難しいのです。ここで考えているのは中東や北朝鮮といった地域のことです。友好的な文化交流を妨げているものは何なのでしょう。

21世紀の異なった社会のあいだの文化関係に直面する難題とはどのようなものでしょうか。確かに平和の特徴であるべき「何か」を求めるのをときとして妨げているのは何なのでしょう。

最初に指摘したいのは、極端に暴力的な20世紀の遺産が長期的に大きな問題になるだろうという認識を共有しましょうということです。紛争を研究する人々の考えでは、第二次世界大戦のような戦争は、少なくとも三世代後までの社会の思考プロセスに大きな後遺症を残します。三世代といえざっと100年ですが、そのうちの64年が経過したに過ぎません。戦争が心に残した傷跡は多いのですが、たとえばトラウマ化などは一定期間経過しないと表にあらわれてきません。これはドイツにもはっきりあらわれていますが、たとえば多くの難民の運命を考えればわかることです。そして20世紀に日本が加わった戦争の現場では、それが人々にもたらした惨劇を背景に、排斥が起きました。

このような遺産が、文化間の対話と文化イニシアティブの作業のために重要な枠組みをつくります。これら遺産を考えようとすると、すぐに巨大な難問を思い起こすでしょう。戦場や強制収容所でのことです。ドイツがユダヤ人に負わせた過ちの数々です。

20世紀がどれほど深く我々の骨身につきささっているのか、それがどれほど社会の一般通念の一部をつくりつづけているのかは、多くの事例に見られますが、これは一見したところではありそうにもないことに思われるかもしれません。たとえば私は、最近、ドイツの芸術ジャーナリストであるニルス・ミンクマーの非常に個人的なエッセイを見て考え込んでしまったのですが、このエッセイは彼のフランス人の祖父について書かれたものでした。ニルス・ミンクマーのお母さんのお父さんはフランス人、つまり彼から見ればフランス人のおじいさんにあたるわけです。

このおじいさんがドイツに孫を訪ねてきたときのことで、ことあるごとに、ドイツ人が炙ったソーセージが好きなのに驚いたというのです。この簡単な料理に対するおじいさんの態度は、なにもフランス人がグルメだからというわけだけではなさそうです。ソーセージまるごとという考え方に、おじいさんが落ち着かないのは、全く別の理由からでした。おじいさんが若いころ、さんざん聞かされたプロパガンダに、ドイツ人は食事を質素にしてその分の貯蓄を軍備に回し、戦争に備えているのだというものがありました。あぶったソーセージを見るたびに、これを思い出したというわけです。

もちろんのこと、おじいさんは、ドイツとフランスのあいだに戦争が起こることなどどう考えてもありえないことはわかっていたはずですが、心の奥底深くには、いまだに大きな疑念、落ち着かない気持ちが残っているわけです。おじいさんの視点から見れば、驚くようなことでもありません。100年のあいだに、ドイツは3度もフランスと大戦争をしているのです。1870～71年、1914～18年、そして第二次大戦の1939～1945年です。帝政ドイツ時代には、フランスにとってドイツは伝統的に敵国でした。そしてドイツが食を切り詰めて軍備増強に励んだというのも事実です。ドイツ社会でこのことはほとんど忘れ去られているかもしれませんが、当時ドイツと交戦国だった諸国に住む人々の胸のうちにはしっかりと刻み込まれているかもしれないのです。歴史の記憶というものは、実に長く消えないものなのです。

この小さな事例が示すのは、2つの事柄です。まず、人々の日常生活のふつうの経験では、はるか過去にまでさかのぼる伝統と態度を考慮する必要があるということです。

これは、何十年も和解達成にとりくむ無数の努力が続けられてきたドイツやフランスといった社会にさえあてはまります。ドイツとフランスの市町村には2000以上の姉妹都市提携が結ばれています。フランス料理やフランスのファッションとまでいわずとも、フランス文学やフランス映画のファンはドイツにも非常に多いのです。その一方、フランス哲学者はドイツ思想家の影響を受けることが少なくありませんでした。フランスとドイツ双方の学校で教材として用いられる国際的な歴史教科書もあります。余談ですが、このプロジェクトはとても好評でした。関連の興味深いイベントがこの東京のゲーテ・インスティトゥートでも開かれたそうですね。それに、かつての戦時敵国がどのように和解できるのかということに関連したドイツと日本共催の事業があったそうで、実り多いものだったと思います。

ともかくもここは認識しておかねばなりません。現在のドイツとフランスのあいだのように状況が満足行くものであったとしても、数多くの多様な文化イニシャティブにもかかわらず、戦時中の記憶は怖ろしいほど消えないのです。過去はいまだにそこにあるのです。これは決して、文化イニシャティブに効果がなかったということではありません。まったくその反対で、記憶の上にああいったことは二度とあってはならないのだという共通の意識をつくりだすことが可能だということを示しているわけです。そして、そういった文化イニシャティブはいくらあっても十分とはいえないということも示しています。もしもそういったことが過去60年以上も友好的な近隣関係が存在するドイツとフランスのあいだにいえるのだとすれば、世界各地の戦争の記憶がもっと生々しい地域においてこういった考え方がさらに有効なのは疑いもないことでしょう。

あるいは、ヨーロッパの軍隊が攻撃的な優越意識でもって実際に押し寄せてきた植民地における状況においてもそうでしょう。

植民地主義は、特に深く、未だに癒えない傷を残してきています。というのは、それが帝国主義的世界秩序を体現していたからというだけでなく、西欧文化がその他の文化すべてに対して優越するという秩序でもあったからで、そしてその結果として帝国主義に対する文化的正当性の根拠を提供してきたからでもあるのです。

これは、今日でもいまだに有害な心理的態度を、たとえそれが意図しないものであったとしても、生んでいます。そして、その結果、これが今日も世界の多くの場所でヨーロッパと旧植民地地域のあいだの関係を定めています。多くの文化が協調するこの時代にあって、いまだに声なき文化も存在するのです。誰からも無視され、ないがしろにされる文化です。経済力の強大な国と弱小国の関係では特に、外来文化政策に関わる領域に責任ある態度が求められますが、実はその領域だけではありません。たとえばバレンボイムのような音楽家は明らかにこのことに気づいており、その結果としての責任をウェスト＝イースタン・ディヴァン・オーケストラという形にしました。

外来文化政策は、特にこういった責任を引き受け、弱者を挫くような雰囲気二度と落ち込まないよう十分な助言を受けるべきものでしょう。危機に際しての緊張は、人々の心のなかにあらかじめプログラムされているものから。

さきほどのフランス人のおじいさんの小さな例が示すこととして第二にあげられるのは、さまざま

まな歴史的伝統、文化伝統のあいだの接点は、とんでもないところで浮上することが珍しくないということです。日常生活から例を引くことを続けるならば、決して冗談ではなく、ドイツ人があぶったソーセージほど日常的で害がないと思うものは珍しいほどなのです。これが戦争を思い出させるなどは、ドイツ人の心理として実に意表を突かれた驚きになるのです。けれど、それが現実であり、そこには歴史による正当化があるわけです。

この状況から、一般的な結論を導くこともできるでしょう。異なった社会の間の感情問題は、理論の上では整理されています。現在の世界状況では、それは人権の確立であったり社会における女性の地位であったり宗教的伝統との軋轢といったことに関係するとされます。けれど、現場において、また実際のケースでは、軋轢がいつ起こるかを予測することはできないのです。

文化の摩擦が長期にわたって続くということからだけでも、平和を保つための文化イニシャティブを長期計画として立案することが理にかなっているのがわかるでしょう。しかし、これはまた、文化摩擦が複合していて予測不可能だということからも結論づけられます。そして、国際交流基金とゲーテ・インスティトゥートは、どちらも既にそうしてきているわけです。文化イニシャティブは、関係パートナーの視点を考慮に入れる強い熱意のもとで透明に計画されるべきものです。そして、予想外のことを常に覚悟しておかねばなりません。そうでなければ、何事も生み出し得ないでしょう。短期成果主義、結果ばかり求めるのでは、信頼を築き上げることができません。この信頼こそが、文化交流から発生する避けられない予想外の出来事に賢明に対処する上で必要なものなのです。

したがって、〇〇の年とか〇〇週間とか銘打った国家的行事の根拠を提供するようなプロジェクトがここで述べたアプローチと整合するのかどうかということは、当然ながら疑問を呈されることになるでしょう。

サラ・マハーラージの言葉を借りますと、文化交流は、研究パートナーが結果を表現する適切な方法を求めるという点で、研究プロセスと比べられるものです。これは、平和をつくりあげるための文化イニシャティブにおいては特に大きな重要性もっています。どちらも最終的には未知の領域への一步一步を非常に慎重に進める内陸部探検であるという点でよく似てくるのです。英語圏諸国では、このことに便利な表現があります。意見が一致しないということで意見の一致をみる、というものです。おそらくこれは、たびたび用いられる必要のある表現でしょう。自分の側の立場を諦めることなく相手側の立場をまな板にのせることができる能力は、文化間のコミュニケーションをとる上で基礎となる必要条件です。問題領域での文化イニシャティブでは、必須の技にもなり得るものです。コンセンサスをいたずらに追うのではなく、リンク機能の中での異議が求められるのです。これに成功すれば、豊かな見返りが得られるでしょう。人が自分自身を理解し、表現する方法は、差異を通じたときに特にしっかりと学べるものなのです。さらにこれは、平和の特徴である「何か」の領域でもあるわけです。

文化イニシャティブの強力なネットワークを保とうというのであれば何を克服せねばならないのかを探る上での私の第二の要点が、ここで浮かび上がってきます。最初に私は、文化プロセスの長期にわたって持続する特性について述べさせていただきました。次に、そのプロセスの現実的なステータス像を描く必要があると思うのです。これは、グローバリゼーションの概念のもとにまとめあげようというものです。これらのプロセスが既にはるか進んでしまっていることに、

ときとして驚かされることもあるわけです。

どれほど世界が一体化してしまったかを示す、最近の2つの出来事がありました。世界中の人々が危機を感じた出来事です。ひとつは経済危機。この危機を逃れた国は世界にただのひとつもありませんでした。そして一国で問題を解決できる国も世界にはありません。もうひとつはメキシコ由来の豚インフルエンザです。その結果、地域的な事件があつという間に世界に広がってしまうのだということに気づかざるを得なくなったわけです。2日、3日で十分な場合さえあるでしょう。

メキシコからドイツまで、あるいは日本まで、飛行機なら何日単位ではなく何時間単位で移動できるのです。

グローバリゼーションの現状は、2つの異なった文化間の遭遇に影響を与えてきました。これら文化は、どんどん独自の力学で動くようになってきています。中国とインド、2つの巨大社会が21世紀のグローバルなプレーヤーとしての地位を求める状況では、特にこのようなことがいえるでしょう。そしてアラブ諸国の中でも、新興勢力があつて、中道左派政権や文化運動に挑むようになってきています。そして実際、西欧諸国においてもアラブ圏においてもイスラムの影響は強まっているのです。

ドイツ人ジャーナリストのマルク・ジーモンスの最近の見解では、グローバリゼーションの現状の結果、西側先進諸国、つまり北アメリカ、ヨーロッパ、日本は異文化を知らないでは済まされなくなっています。むしろ、これら諸国はその他の地域の「歴史や紛争、トラウマ」に直接の当事者となるようになってきています。このように直接の当事者となることは、かつては近隣諸国間でのみ起こった状況でした。そしてそれは、先のドイツとフランスの事例からわかるように、複雑な帰結を伴いました。こういった状況が、基本的には世界中にあてはまるようになったのです。

2001年9月11日のニューヨーク世界貿易センタービル攻撃は、この分析の重要性と緊急性を確認させてくれました。一連のテロ行動は、多文化を集めた平和な集まりが失敗した状況を実に象徴的に表したのです。私の見るところ、あれ以来、文化間のコミュニケーションの概念は、新たな刺激を一から受けることになりました。文化間の戦いとは異なり、文化的概念で定められたブロックが敵対状態で向き合うという国際社会に影響するジレンマからの脱出路を考えることなのです。

国家のマーケティングツールとしてのメガホン外交は、そもそもの関係が敵対的であるブロックには通用しません。こういった状況下では、ある文化が他の文化に対して格づけをされるということになり、その結果、危機成分の緊張が徐々に高まっていきます。

これもまた真実です。経験則が明らかにあてはまります。社会同士のコミュニケーションが高まれば高まるほど、そしてそのコミュニケーションのチャンネルが複合化すればするほど、両者のあいだに戦争状態が発生する可能性は減少します。けれど、文化間の対話には常に努力が必要であり、それは交戦状態が休止してようやく始まるものでもないということもまた、認識しなければなりません。そして、対話によって摩擦が生じる可能性があることもまた、認識する必要があります。21世紀の多文化的グローバル社会はドイツ古典時代の詩人や思想家が描いたほどには

ロマンチックでも心地よいものでもありません。この点においては日本の思想家の方が、最初から夢を見るのが少なかったのかもしれませんが。

しかし、文化の間の戦争という概念そのものが不適切なわけです。というのは、問題の本質を反映するには、それがあまりに粗雑な概念だからです。最終的な分析ではコミュニケーションを行うのは実は文化ではなく個人、一対一のコミュニケーションです。文化間のコミュニケーションは、個人が、自分をつくりあげてきた文化背景が大幅に異なるような状況で創造的な交流ができるという考え方をよりどころにしています。この目的に必要なのは、文化の多様性と異なった価値体系に建設的に触れることです。なじみのない経験をすることで恐怖を感じてはなりません。そこから解決への創造力を刺激されるべきなのです。

このようなタイプの建設的な異文化との接触は、どのようにすれば可能でしょうか。私にとって、これこそが平和を保つための文化イニシャティブという概念の鍵となる質問です。興味深いのは、成功したものほど、はっきりした意図とは無関係であったという傾向が明らかにあることです。文化同士がオープンであることは、命令されてつくられる雰囲気ではありません。そして、シミュレーションできるものでもありません。

では、どのようにしてこれを成しとげればいいのでしょうか。まず、文化というものは決して強く定められたブロックではないということを認めることが大切です。その相互関係やつながり、そして普遍性は、グローバル化と呼ばれる時代以前から広範なものでした。今日では以前には想像もできなかったほどの形でそれが増殖し、加速していて、いまでは文化をある種の枠組みのように不変のもの、純粋のものとして考えることなどできなくなっています。私の経験では、実際にこういうことに実質上関係するようになるとすぐ、接点が見つかり、そこから対話形式のコミュニケーションが始まります。

たとえば、2004年、私はある演劇祭のためカブールに飛ぶ機会がありました。そこでは、ヘレーナ・ヴァルトマン制作の《リターン・トゥ・センター》が上演されていました。このシンポジウムにヘレーナ・ヴァルトマンが出席されていることを知って非常に嬉しいのですが、それに劣らず、ゲーテ・インスティトゥート・カブール所長のリタ・ザクセ＝トゥサーンも来ておられるのも嬉しいことです。アフガニスタンでのこの演劇祭はまずは満足すべきものだったのですが、ここから私はいくつかの結論を引き出すことができました。まずは、これが文化間のコミュニケーションの好例であること。各回上演ごとにおよそ600人のアフガニスタン聴衆がドイツ劇作家ベルトルト・ブレヒトの演劇を鑑賞したことからはかりしれない価値を持った交流の機会であったこと。アフガニスタン社会の内部にとってもコミュニケーションの好例であったこと。アフガニスタン社会の感情と見解を表明する上で観衆が今回上演のような守られた環境内を必要としているのは、注目にあたいます。そして、アフガニスタン社会内での差異にはっきりと気づくことができました。たとえば、若い観衆と高齢の観衆のあいだの世代間対立などです。

私の経験からいえば、あらゆる文化にはこのようなギャップと突破口があります。これらは抱き合わせで文化間のコミュニケーションのプロセスに現れるのです。このときの集まりは、多くの成功例の見本のようでした。これら成功の前提条件は、人々の自らを表現する欲求が自由に展開できる守られた空間が提供されていることです。したがって、私にとっては、このような文化イニシャティブは2つのことを表します。なじみのないものに前向きに反応するための十分な自

信、常に差異を受け入れる自信、そればかりではなく、あらゆるなじみのない文化がもたらす対話の機会を逃さない自信です。目標は、これら機会を広げていくことであり、それを持続できるものへと育てていくことなのです。

ある危機を抱えた地域に着目しているとき、そこから注意を別の地域に振り向けることは、生産的な方向と逆行することにさえなりかねません。

こういったことすべてを含んだ上で、文化的なかかわりに限界があると認めることは絶対に正しいことです。平和イニシアティブには何よりもそれをやり遂げようとする政治的意志が必要です。政治枠組みがなければ、暗礁に乗り上げてしまいます。そして現代世界の現状のあり方が進行するのを認めるならば、経済関係がどんどん先へ進んでしまい、文化関係が置き去りにされてしまいます。これが多くの政治家の第一の関心なのです。これが現状です。けれど、文化イニシアティブの特別な重要性、そして文化イニシアティブだけがつくりあげることができるものを抑制されたやり方で広く示すべき理由もあるのです。

文化の枠組みならば、政治問題や経済問題を第一とせず、人々が集まることができます。文化の枠組み内では、政治情勢の風向きに影響されずにいろいろとつくりあげることができます。これは、信頼のもてる雰囲気をつくりあげることです。批判的にたずねることが許される雰囲気です。個人の文化的伝統がつくりあげた地平線を越えることができる雰囲気です。少なくとも実験的に越えていくことが許される雰囲気です。

実のところ、これが芸術の力なのです。けれど、白日のもとで眺めたとき、ある国の芸術とは何でしょうか。ある社会の鍵となる問題を表したものです。人々が身のまわりをどんな視点を用いて見ているのかをそこから知ることができます。さらにまた、全体としての個人の内面がどんなつくりになっているのかを知ることができます。特にこれは、ドイツと日本のあいだのさまざまな文化の遭遇に明らかなことです。ドイツ人と日本人が出会うとき、それぞれ一人前の思考プロセス、知覚力、感情をもった個人として出会います。これらの各能力を表現するため、芸術が必要になります。芸術には、人々が日々遭遇することがらが表現されています。だからどんなふう違っていてどんなふう似ているのか、はっきりと経験することができます。差異を探ることと類似点を探ることは、文化交流で大切な作業だと思います。この作業を行う領域として、芸術以上に適したものはないと思うのです。

結果として疑うまでもなく、文化イニシアティブの着想そのものが芸術としての形をとるようになります。あるいはこういった考えがあまりに突拍子もなく見えるようなら、粒々辛苦の末の工芸作品かもしれません。どの文化のどの芸術家が最初の火花とでもいえるものをもたらすことができるのか、判断するには文化に対する感受性が必要です。よその国で本当に役立つ議論を進めるには、気持ちがあるところにはいってこなければなりません。これは計画してできることではありません。そして世界各国どこでも同じように通用する不変な公式があるわけでは絶対にありません。

このようなタイプの工芸作品を活用する方法を見つけるのが、国際交流基金やゲーテ・インスティテュートの文化ファシリテーター機関の仕事ということになります。私の経験では、文化イニシアティブを成功させるには、組み上げるのに長期間を要するノウハウが必要となります。

経験を積んだスタッフが必要になります。さらに、影響力をもった相手方やコネといったネットワークも。文化イニシアティブをスタートさせるという作業には、やっておかなければならないことすべてが自国で必要だと認められていることが大切です。

お話も最後に近づいてきました。昔からの文化伝統とグローバリゼーション時代の複雑な文化状況が、文化交流が対応しなければならない難問を形づくっています。これらの難問に直面したときにできるものとして、2つの形があります。まずひとつは、早期警報システムのようなのできることで、社会同士の関係が良好な間に、何らかの歪みが生じかけている部分が現れた際にそれを示すものです。これは、そういった歪みは社会全体で一気に広まるはるか以前に文化活動の領域で目に見えるようになるものだからです。このようなタイプの警報システムが必要な理由は、ある問題領域がどんなものを含むのかを前もって知ることが多くの場合不可能だからです。

もうひとつは、経験を交流するには出会いと意見交換の機会が数多くあることです。これはとても大切です。平和を本当に創造するならば必ずやそこに見つかる「何か」、必ずなければならない「何か」のエッセンスが、こういった出会いの中にあると思うからです。

グローバリゼーション、平和構築、文化交流（発表要旨）

小倉和夫

I. 前書き

(1) グローバリゼーションとは、相互依存と政治的関与の度合いが高まるプロセスである。このプロセスはその結果として、地域、国家、地方などの集団としてのアイデンティティの破壊や歪曲、再構築、再定義をもたらす。

(2) 東西対立終焉後の過去約20年間に発生した国際的な紛争や衝突のパターンを見ると、その一部はグローバリゼーションの結果であるが、それがあつてはグローバリゼーションの原因になっている場合もある。

(3) 平和構築のプロセスとそのプロセスにおける文化交流の役割を考察する出発点として、上記の2つの命題を組み合わせてみると、少なくとも3つの異なるアプローチ（必ずしも相互に矛盾するものではない）を提示することが可能であろう。

II. 第一のアプローチ（社会心理学的アプローチ）

第一のアプローチは、平和構築プロセスを集団アイデンティティの創造、回復、あるいは再定義ととらえる取り組み方である。国家や集団のアイデンティティは、紛争や衝突によって粉々に破壊されたり、人為的に強化され歪曲されたりすることがある。その意味で、平和構築プロセスは、自らのアイデンティティを再定義・再構築するプロセスである。

例えば、部族や民族、地方をめぐる紛争が広範囲に及んでいるアフリカにおいては、健全で持続可能な国づくりに結びつく平和構築は、アフリカの極めて多様なアイデンティティを国レベルの経済社会開発と調和させるプロセスである。そして、そうしたプロセスを推進するには何よりもまず、われわれがアフリカ問題を論じるときの物の見方やパラダイム（理論的枠組み）の転換を試みる必要がある。

こうした試みの一つが、2009年にカメルーンで開催された「日本・アフリカ協力のための報道関係者会議」であり、会議に参加したジャーナリストたちは、アフリカの諸問題への取り組み方法をめぐって、マスメディアが歪んだ国際的なパラダイムを創造または補強する役割を果たしていることについて議論を交わした。国際社会におけるアフリカのアイデンティティを再定義することが、アフリカでの平和構築に向けた第一のプロセスであるべきであり、またそれは可能なことでもあろう。アフリカの豊かな文化的伝統は多様なアイデンティティを持ち、植民地時代に列強によってアフリカに押し付けられた人為的な「国家」のアイデンティティとは相いれないからである。

中東では、経済面での相互依存と政治的な民主化の波が広まる中、民族・宗教上のアイデンティティが社会政治的な問題の中心となってきた。こうした状況では、中東の人びとが自分たち

のアイデンティティを「欧米」と対立する形ではなく、より平和的な方法で国際社会において表現できる機会を提供することが極めて重要である。つまり、中東の人びとが迫害や政治的虐待を受けることなく自己表現できる「保護され守られた知的・文化的領域」をわれわれは創出しなければならない。複数の国からイスラム教徒の女性ジャーナリストを日本に招いてイスラム世界におけるジェンダーの問題を論じてもらう取り組みは、そうした「守られた領域」を生み出す努力の一例である。なぜなら、それによってイスラム教徒の女性ジャーナリストたちは、欧米のフェミニズムが提示する知的枠組みから解放されると同時に、中東の女性に対するイスラム教の伝統的概念からも自由になり、自らの女性としてのアイデンティティを再定義することが可能になるからである。

文化交流を通じて国家や民族のアイデンティティを再定義するもう一つの例として、米国人学生とベトナム人学生の文化対話を行う1か月間のコースをハノイで開設した米国の試みが挙げられる。このプロセスを通じて米国とベトナム双方の人びとは、ベトナム（あるいはアメリカ）戦争により大きく歪められた、かつての敵国のイメージを再構築し、それによって国際社会の一員としてのそれぞれのアイデンティティを間接的に再定義することになった。

一方、社会経済開発に向けて民族や国家のエネルギーを動員するために、文化活動を実施しなければならないケースもある。アフリカの古王国の一部に残る文化遺産を保存・修復する取り組みは、そうした種類の文化活動に入るものと言え、欧米の植民地主義によって破壊されたアフリカのアイデンティティを復元し再定義するのに役立つであろう。

こうした事例のすべてからうかがえるように、文化交流や文化活動は、軍事衝突の結果として破壊され、または歪曲された集団のアイデンティティを修正する格好の手段や機会になり得る。同時にそうした文化交流や活動は、集団のアイデンティティの修復、再定義、強化に貢献し、ひいては国家や集団の結束・安定を実現するのにも役立つ可能性がある。

Ⅲ. 第二のアプローチ（安全保障関連のアプローチ）

第二のアプローチは、より伝統的で従来型のアプローチである。つまり、平和構築プロセスを4段階に分けて考える方法である。災害の防止・復興のプロセスやサイクルに多少似ているが、平和構築プロセスは4つの局面に分けることができる。それは、紛争の防止、衝突激化の防止、修復または復興、そして記憶の保存または将来に向けた改善措置である。

紛争地域の人びとの相互承認・理解を促進することは、一般に平和構築の第一段階に伴う行動である。自分自身や自分が属する集団を客観的に観察するプロセスは、紛争のさらなる拡大を防止するのに役立つ場合もある。

例えば、イスラエルとパレスチナの高校生を広島原爆慰霊碑に招待した「ピースキッズサッカー」プログラムは、対立する相手をより客観的に観察するプロセスを間接的に促した事例の一つとして挙げられよう。

平和構築の最終段階、つまり戦争がもたらした惨禍の記憶を後世に残す活動については、戦

争被害者に自らのつらい経験を語ってもらう上で文化活動が果たす重要な役割に留意する必要がある。例えば、東ティモールの子どもたちに対する演劇ワークショップの重要な成果の一つは、最初は躊躇していた子どもたちが演劇づくりの過程で自分の心の傷を語り始めたことであり、それによって若者たちが負った精神的な傷と、そこから徐々に癒される様子を記録に残すことが可能になった。

Ⅳ. 第三のアプローチ（人間の安全保障アプローチ）

平和とは、単に衝突がない状態というだけでなく、良好で自然で人間らしい環境が保障される人間生活の環境であると定義できる。この場合、文化活動を国境のない領域においてとらえることができ、社会福祉の増進や自然環境保護のために文化活動を動員することが可能である。このように、災害防止活動の場合と同様に、人間の安全保障における国家的側面と国際的側面は一つに融合することが可能である。

フィリピンの山岳民族の人びとを対象とした、自然環境保護の必要性についての意識の向上を図る教育劇活動は、「国境を超えた」重要性を持っていると言える。また、あるモンゴル人音楽家は、祖国の緑の平原が砂漠化するのを目の当たりにし、その無念さから作曲した音楽をモンゴルの伝統楽器を使って演奏する活動を行っているが、こうした活動も国および国際レベルの双方で政治的な意義を持つ。

Ⅴ. 所感

(1) 平和構築に向けたこれら多様なアプローチは、すべて文化活動との関連から考察したものだが、いずれもその機能や実践面での意味という観点から、特に国際交流基金のような組織についてはその活動との関連において、分析することができよう。

われわれが留意すべきポイントの一つは、文化と社会の関係に見られる最近の変化である。今日、財政や行政が関与する文化・知的活動を中心とする多くの文化活動では、社会福祉、環境、産業技術開発といったより実用的な他の社会活動との関連づけが求められている。国際交流プログラムの実施においてこの要因をどのように考慮に入れるかは、おそらく新たな視点から検討すべき課題の一つであろう。

(2) 第一のポイントに関連してわれわれが検討すべきもう一つの点は、われわれの活動の説明責任についてである。商業化された娯楽活動の拡大への対応の一環として、公的部門には文化活動の社会政治的な有用性がますます求められるようになってきている。このような状況では、平和構築に向けた活動の効果をどのように評価するかが、将来対応すべき重要な問題になってきている。

(3) 三番目のポイントはリスク負担である。紛争地域で行う平和構築活動は、紛争そのものに実際に巻き込まれるリスクを伴う場合がある。これに関連して、市民グループが実施する平和構築関連のボランティア活動を促進する方法、または思いとどませる方法も、国レベル、国際

レベルの両方で考慮すべきポイントになっている。

この点については、紛争と文化の関係を考える必要がある。文化活動を紛争の潜在的な原因とみなすことはできないものの、文化活動は特定の政治目的を果たすために利用されたり、動員されたりしがちである。文化活動が政治目的に利用され、その結果として民族間の敵対行為を緩和するどころか悪化させかねない状態に陥るのを回避する方法も、検討すべき課題の一つである。

平和構築と文化の根本的関係に関連するもう一つの問題としては、いわゆる平和運動活動がある。多くの平和運動の場合と同様に、戦争自体が悪であり、戦争のための大義を美化しようとする人がいなくなる限り平和は達成されないという前提をわれわれの出発点とするのであれば、日本人大学生が海外で反戦、核兵器反対を掲げた演劇を上演するなどの文化活動は、こうした前提の下において、今以上に促進されるべきである。そうすれば、より一般的な一つの問題が浮かび上がってくる。それは、従来イデオロギーの違いが戦争の主要な原因の一つになってきたことを踏まえて、政治的イデオロギーを促進するための運動から平和構築プロセス自体を解放すべきかどうかという問題である。

平和構築のプロセスと文化交流の役割の関係について

平野 健一郎

この専門家会議およびシンポジウムが関心を寄せるのは、今日の世界の各地に見られる「戦争未満」の状況、人々の平和と安寧が損なわれる紛争の状態である。紛争前の対立から紛争へ、紛争から紛争後の平和（再）構築へ、という過程は、基本的に、紛争当事者の2者間関係と見ることができる。そこへ、紛争解決と平和構築のために、外部から第3者が介入する。NGO、各国政府、各国機関、各国の民間組織、国際組織などがその第3者となり、さまざまな「文化イニシャティブ」を用いて介入する、と考える。どのような文化イニシャティブが紛争解決と平和構築のために有効か、というのがこの会議の関心事である。なお、念のため、「介入」という用語にマイナスの価値を与えてはいないことを言い添えておきたい。冷戦後の国際関係において、国内紛争への国際的な介入が容認されるようになってきていることは、あらためて指摘するまでもないであろう。

本パネリストは、対立から紛争へ、紛争から平和構築へ、という2者間のプロセスを、いくつかの段階に区切り、その段階ごとに、第3者が介入に用いる「文化イニシャティブ」の一般的特性を対応させることを試みたい。

青山学院大学国際交流共同研究センターの中間研究報告「平和の為の文化イニシャティブの役割」は、平和構築のプロセスを、(1) 紛争予防、(2) 紛争中、(3) 紛争後、(4) 紛争後の復興段階の4段階に区切っている。本パネリストは、東ティモール紛争とそれへの国際的介入を研究している早稲田大学政治学研究科博士課程の井上浩子氏の知見などを加えて、平和構築のプロセスを、①紛争前（対立）、②紛争中、③紛争終結、④復興段階の4段階に区切りたい。

このように4段階の呼び方を若干変更するのは、そうすることによって、「紛争予防」の概念に、より長期的、より広い視点を取り戻したいからでもある。「文化交流、国際交流、国際協力は五十年、百年の大計」といわれる。平和（security）がなければ文化などといってられない、文化交流などできない、ともいわれる。それも正しい。しかし、そもそも、長期的な紛争予防、それが文化の本領である。この真理は今日でも変わらないはずであり、紛争解決、平和構築に文化を用いようとする者こそ、この本質を忘れてはならないであろう。紛争解決、平和構築のための「文化イニシャティブ」に短期的な関心を集めるあまり、長期的な紛争予防のための文化交流、国際協力がなおざりにされるようなことがあってはならないと思う。

さて、①紛争前の段階で、当事者と外部関係者が目指すべきことは、対立の解消、あるいは少なくとも無害化である。その目的のためにとられる「文化イニシャティブ」の特質は何であろうか。文化の視点から見るとすれば、とりわけ対立は文化の違いによる「文化的対立」である。一つの国民を形成すべき二つの民族集団の対立は、文化の違いに対する意識の先鋭化を原因の一つとする。一つの国民「文化」を形成するには長い時間を必要とし、人々自らが従事すべき事業である。第3者が外部から介入して、第3の文化を強制するような方法は対立を複雑にするだけである。

2当事者間で文化の違いが意識化されて（政治的に利用されるようになって）しまった以上、

対立の解消、すなわち原状回復は無理である。対立をできるかぎり無害化する以外にない。そのために第三者ができることは、2当事者間の文化の相互理解を助けることである。より根源的には、文化そのものの理解を深める助けをすることである。そのためには、第3の文化の紹介という「文化イニシャティブ」も有効であろう。そうすることによって、他者のみならず自己についての理解を深めさせ、両者の融合は困難であるとしても、平和的共存・併存・共生への努力を導くのである。

②紛争中の段階では、各当事者への紛争の衝撃をできるかぎりやわらげる努力がまず必要であろう。心理的な傷の治癒をはかる「文化イニシャティブ」の試みがすでに報告されている。紛争に対する外部者の関心・心配が伝わるのが治癒効果を持つとも言われている。

紛争の長期化を放置するのではなく、終結させる方向を発見するために、第三者は介入しなければならない。その時、どのような「文化イニシャティブ」が可能であろうか。当事者たちが「紛争の文化」ではなく、かつて「対立解消・紛争解決の文化」を持っていたことを発見し、再認識するのを手助けすることが一つの方法であろう。もう一つは、紛争解決後の新しい文化の可能性を示すことであろう。

③紛争終結時には、対立者を和解させ、紛争の再発をなんとしても防止しなければならない。この段階こそ、信頼醸成がもっとも必要であろう。対立者がもう一度力を合わせて新しい社会を創って行く共働が信頼を生むであろう。第三者は、当事者の共働によって豊かな文化を取り戻すことが可能である、という希望を持つことができるような文化活動を提供するのがよいと思われる。子どもたちには笑いを取り戻させたい。

④復興段階 人々が安心して暮らせる平和な社会を地域一帯に復活させるには、文化が果たす役割は確かに大きい。文化的対立を乗り越える計画・プログラム作りに、第三者が文化的活動をもって参加する具体的事例は豊富に考えられるであろう。ここでは、その基本線を考えて、整理してみたい。

論理的に考えて、紛争地域の復興の方向は、原状回復と新しい社会の建設の二つである。激しい対立と紛争を経験した地域に原状を回復する可能性はありえない。どのような新しい社会をどのように構築するかが課題である。しかし、人々が安心して暮らせる社会を文化の側面からもう一度構築するためには、原状回復の可能性を全面的に否定することがよいかどうか、この点は、最後にもう一度触れることにしたい。

文化的対立を乗り越えるためには、まず、対立から紛争の過程を文化の側面から検証し、反省する必要がある。すなわち、文化の相互理解の作業はこの段階でも必要であり、さらに、どの文化要素を取り除き、どの文化要素を育てるか、という社会工学的な分析も必要であろう。第三者はそうした作業を補佐することができるであろう。

さて、新しい社会の構造のありうる形は、構成部分の融合、統合、隔離、分離、分裂の5つであろう。融合は全面的な原状回復を目指すものであり、その可能性はゼロであるばかりか、紛争解決に逆行する。外部の第三者が新しいモデルで融合した社会を創ろうと介入するのも同様である。他方、分裂は、紛争解決の努力が空しかったことになるが、紛争後のありうる形で

ある。分裂したそれぞれの社会について、ここで検討されるような復興の努力が必要なことはいうまでもない。

隔離と分離の違いはあまり明瞭に述べることができない。おそらく、分離は政治的・地理的に明瞭な境界線が全面的に引かれた構造である。それに対して、隔離は部分的であり、文化の側面でそのような措置をとる必要が生じる場合があるであろう。

統合が新しい社会のまとまりという点ではもっとも望ましい形である。しかし、政治的な統合が、紛争当事者の一方を主にして、性急に推進されるなら、直ちに紛争が再燃し、元の木阿弥となる。第3者が外部から介入して、第3のモデルで統合を強制しても、同様の結果になるであろう。反発、抵抗はむしろいっそう強いであろう。このことは、文化の関係についても同様である。文化の一方的な押し付けは必ず反発を招き、紛争を発生させるということを、われわれはいつも心得ておかなければならない。これがこの機会に本パネリストのもっとも強調したいことである。

本パネリストの考えでは、おそらく、統合と隔離の組み合わせが紛争後の復興社会にもっともありうる構造である。統合と隔離、この相反する二つの構造をどのように組み合わせるかが最後の課題となる。ある部分では対立物を隔離しつつ、ある部分では統合を目指すという空間的な組み合わせと、隔離から徐々に統合へ、という時間的な組み合わせが考えられる。そして、文化は、この二つの組み合わせにもっとも巧みである。

人々の安心とアイデンティティの安定を保障するのは、慣れ親しんだ文化である。もちろん、その文化にも対立、紛争の原因となったような文化があり、新しい社会を復興させるには取り除くべき「悪しき」文化もある。その点を考慮しつつ、人々の慣れ親しんだ文化は身近な部分社会に存在するので、それを隔離によって活かす、部分的な原状回復を図るべきであろう。異なる文化を尊重しあう、多文化共生が新しい復興社会の存続を保障する。

しかし、それだけでは紛争後の社会の復興はない。全体の新しい社会のレベルでは統合が図られなければならない。民主化、選挙は社会統合に不可欠な制度であると同時に、新しい統合の文化であり、さらには人々に生きがいを与える。そうした新しい文化を人々は共働によって生み出し、さらには異なる文化を持ち寄り、共創（コラボレーション）によって第3の文化を創り出す。空間的、時間的な隔離と統合の組み合わせは、文化の共生と共働と共創の活動の展開であり、組み合わせでもある。第3者は、外部からそこに的確な支援と補助をする、「正しい」介入の役割を負うのであろう。

平和構築のプロセスと文化交流の役割、対照表

【平和構築のプロセス】	①紛争前(対立)	②紛争中	③紛争終結	④復興段階
【介入の狙い】	対立の解消／無害化	紛争の衝撃の緩和	対立者の和解	紛争地域の復興 原状回復 or 新社会の建設
【文化的介入の役割】	文化的対立の無害化 文化の相互理解	心理的な傷の治癒 外部の心配の伝達 紛争解決後の新しい 文化の可能性を示すこと	信頼醸成 豊かな文化の回復	紛争過程の検証 →文化相互理解 統合と隔離 空間的／時間的組み 合わせ
【文化的関係の形】	共生 →		共働 →	多文化共生+共働+共創

平和のための文化イニシアティブの理念と留意点

西川 恵

グローバリズムの時代は文化・芸術の比重が大きく増した時代です。もともと文化・芸術は国境を超えて、人々の共通言語としての性格をもっていますが、冷戦時代は政治・経済システムの違いによって世界が区切られ、しかも国境の敷居が高かったため、文化・芸術は共通言語としての強みを十分に発揮できませんでした。これが冷戦終結によるグローバリズムの本格的な到来によって、国境の敷居は大きく下がり、文化・芸術が共通言語としての役割を果たす環境が大きく開けました。

今日、市民団体やNGOなど、さまざまな市民グループが文化・芸術をツールに不安定地域で活動しています。政治、経済面の支援が、地域秩序や生活空間の改善を図り、生活を物質的に支えるのに対し、文化・芸術活動は人々を精神、心理面からサポートし、人々の間に信頼を育み、希望の火をともします。政治、経済面の支援が外へのアプローチなのに対して、文化・芸術活動は内へのアプローチといえるのではないのでしょうか。

かつて冷戦時代の地域紛争では、秩序が回復し、生活できる環境が整えば、人間は希望を取り戻し、復興に向けて前向きに取り組むようになると言われました。そして実際のところ、そうした秩序回復、生活基盤の整備といった外形的なものに力が傾注されました。しかしカンボジア、ユーゴスラビア、ルワンダ、東シモール、アフガニスタンなど、冷戦後の地域紛争で明らかになったのは、いくら最低限の生活が確保され、差し迫った身の危険が除去されたとしても、心が空虚では真の安定にほど遠いということです。

民族紛争や内戦はさまざまな形で人々の心に深いキズを遺し、それは容易には癒されません。表面的にはふつうに日常生活を送っていても、心の奥底には恨み、後悔、復讐心、虚しさ、閉塞感といったさまざまな感情が渦巻いていて、これは刹那主義や公共心の欠如、社会への無関心という態度となって現れます。これが地域社会の再建復興に大きなマイナスであることは明らかです。その地に住む人々が前向きな気持をもたなければ、いくら政治的、経済的施策があっても成果はあがりません。この脈絡でいえば、ポスト冷戦の時代は心の中に平和を作り上げる時代だと言ってもいいかもしれません。

文化・芸術活動は人々の心のキズを癒し、信頼を育み、希望の火をともしと言いましたが、それは1つに、文化や芸術が人々の感情や情緒面に働きかける人間活動だからです。またその活動を通して、同じ地球市民としての「連帯感」を醸成することも無視できません。文化・芸術活動に携わる人とその享受者は、利害の共有者として共通基盤を獲得するのです。

では不安定地域での文化・芸術アプローチの留意点は何でしょう。私は相手に寄り添い、相手と同じ目線で語り、考えることだと思います。紛争地域や不安定地域の人々は、精神的にも、心理的にも、鬱屈した複雑な感情を抱えています。上からの押し付けがましいやり方は屈折した思いを抱かせることになりかねません。

昨年、私はタイ北部のミャンマー、ラオス国境地帯に入って、タイが進める農村開発プロジェクトを見てきました。これは1987年にスタートしたドイトン計画(Doitong)といわれるもので、

麻薬栽培を長年してきた山岳少数民族に作物転換を進める息の長い運動で、実際、見事に麻薬栽培を根絶しました。この計画を進めたメーファルン基金 (Meifalung) のクン・チャイ理事長 (Kun Chai) は2002年から「ドイツの成功を他国に」を掲げ、ミャンマー、アフガニスタン、インドネシアでも麻薬撲滅活動を展開しています。彼は国連薬物犯罪事務所 (UNODC) が開いている麻薬撲滅会議にも何回も招かれ、活動を紹介しています。

クン・チャイ氏がドイツン計画を実施するに当たり、どのように山岳少数民族と接したか、そのアプローチを詳しく聞きましたが、同氏は「ドイツン計画は農村開発プロジェクトでしたが、実際の課題はインフラではなく、どう地域の人と信頼関係を結ぶかという心理学でした」と語っています。長いこと中央政府に不信感をもってきた山岳少数民族との関係のとり結び方は、文化・芸術のアプローチにも参考になりますので、ご紹介したいと思います。

そのアプローチを要約すると、地元優先、現場主義、柔軟性の3つになります。最初の地元優先は、その国や地域の習慣、伝統に合わせ、人々が何を望んでいるかに耳を傾けることです。主張するのではなく、聞くことです。また人々の宗教に対する信仰心に敬意を払い、たとえ地元の習慣が外の人間には非効率に見えても、尊重していくことが大事です。また既成の支援パッケージや、事前に自分たちの間で考えたことを押し付けるのではなく、相手の希望や気持ちを汲みながらともに作り上げて行く姿勢が必要です。

第二の現場主義は、地元のリソース (資源) を極力生かし、付加価値を創出する努力です。すべて外から持ち込むのではなく、その国や地域にあるものを利用し、工夫を凝らし、活用し、そしてアドバイスし、これまでにない新しいものを生み出していく。その地域にあるものを使うのは、その土地の人々が、将来、自分たちだけで文化・芸術活動をしようとした時、地元にあるものだけでも可能となるからです。そうでなければ支援者が帰ってしまうと、元の本阿弥になってしまうでしょう。

そして第三点が柔軟性です。実際に現地に行くと、事前に考えていたことがうまくいかないということがよくあります。そんな時は「もう決めたことだから」と拘らずに、柔軟に変えていく勇氣が必要です。以上の3つがあって、クン・チャイ氏のドイツン計画は成功しました。

不安定地域への文化・芸術アプローチは、ある意味、すぐれた異文化交流でもあります。自分たちの手法、考え、文化的アプローチをどのように相手の土壤に溶け込ませ、共感者を広げていくか。これは自分たちの文化を相対化し、大きな座標軸の中で自国文化を見つめなおし、考える契機にもなると思います。文化・芸術アプローチは与える側と享受者という二項対立的なものではなく、自分たちにとっても得るところの大きいウィン・ウインの関係でもあります。日本人がもっともっとこうした活動にかかわってほしいと願っていますし、国際交流基金にはこうした活動にぜひとも追い風を送ってほしいと思います。

ささやかな3つの問題提起

渡辺 靖

文化人類学者として「平和」と「文化」という二つの言葉に鼓舞されつつも、警戒心を覚える。

1. 「平和」について

先月放送されたNHKスペシャル『ヤノマミ〜奥アマゾン 原初の森に生きる』は、ブラジル政府やヤノマミ族の長老との10年近い交渉の末、TV局としては初めて長期(150日)の同居が許されたという労作だった。14歳の少女が、部族の伝統に従って森の中で出産したばかりの赤子を「人間」としてではなく「精霊」として天上に送ることを決意し、赤子を白蟻の巣の中に入れ、肉を食べ尽くす白蟻ごと焼きして葬るという衝撃的なシーンから番組は始まった。ヤノマミ族は内部対立が激しく、恒常的な戦争状態にあり、ゆえに男尊女卑の風習が根強く残る。「ヤノマミ(Yanomami)」とは「人間」を意味し、取材班が「ヤノマミ以外＝“人間以下”」と称されていたのが印象的だった。

ヤノマミにとっての「平和」とは何か? その「平和」はどこまで“平和的”として許容し得るか。われわれは「人権」を語り、「自由」を語り、「民主主義」を語るが、かつて政治哲学者アイザイアバーリン(Isaiah Berlin)は「理想の追求」(The Pursuit of the Ideal)と題する講演(1987年)の中で、性急な理念の追求がもたらす弊害を戒めた。われわれはどこまで相対主義を貫けるか、どこまで普遍主義を貫くべきか。

問題提起1:われわれが「平和のための文化イニシアチブ」を取る「権利」ならび「責任」を有するのは如何なる場合か。その正統性の根拠はどこに見出されるべきか。事業の対象は如何に取捨選択され、優先順位を付されるべきか。

2. 「文化」について

グローバル化の特徴としては、「市場」と「情報」のユビキタス化(遍在化)、「時間」と「空間」の圧縮、「国民国家」の相対化などが挙げられよう(“Made in Germany”や“Made in Japan”という“ナショナル”なコピーはもはやトランスナショナルでハイブリッドな生産プロセスの実像を反映していない)。もしかすると、人類の歴史のなかで初めてわれわれは「人類」を語れるようになっているのかも知れない。基本的には、それは歓迎すべき状況であり、「文化」はそのための重要な「触媒」に成り得ると思う。

しかし、ここでもまず「人類」がどこまで普遍的か——つまり「ヤノマミ＝人間」が含まれているか——留意する必要がある。

加えて、こうした事態の急速な進展に対しては、ナショナリズムやファンダメンタリズムといった、特定の文化を本質的(essential)ないし原初的(primordial)なものとして防御・保守しようとする反動が予想されやすい。文化的差異そのものが紛争や戦争の原因であるというよりは、むしろ政府や市場の失敗によって文化的差異が単純化・固着化され、紛争や戦争の「旗印」にされる場合がほとんどと思われる。つまり平和のための「触媒」どころか「障壁」として「文化」が

乱用・悪用される可能性があるということだ。

問題提起2:「平和のための文化イニシアチブ」の役割とは、われわれが直面する社会的諸問題(紛争や貧困)が文化的差異そのものに起因しているのではない点を<認識>させること——つまり「文化」をスケープゴートにさせないための啓蒙——に尽きるのではないか。それは具体的には敵対心の緩和や自尊心の回復を意味するのであろう。しかし、より根源的な社会的諸問題の解決には政府や市場の失敗の是正が不可欠であり、文化イニシアチブに過度に期待すべきではないのではないか。

3. 文化機関の役割

「平和のための文化イニシアチブ」の恩恵を直接享受する範囲は自ずと限定される。「問題提起2」で記したような<認識>をより広いパブリック(特に、政策担当者やオピニオン・リーダーやゲート・キーパー)に共有してもらうための方策を練る必要があるだろう。誤った認識から正しい判断・政策は生まれないことを肝に銘じておきたい。

政府系の文化機関である以上、「国益」を考慮・追求するのは当然であろう。ただし、グローバル化する昨今、一国の国益が、市民社会から地域連合、国際社会に至るまで、配慮すべき公益が多様に重なり合うなかで形成されており、国益と国際益が切り離せない場合、つまり、国益のなかに国際益が含まれるような局面も増えてきている。偏狭で性急な「国益」追求のなかに「文化」を貶めることは、平和のための「触媒」どころか「障壁」にしかならない(そのためにも「問題提起1」を記した次第である)。

日本の文化事業は(あくまで総論としてだが)外交戦略との直接的なリンケージよりも、むしろ広汎な政策環境ないし交流環境の整備に重点が置かれている印象を受ける。外交戦略とのリンケージが弱い分、発信すべき「日本」の精神・伝統・文化の特殊性をめぐるディスコースが前面に出されがちな点も「日本的」といえるかもしれない。以前、ゲーテ・インスティトゥートが「ドイツから文化を発信すること(presenting culture from Germany)」と「ドイツ文化を発信すること(presenting German culture)」を明確に区別し、文化の多様化(=トランスナショナル化、異種混淆化)に開かれた前者の立場を活動指針としていると耳にしたことがあるが、私もこの立場を支持したい。

特定の集団や事業に対する「平和のための文化イニシアチブ」が当該地域に与え得る負のインパクトをどう抑止・軽減できるか検討する必要があるだろう。越境や混血による文化的な異種混淆がごく日常的に行われている地域、国民共通の言語や教育の普及など、国家建設そのものを急務としている地域、宗教や言論の自由すら保障されていない地域、「文化」を主張するための経済的基盤すらままならない貧困地域、文化的保守反動が著しい地域など、さまざまなケースにおける事例の収集、そして実態やインパクトの精査が欠かせない。

問題提起3:「平和のための文化イニシアチブ」に対する自国内の世論や政治指導者からの理解と支援をどう得てゆくか。

(2)5月15日公開シンポジウムより

5月15日講演

ハンス＝ゲオルグ・クノップ

世界の平和プロセスをサポートすることはいいこと、必要なこと、大事なことでしょう。必要があれば文化イニシャティブを使ってそのプロセスを始めることもそうだと、誰もが同意するはずですが、けれど、いつでも現実を忘れず、文化的な関わりには必ず限界があることを忘れないのもまた、まちがいでなく適切なことです。適切な政治的枠組みがなければ、平和のイニシャティブは暗礁に乗り上げます。現代の世界のあり方がそのまま突っ走れば、経済関係だけがどんどん先に進んで、文化関係を置き去りにしてしまいます。それが現実です。けれど、文化イニシャティブが特別に重要なのだと自信をもって指摘するのも理由のないことではありません。文化イニシャティブにしかつくりだせないことがあるのです。

文化的な枠組みならば、目の前の政治問題や経済利益をさしおいて、人々が集います。文化の枠組みの中であれば、政治情勢の風向きをはなれて何かをつくりあげることができます。これは、信頼の雰囲気をつくりあげることです。批判的な質問が可能となるような雰囲気です。自分の文化的伝統に縛られた地平線が開けていくような雰囲気です。少なくとも実験的なベースではそれが可能になる雰囲気です。

この最後の点は、特に重要です。私は強く思うのですが、文化交流は、自分自身のことをより深く知る機会を与えてくれるものです。以前には当たり前とっていたことを分析する機会がそこにあります。

これはときには、それほど直球勝負なプロセスではありません。それでも必要なプロセスです。どんどん複雑になり途方にくれてしまうような世界の中で、社会がアイデンティティを確立する上で必要不可欠なプロセスなのです。

これは、高いレベルで共感するために欠かせない前提条件です。これが文化や国家が集まるときに力を発揮します。つまり、はじめなじみのないものの見方で自分自身を考え、やがて全地球的な視点に立つことができる能力です。この能力がなければ、21世紀の文化的な難題に立ち向かうことは非常に困難なことになるでしょう。

共感を身につけることは、文化イニシャティブの重要な目的ではないかと思います。おもしろいのは、これがうまくいけばいくほど、それはあからさまな意図とは無関係になっていくことです。文化同士が開かれている状態は、命令されてできるものではありません。そして、シミュレーションができるものでもないのです。

どうやってできるのでしょうか。その答えは、困難のなかに見つかるのだと思います。個別の事例をできるだけ客観的に検証することが必要です。そうする上で、文化とは人為的なブロックのなかに固定されたものではあり得ないということに気づくことがたいせつです。私の経験では、文化に関わり始めるとすぐに、接点が見つかります。そこからコミュニケーションの対話を始めることができるのです。

今回の集まり枠組みの中では、特筆すべき成功事例が広範囲に語られることと思います。

たとえば、2004年に私はカブールの演劇祭に行く機会があったのですが、そこではヘレーナ・ヴァルトマン制作の《リターン・トゥ・センダー》が上演されていました。

嬉しいことにヘレーナ・ヴァルトマンさんはこの集まりに出席されていますが、同様にカブールのゲーテ・インスティトゥート部長であるリタ・ザクセ＝トゥサーンも出席しています。このアフガニスタンでの演劇際はかなり満足すべきものだったのですが、私はここからいくつかの結論を引き出しました。これは文化間コミュニケーションの好例だったということです。これは交流のかけがえのない機会でしたが、というのも、各公演ごとに600人ものアフガニスタンの人々がドイツの劇作家ベルトルト・ブレヒトの作品を鑑賞したからです。さらにアフガニスタン社会内部でのコミュニケーションの好例ともなりました。このようなパフォーマンスの守られた環境内で聴衆が感じたことや見解を表明する必要性には目をみはるべきものがありました。そして、アフガニスタン社会内での差異をしっかりと印象づけられました。たとえば、若い聴衆と高齢の聴衆のあいだの世代間摩擦です。

私の経験では、あらゆる文化には溝と突破口があります。さらにこれらは文化間コミュニケーションのプロセスに関連性をもたらします。こういったことすべてに関して、その前提条件は守られた空間が提供されることであり、そこで人々自分を表現する欲求が自由に花開くのです。したがって、私にとって、このような文化イニシャティブは2つのことをあらわしています。そこにはなじみのないものに前向きに反応する十分な自信があることと、差異を理解することができ、一方であらゆるなじみのない文化が対話にもたらず機会を受け入れるのに十分な自信があることです。

目的は、これらの機会を拡大し、それを持続可能なところまで育てていくことです。こちらの地域が危機にあるとか、あちらが危機にあると注意をあちこちに向けるようなことがあれば、実りは失われることでしょう。

私が感銘を受けてきたのは、20世紀の戦争の旧敵国との和解を達成しようとドイツが試みてきたことに、日本で非常に大きな関心があることです。ゲーテ・インスティトゥート東京支部において大盛況の広範なイベントが開かれてきていますが、その多くは国際交流基金との共催です。この場をお借りして、感謝の意を述べさせていただきたいと思います。

歴史的記憶は長く、非常に長く生きながらえます。特に昔の戦争敵国の歴史的記憶、実に悲惨で、多くの人にとってトラウマとなるできごとは、なかなか消えないものです。こういった記憶に対処することは、文化イニシャティブの重要な目的の一つです。我が国ドイツと隣国フランスのあいだには、そういった文化イニシャティブが数多く行われています。おそらくそこから学ぶこともあるでしょう。

ドイツとフランスの市町村のあいだには、2000を越える姉妹都市提携があります。フランス料理やフランスのファッションを考えるまでもなく、フランス文学やフランス映画は実に多くのドイツ人を魅了しています。その一方で、フランス哲学者はしばしばドイツ思想家の影響を受けました。現在は、ドイツとフランスの学校どちらでも使えることを目的にした国際歴史教科書があります。

ちなみにこれは温かく歓迎されたプロジェクトであり、やがて当地のゲーテ・インスティトゥート東京支部で開かれた興味深いイベントにつながりました。

しかし、現在のドイツとフランスのあいだのように非常に満足のいくような状況があつてさえ、そしてこれほど多くの広範な文化イニシャティブがあつた上でなお、戦時下の記憶は驚くほど長く残りつづけていることが明らかになります。過去はまだ今日でさえそこにあります。これはなにも、文化イニシャティブの効果が無いということではありません。全くその反対に、このことから明らかになるのは、そういった記憶の上になお、あのようなことが二度と起こってはならないという共通の自覚をつくりあげることができることなのです。さらに、このような文化イニシャティブはいくらあつても足りないのだということも示しています。近隣両国間で平和の状態が60年以上も続いているドイツとフランスのあいだでそうであるのならば、戦争の記憶がもっと生々しい世界なら、どれほどこの考え方が当てはまるでしょうか。

あるいは、ヨーロッパの軍勢が攻撃的な優越意識でもって押し寄せてきた植民地の状況にはどうでしょう。

ドイツとフランスの事例が示すのは、文化的紛争の持続期間が長期に渡るということだけからしても、平和を保つ文化イニシャティブを非常に長期に渡るベースで考案することが理にかなっているということだと、私には思えます。けれど、文化紛争の複雑さと予測不可能な性質から、結果を予測することが必要になります。そして国際交流基金とゲーテ・インスティトゥートはともに、こういうことを以前からやっているのです。文化イニシャティブは関係パートナーの視点を積極的に考慮しようという意志と透明性のもとに計画されるべきです。そして予想外のできごとに備えを怠らないことが必要です。

短期的な考え方では、早期の結果を求めることになり、信頼を構築することができません。この信頼が、文化交流から発生する避けられない想定外のできごとに思慮深く対処するために必要となってきます。

この集まりで詳しく紹介されてきた事業が示すのは、必要なのは芸術家を見分ける感覚だということです。どの文化のどの芸術家が、点火するための火花とでもいえるものをもたらすことができるのかということです。

そして、どこか別の国で行われている議論に対する感覚をもつことが必要です。こういった議論が、役に立つのです。あらかじめ計画しておくことはできません。世界のあらゆる国で同じようにうまくいく普遍的な公式がないことは、まちがいのない事実です。文化イニシャティブの結果として実現されるのは芸術や文化といったことがらだけではないということも、ある程度は可能でしょう。文化イニシャティブの概念そのものも、芸術形態のようなものです。あるいはこの発想がちょっと野心的に過ぎるとしたら、文化イニシャティブは粒々辛苦の工芸作品だといえましょう。

このような一種工芸作品を用いる方法を見つけるのは、国際交流基金やゲーテ・インスティトゥートのような文化ファシリテータ機関の課題なのでしょう。私の経験からいえば、文化イニシャティブを成功させようというのであれば、身につけるのに長期を要するノウハウが必要です。経

験を積んだスタッフが必要です。影響力のある窓口とつながりのネットワークが必要です。文化イニシャティブをスタートさせるという課題には、用意しようとするものすべてをまず自国で世に出しておくことも重要です。

このようなファシリテーションは、そうそう容易いものと思ってもらっては困ります。文化イニシャティブによって平和が早急にもたらされるなどと期待してはいけません。ときに複雑で、結果がすぐにはあらわれないのが、これらイニシャティブの特徴なのです。

文化交流は研究プロセスと比べてみるのがいいかもしれません。研究のパートナーは、結果を表現する適切な方法を探します。これは、平和をつくりだすための文化イニシャティブにおいて特に重要なことです。

最終的に文化イニシャティブも研究プロセスも、内陸部探検と似たところがあるのでしょう。未知の領域に踏み入れる一步一步を十分に注意して進めなければなりません。英語圏諸国には、このことをあらわすのに便利な言葉があります。「意見が一致しないという点で意見が一致する」のです。これはもっとしばしば用いられてもいい言葉かもしれません。自分の立場をあきらめることなく他者の立場を考慮する能力は、文化間のコミュニケーションで基礎となる必要条件のひとつです。問題領域での文化イニシャティブでは、これは不可欠の技にも発展します。コンセンサスをいたずらに求めるのではなく、リンク機能における少数意見が求められます。もしもこれに成功すれば、豊かな成果が得られます。自分自身を理解し、表現する方法を人が学ぶのは、特に差異を通じたときなのです。

そして、文化イニシャティブの重要性を伝えるとき、沈黙すべきでない重要なことがまだあります。文化交流にはコストがかかります。私の国では多くの権力をもった人々が文化イニシャティブのことをけっこうなぜひいたくだと思っています。お金が余ったら手をつけてもいいことなんだろうと。

そして、二国間の経済関係、政治関係に添える花みたいなものだと思っています。経済や政治に比べられるほどにも緊急性や重要性は高くないのだと。

私はちょっと違うと思います。私にとって文化交流は、国と国のあいだの関係を支える大黒柱の一本であると思えます。社会のあいだの独立したコミュニケーションの形態であり、文化交流に投資する可能性がなければほとんど、あるいは全く存在し得ないプロセスを可能にするものです。

現状をみるに、そういった投資のニーズは数多くあります。ドイツと日本のあいだのようにすべての国際関係、文化間関係がこれほどまで満足のいく形で進行する例はなかなかありません。残念ながらそうはいかないのです。世界を見渡せば、多くの領域で、実りある文化間交流の基礎を実際に設けはじめたばかりだということに気づかざるを得ないでしょう。多くの構築事業をまだまだやらねばなりません。そして世界の地域によっては、そういった事業がどうにも簡単ではないという懸念が横たわっているのです。ときには、窓口が完全に壊されるのを防ぐために多大な努力が必要になりそうな印象を受けることさえあるのです。

この集まりから結論を出す段階ではありませんが、こういった事柄について意見を交換することがいまや非常に重要であることが既に明らかに思えます。事実、私の組織では、文化イニシアティブを用いてどのように異なった社会の間の平和な関係を建設し支えていけるかという疑問が非常に重要になっているのです。

そして、今回当地に国際交流基金を訪れ、総合的な経験の交流ができる機会をもてたことがとても価値あると思うのです。さらに、私どもの組織が定期的実施している広範で手応えを感じられる事業に関してもです。人と人との話合い、直接の交流が、文化間の対話プロセスでは非常に大切だと思います。人と人の交流に代わり得るものはありません。ある程度までならこんなこともいえるでしょう。対等の関係でこれを可能にしたことが、私たちの事業の核心であると。

しばしば語られる文化戦争の概念は、不適切なものです。これは現実の難題を反映するにはあまりに粗雑だからです。

最後の分析として、互いにコミュニケーションを行うのは個人であって、決して文化そのものではないということをおきましょう。文化間コミュニケーションの概念は、個人をそれぞれ大きく異なった形に造型した文化的背景がある状況で個人が創造的な交流ができるという概念に基づいています。こういった目的に必要なのは、文化的多様性や異なった価値体系に建設的に触れることです。

私見を述べさせていただきますと、ここまででも私の立場からはこの集まりが創造的な交流の好例であるということが出来ます。危機に瀕した地域だけでなく、ドイツと日本の間のような平和な場合でも、このような交流が重要です。そういった理由から、東京にお招きいただいたことを心から感謝したいと思います。文化イニシアティブを発展させていく上でこのような重要なパートナーが得られていることは大いに誇りに思うところであり、勇気づけられることでもあります。この文化イニシアティブで、世界を少しずつ平和に向けて前進させてまいりましょう。

行き詰まりの先に —中東の紛争解決における芸術の役割の可能性

ファリード・マジヤーリ

これまでのところ、中東における西側外交は、イスラエルとその隣人たちとの間の紛争に対する有効な解決をもたらすことができていない。この失敗によって国際文化協力の分野の関係者達は、凝り固まった当事者間の対話とデタント（緊張緩和）に対して彼らが果たしうる役割の潜在的可能性について、期待感が高まっていることに気づき始めている。この個人的報告で、私はこの新たな役割を満たす試みにおけるゲート・インスティトゥートの経験を分かりやすくお話ししたい。

ヨルダンからパレスチナ領に旅行するためには、ヨルダンとイスラエル両当局が要員配置している国境越え地点のアレンビー橋（Allenby Bridge）を横断しなければならない。この橋は死海の北岸から遠くない砂漠に位置している。わびしい場所である。ここではヨルダン川は哀れな滴りでしかなく、砂漠はうだるほど暑く、この場所全体にファラオを悩ませたことを思い起こさせるハエの群れがいる。いっそう悪いことに、国境越えは外国人やパレスチナ人（彼らには専用ターミナルが設けられている）が受ける不公平な扱いで悪名が高い。2008年5月にゲート・インスティトゥートの招きで、ドイツ人振付家のヘンリエッタ・ホルン（Henrietta Horn）と彼女の舞踏団は中東ツアーを実施した。ベイルート、ダマスカス、およびアンマンにおける公演の後、ダンサー達は続いてラマラにまで行く計画を練った。私は彼らをラマラへ連れて行くために、ヘンリエッタと彼女のダンサー達とその橋で会った。私が着いた時、何かよくないことが起こったと悟った。ダンサーの一人の韓国人が、台湾人の同僚と交替していたのだ。不幸なことに、コミュニケーションの途中のどこかでこの情報が失われていた。台湾市民はイスラエルに入るためにビザが必要である。次の夜の公演が計画通りに行われる可能性は限りなく小さくなってしまった。国境横断地点に配置されたイスラエル陸軍と憲兵は、パレスチナを訪れたい人々の生活を幾らかでも楽にさせてあげようというような配慮などは持ち合わせていない。ターミナルの中ほどで、旅行者や兵隊たち一様の視線の下で、拳句のはてにリードダンサーの一人であったシュアン・チェン（Hsuan Cheng）は、別のダンサーに彼女のパートの踊り方を教え始めたのである。この時点で我々は皆、彼女がヨルダンへまっすぐ送り返されるだろうと確信した。しかし皆が驚いたことには、我々がリハーサルをしながら待機し、またイスラエル側では彼らが上司達と集中的に検討してくれた実に10時間の後に、若いイスラエルの中尉は我々全員が通過できる旨のニュースを突然伝え、「良い滞在を！」と言った。ドイツには適切なビザ無しに入国するようなことは想像できなかつたと思う。

2003年の夏に、私はヨルダン川西岸地区のジェニン（Jenin）市で立体芸術品ワークショップを実施するべく、ドイツ人の概念美術家のトーマス・キルッパー（Thomas Kilpper）を招いた。当時状況は非常に緊張していた。それは第2のインティファダ（1987年に始まった、イスラエル占領地（ヨルダン川西岸地区およびガザ地



Thomas Kilpper: The Jenin Horse, 2003

区)でのパレスチナ住民の抗議運動)と2002年4月の「防衛的盾作戦(Operation Defensive Shield)」のすぐ後であり、ジェニンの難民キャンプは完全に破壊されていた。死傷者の数は論争的であるが、パレスチナ人は彼らの立場として、大虐殺であったと話している。

トーマスがジェニンに着いた時、イスラエルの戦車がほとんど毎晩、市を急襲していた。市や難民キャンプの若者たちと一緒にトーマスは、本物より大きなスクラップ金属製の馬を造った。その原材料は、家々の瓦礫、壊れた車、地元のmuqata'a(地元政府の本部)のねじれた残骸から取られた。アイデアは破壊された材料に新たな生命を吹き込むことであった。アラブ文化では馬は機動性と力の象徴である。

馬の体の一方の側には、'as'af(救急車)の語が書かれた一片の白い金属板がつけられていた。この板は、Red Crescent(赤新月《イスラム教国の赤十字社に当たる組織》)の救急車から回収されたが、それはイスラエルのロケット式擲弾(てきだん)が命中した後、その内部で地元の緊急医が死亡したものであった。完成された後、その馬はジェニンの街路を通過して牽引された。若い芸術家達は、一台の救急車とアラブのサラブレッドに乗った者達に伴われて、誇らしげに彼らの作品を練り歩かせた。キルッパーが彼のプロジェクトの最後の部分として「西岸」を通過してラマラまで行き、またジェニンに一巡して戻った。立体芸術品を造ったワークショップ参加者達は、このツアーで芸術家達に参加することを主張した。彼らにとってはラマラが世界主義的な町の精神を発散したのであった。5メートルの高さがある立体芸術品は農民のトラクターで「西岸」中を牽引された。90キロのツアーは合計11時間かかったが、これは馬の前進が多くのイスラエルのチェックポイントや道路封鎖によって遅れたからであった。最終的に若いイスラエルの徴集兵士達は、それが「トロイの馬」かも知れないという恐怖心を捨てて、この一団を自由に通過させた。今日に至るまでこの馬はジェニンの広場に堂々と立っている。¹ 皮肉なことに、この立体芸術作品に最初の弾丸の穴を開けたのは、イスラエル軍ではなく、ジェニンのアレンビー橋の指導者達であった。彼らはそれを数ある「平和事業」の一つだと勘違いしたのであった。負傷者はおらず、その指導者は後に芸術家に対して謝罪した。

これらの2つの物語から我々は何を「学ぶ」ことができるだろうか？ 芸術は我々の内部の人間的な側面を引き出すのだろうか？ 芸術は、凝り固まった敵同士の間に対話とデタントを育むのを助けるのだろうか？ それは話がうますぎて信じられないように聞こえる。

私は前日の討論、特に小倉大使の「少なくとも文化上の外交政策では我々はl'art pour l'art(芸術のための芸術)とは決別すべきである」という所見に戻りたい。私の考えでは、我々は芸術を政治的、あるいは外交的道具として使うことがないように注意深くなければならない。和平のプロセスを助けようとする芸術家の中にはこのリスクを取っている者がいる。芸術家は常に、ある政治的立場を取り、また「関与する芸術」は常に存在した。永続する重要性を持つ芸術は、その大半ではないにせよ多くが、ある一方に味方をして、不公正と占領に起因する苦しみを示したり、



Francisco de Goya: El 3 de Mayo de 1808 en Madrid

あるいは戦争の恐怖を糾弾したりする。

幸いにも最近数年、芸術は政治色が弱まってきている。芸術上の考察や概念は、社会での影響をますます増大させており、研究ベースの芸術の中で今や、以前はジャーナリズムや社会科学だけの領域であった分野を乗っ取っている。一例は、ドイツ人芸術家ルーカス・アインゼルのプロジェクト「The Many Moments of an M85 – Zenon's Arrow Retraced (M85の多くの瞬間–ゼノンの矢を辿る)」である。この製作中の作品は、2006年のレバノン戦争の際に用いられたイスラエルのクラスター爆弾M85のある想像上の軌跡を追うものである。このプロジェクトの核となるのは、この爆弾に影響を受ける人々–農民、外科医、地雷除去専門家、エンジニア、工場労働者、政治家、そして軍人–の写真である。「彼らは皆、彼らなりの最善を尽くしている。戦争は明確な悪意の結果ではなく、個人的、商業的、政治的、社会的利害関係の産物なのだ。全体的な利害の結果というだけでなく、個々人の利害の結果なのである。芸術家は私たちの概念、行動、そして少なくとも象徴的には(おそらく)不可避であるM85の爆発をも変えようと意図している。軌跡の個々の部分や側面を、その細部に至るまで注視することにより、私たちはゼノンの矢が、ありのままに見える状態になったときに、その長い軌道の途中で静止するのを発見し、目撃し、感じることができるかもしれない。人間が作り出した、あるひとつの残酷で無益なものとして。」²

ラマラのゲーテ・インスティトゥートのインターンであり、博士論文にパレスチナ領におけるゲーテ・インスティトゥートのケーススタディを扱った、ティナ・クラウスマイヤーが、私の関心をニコラ・ブリオに結び付けてくれた。芸術批評家であり、キュレーターでもあるブリオは、「関係性の芸術」を、「その理論的地平線を、独立した私的な象徴的な場の表明としてではなく、人間の相互関係の領域と社会的文脈として捉える」と定義しており、さらに「現代芸術によってもたらされた美的、文化的、政治的目標の急進的な激変を指す」ともしている。³ この種の芸術は、個別の消費の私的な空間においてではなく、「包括的」に意味を生み出すことのできる象徴、形式、行動、対象との個人的な出会いを通じて、関係を作り出しているのである。⁴ 私たちのジェニンでの馬のプロジェクトは、ブリオの定義にまさに合致している。ジェニンと近隣の難民キャンプとの緊張関係に悩まされてきたコミュニティにおける社会統合を強化したのである。ゲーテ・インスティトゥートとその地元連携先は、「マッチメイカーであり仲介者」として行動し、プロジェクトをボトムアップの方法を用いてマネジメントした。⁵ ドイツ人芸術家たちとの夏は、参加者たちに経済的、文化的に恵まれない都市に対して活動を提供したのだった。私たちは、彼らがそれまで知らなかった社会的な相互関係のあり方と出会い、殉教者として死ぬという理想ではない、代替的なロールモデルと視点を得てほしいと期待している。しかし、文化プログラムの効果は、測定することはほぼ不可能であろう。

芸術はいつも紛争を扱ってきた。しかし、芸術はどのようにして紛争解決と和解に資することができるだろうか？ 社会事業に関連する芸術や紛争解決に関する文献(つまりは若い非行者や暴力に支配されたコミュニティのためのプロジェクト)はたくさんあるが、民族どうし、または国家どうしの中の紛争解決についての文献は大して見当たらない。紛争が政治的、または軍事的に解決された後には、芸術プロジェクトが和解を育むためにうまく機能するかもしれない。しかし、戦争や内戦の救済方法として芸術を真剣に考える人間が誰かいるだろうか？ オーストラリア出身のコミュニティ芸術実践家のウィリアム・ケリー(William Kelly)が、「絵は弾丸を止めることはできないが、・・・絵や一片の書き物やひとつの劇場は弾丸が発射されることを止め

ることができる」と述べたとき、彼は大げさだったのだろうか？⁶

パレスチナ領、およびイスラエル（また時にはレバノンやシリア）のゲート・インスティテュートは、三者間（ドイツ、イスラエル、およびパレスチナ）の芸術プロジェクトを提案する芸術家や活動家から頻繁にアプローチを受けたが、それは偏見を乗り越えるために両方の側からの芸術家を一緒にし、相互理解と平和に寄与するプロジェクトであった。これらの芸術家や活動家は彼ら自身が窮地にあることに気がついた。一方では、彼らは断層線と分割の橋渡しをして、敵対者のイメージを調停し、そしてそれと闘った。他方では、この文脈で必要なものは和解と収束ではなく、撤退と分離である。両サイドの多くの芸術家や知識人がそうであったように単一国家（イスラエルとパレスチナに対しての単一国家、またユダヤ教徒、イスラム教徒、およびキリスト教徒に対しての単一国家）という解決法が好ましいとしても、これは長期的な目標であって、撤退と2つの分かれた国家が並んで存在する一時的でおそらくは長いステップを通じてのみ達成される目標であることを受け入れざるを得ないであろう。もちろんパレスチナとイスラエルの紛争の性格とそれぞれがその相手方についていっそう良く理解することは切実に必要であろう。イスラエル内での政治的変化は、中断した和平交渉の再開にとって重要であり、この政治的変化は有権者の間に無知と無関心がはびこる限り起こらないであろう。

三者間文化的イニシャティブは、遠くから見れば良いように見えるが、実施することは困難である。それらは、我々のパレスチナのパートナーにとってはしばしば恩着せがましく見えて、彼らは紛争が主として互いに相手をいっそうよく知ることについてではなく、占領についてであると指摘する。私は一度「あなたは自分の家に押し入った強盗、そしてあなたに銃を突きつける一方であなたの財産を盗んで、一緒に歌を歌おうとする強盗を招き入れますか？」質問された。我々のパレスチナ人パートナーはまた、ドイツ人が調停者を演じることと、これに対してメルケル首相のイスラエル訪問で再度強調されたドイツのイスラエルに対する弱腰姿勢ということの正当性に疑問を呈している。彼女のイスラエルに対する無条件の支持は、パレスチナ人および批判的なイスラエル人から同様に激しく非難されてきた。「首相は友好関係を、介入しないことと定義しているかのように私には見える」とメレッツ党のリーダーでありオスロ合意の立案者の一人であるヨッシ・ベイリン (Yossi Beilin) は言っている。「それは友好関係ではない。真の友好関係は和平のプロセスに関与することである」。⁷ 最後に述べるが決して軽んじられないことは、パレスチナ人とイスラエル人の直接的な接触は技術的にも法律的にも不可能だと言う点である。イスラエル、またはエルサレムの身分証明書文書を持つものを除いては、パレスチナ人はイスラエル、または東エルサレムに行くことができない。イスラエル市民は「西岸」、またはガザを訪れることを法的に許されておらず、大学のようなパレスチナの機関はイスラエルの機関と協力することを、法的拘束力があるイスラエルに対するボイコットによって制約されている。イスラエル市民と、レバノンやシリアのようなアラブ諸国の市民の接触もまたこれら諸国の法律によって法的に禁じられている。

あらゆる障害にも拘らず、「ウェスト＝イースタン・デイヴァン (West-Eastern Divan)」は中東の幾つかの国々出身の音楽家と一緒に演奏する若者のオーケストラである。この協力はスペイン政府から提供された外交旅券によって可能になった。エジプト人、イスラエル人、ヨルダン人、レバノン人、パレスチナ人、およびシリア人が皆この素晴らしいオーケストラで演奏している。このオーケストラは1999年にワイマールで、アルゼンチン系イスラエル人指揮者/ピアニストのダニエル・バレンボエム (Daniel Barenboim) と、今は亡きパレスチナ系アメリカ人学者のエドワード

サイド (Edward Said) によって設立された。このアンサンブルは、ヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテによる名詩文集にちなんで名付けられた。バレンボエムは、彼の行ったイスラエル人とパレスチナ人の間の理解の育成に対して、2007年にゲーテ・メダルを与えられた。彼は、「このディヴァン (Divan) は愛の物語でも、平和の物語でもない」と言った。「それは実体以上に美しく語られ、平和のためのプロジェクトと称されてきた。しかし、そうではない。うまく演奏するか否かに関わらず、このプロジェクトは和平をもたらさずはしない。このディヴァンは、むしろ、無知に対抗するプロジェクトとして始められた。人々が、相手を知り、相手が考え、感じることを理解することが絶対に必須である。私はこのディヴァンのアラブ人メンバーをイスラエル人の視点に変えようと努めてはいないし、また私はイスラエル人を納得させてアラブ人の視点にしようとしてはいない」。⁸ 「ウエスト＝イースタン・ディヴァン」は間違いなく成功物語である。この、ラマラで敬意をもって「マエストロ (巨匠)」と呼ばれて彼は、自身の芸術的評判によって何とかうまくこの文化的禁輸を無視しているが、彼のコンサートをボイコットすべきだと要求し、彼のパレスチナ人パートナーによる協力を非難する声がパレスチナにあると言うことは注意しておかねばならない。同様に、彼はイスラエルにおいて厳しく批判されたが、これは第一には暗黙の禁忌を破ってリチャード・ワーグナーの作品をベルリン交響楽団と一緒に指揮したことに対してであり、また二番目にはディヴァン・オーケストラでの仕事に対してであった。

我々は既に政治にはまり込んでおり、この時点でイスラエルとパレスチナ人の間の紛争をごく端的に説明しなければなるまい。これは土地と、主に「西岸」の下に位置している帯水層から主に得られる希少な水源に関する紛争である。しばしばそうであるように、物質的利害がイデオロギーと宗教に混ざり合っている。イスラエルにとっては、その市民の安全が主要な問題である。両国民の間の交渉の歴史は、失われた機会、および極めて貧弱な和解案の実行さえも失敗してきたことの歴史である。現在、2009年3月に政権を取ったベンヤミン・ネタニヤフ首相の下でのイスラエル政府は、以前の合意の全てを撤回し、「西岸」と「東エルサレム」での入植を拡大する政策を追求している。エルサレム (Al-Quds《Jerusalem のイスラム名; アラビア語で聖地》の意) の将来は、いかなる和平計画の持続可能性に対してもその試金石であり、この市の「ユダヤ化」政策は最悪の事態を危惧させる。このタカ派アプローチはまた、アラブの文化首都プログラム (Arab Capital of Culture program) —これはエルサレムをアラブの文化的首都と宣言し、また国連教育科学文化機関 (UNESCO) とアラブ連盟によって組織され、アラブ文化を促進・祝福し、アラブ世界における協力を促すことを意図したものである—の2009年版の準備に関与した者に対する厳しい対処により、目立ったものとなった。

現在の状況について一言。私が見る限り、パレスチナ暫定自治政府はその義務を全て満たしたが、見返りに何も得られなかった。「西岸」からのイスラエルへの武装攻撃は、ここ2～3年は小康状態であった。パレスチナの政治家は苦痛の大きな譲歩をしてきた一方で、同時に彼ら自身の政治的生き残りのリスクを取るようになった。ジェニンのような武装抵抗の拠点は現在平和的であり、その法の施行に対して広く賞賛を受けている、ヨーロッパ人によって訓練された警察部隊によって管理されている。

一方、ガザは異なる状況である。ガザ戦争は、多数の市民の犠牲者を出す結果となったが、これは回避することができたであろう。私はハマスが意図的に、その結果を明確に予想した戦争を引き起こし、更にはその無責任な政治を追及して市民を人質に取ったと信じているが、イスラエルが無差別、かつ正確度の低いカッサム (Qassam) ミサイルを発射したことは完全に不釣

合いであった。イスラエルの新聞ハーレツのギデオン・レヴィ (Gideon Levy) がコメントしたように、キャスト・レッド作戦 (Operation Cast Lead) は、大きな広範な軍隊が無力な住民、および戦闘地域を逃げてかろうじて戦った弱くてみすぼらしい組織に対して戦った「デラックスな戦争」であった。⁹

イスラエルの軍事的反応を引き起こしたハマスの役割は非難されるべきであるが、ガザから発射されたロケットが西岸と東エルサレムの更なる併合の正当化となり得ると示唆するにはかなりの神経を必要とするであろう。

2002年6月以来、壁—あるいは境界フェンス—がイスラエルの心臓部と西岸のパレスチナ領を分離する線に沿って建設中であった。この壁はベルリンの壁よりも更に高く、いっそう巨大である。イスラエルではこの建設は、暗殺者達がイスラエルに潜入するのを防ぐ為の手段として正当化された。イスラエル人は、この障壁を「分離フェンス」、「安全フェンス」、または「対テロリストフェンス」と称するのが最も一般的である。パレスチナ人はそれについて「障壁」、アラビア語で جدار (jidar = 壁)、あるいは英語の「アパルトヘイト壁」を引き合いに出すのが最も一般的である。2004年の決定で国際司法裁判所は、この壁の建設が「国際法に反する」と宣言した。この境界設置の批判者は、それがイスラエル入植地をイスラエルに意図的に組み込もうとするものであり、西岸の幾つかの部分を実事実上併合する結果になると主張している。パレスチナ住民にとってはこの境界は苦痛の多い結果を生み、家族が分離され、労働者はイスラエルでの仕事に対するアクセスを失い、その結果彼らの生計を失い、子ども達は最早学校に辿り着けない。境界フェンスは、将来のパレスチナ国家から生存能力を奪うという、もっと広範な戦略の一部であるように見える。まだ設立されていないパレスチナ国家は最早、外部境界をもたず、またガザ地区へ接続されていないことになるであろう。



広報活動という面ではこの壁は成功していない。壁は多くの人々を引き離し、また世界中の芸術家を刺激した。壁にスプレーで落書きすることを発注できるウェブサイトさえ誕生した。過去数年間、ゲーテ・インスティトゥートはこの壁をテーマにしたプロジェクト提案で溢れていた。

テルアビブ大学教授のMeir Wigoderは、彼の分離障壁の写真撮影へのユーザーガイドの中でそうした芸術作品のジレンマを説明している。「何十年にもわたり、芸術家や写真家はこの画面を破壊する方法を探究してきた。彼らは消し跡という手段を選んで、画像の暗示を含んだ特長を示すことにした。我々の例では、「分離障壁」を見えなくするために多くの試みがなされた。窓枠眺望がその上に描かれて、壁が隠れていた反対側の景色が見えるようにした。家庭向きの壁紙を吊ってその部分を冷たい外装から暖かい内装へと変えた。その上に白いペンキが塗られてミニマリストが浄化した地面を創って壁のくすんだコンクリート表面に対抗した。

落書きの筆使いのダイナミックな動きによって、冷たい石の死の破壊的な意味がかえって鮮明に印象付けられる。芸術家達は壁の側に集まって抗議の画像を吊るし、壁をアートギャラリーに変えた。その上に映画が投影されて聴衆を別の架空の空間の想像上の領域へと移す透明の映画館のスクリーンに変える試みが行われた。またビデオ活動家はその上部にカメラを配置して

レンズを相対する方向に向けて壁の両側の景色を選んで壁を透明に見せた。壁を見えなくする創造的なあらゆる試みは、それにも拘らず壁の存在を強調している。壁の表面は、反抗の創造的な政治的意思表示の全てよりも強力である。「この壁は倒れる」と読める壁の落書きは、壁の表面無しには存在し得ない。¹⁰



写真 Steve Sabella

アートプロジェクト「壁に挑戦する」がイスラエルとパレスチナの分離壁に沿って始められ、2007年7月には大規模の60mの写真の設置と国際会議を通じて表現された。イスラエル人でドイツ生まれの芸術的写真家のRuthe ZuntzとMichael Reitzの独創的な考えの産物としての「壁に挑戦する」は、壁で分離された多くの環境—すなわちドイツ、キプロス、北アイルランド、イスラエル/パレスチナ—に生活する芸術家による芸術上の声明を提示した。このプロジェクトは欧州委員会、外交問題研究所 (IFA) やヨーロッパ文化財団のような機関によって資金提供を受けた。イスラエルのパートナーは、Van Leer Institute, エルサレム映画祭、およびエルサレムシネマテックであった。イスラエルに対するパレスチナの禁輸にもかかわらず、アルクドス大学はこのプロジェクトを支援し、パレスチナ人写真家のスティーブ・サベラ (Steve Sabella) がそれに参画した。



写真はエルサレムとパレスチナの町アブ=デイス (Abu Dees) を分離する壁に投影された。この催しは、イスラエル境界警察との調整の下で実行され、そのため参加者は通常は入れないセキュリティー域に入ることが許された。しかし、ゲート・インスティテュートがラマラから訪問者を連れて行くために雇ったバスは半分が空席であった。私が話をしたパレスチナ人の多くは参

加したがらなかった。彼らは、平時を装い、第三者 (国際的主権者) の介入に頼って彼ら自身の土地の移動の自由を数時間確保するプロジェクトによって、彼らの尊厳が傷つけられると感じていた。

ベルリンの壁の倒壊の20周年を記念してゲート・インスティテュートは現在、プラスチックのレンガを類似の過去、または現在の状況を持つ各国に送っている。中国、キプロス、イスラエル、朝鮮、メキシコ、パレスチナ領、およびイエメンである。これらの場所で、レンガは芸術家、知識人、また若い人々が壁やフェンスに取り組むためのキャンバスとなる。象徴的な「壁の旅」は、2009年11月9日のブランデンブルク門での「自由の祭り」において計画されているドミノ効果の一部になる。¹¹ ラマラの近くのビルゼイト大学の芸術学部の生徒達がこのプロジェクトに参加する。私は、我々のプロジェクトに関して幾つかの懸念と、補足を感じている。というのはそれが形 (プラスチックのレンガ) と内容 (壁の現象) の両者をあらかじめ決めており、そのため、参加する芸術家にとって彼ら自身の表現の余地を比較的小さくしているからである。これは生徒が着色する対象を予め与えられている、学校における美術のクラスを思い出させる。プロジェクトは象徴的であり、プラスチックのレンガは壁、および障壁の無い将来の展望を表している。政治的芸術はシンボルを使う傾向があり、パレスチナでは (しばしば根こそぎにされる) オリー

ブの木、kūfiyyah (アラブの男がよくかぶる伝統的なかぶりもの) や壁のイメージはすでに非常にありふれているので、私はこれらを使用するのでは、芸術的に興味深いものは生まれないと思っている。私はこのプロジェクトが、ただ我々には暖かく曖昧な感情を与え、政治家にはベルリンの壁を取り壊した自分たちの功績を祝福する機会を与えるだけではないか、と考えずにはいられない。皮肉にもこれらの政治家はパレスチナの長引いている占領(さらに、毎年数十人の移民志望者が非業の死を遂げるメキシコと米国を分離するフェンス)に対して常に盲目であったのと同じ政治家達なのである。壁やフェンスは人権を侵害するものであり、芸術的にも然るべく対処されなければならない。プラスチックの壁はそれが表すコンクリートの壁のようでは決してない。傾いたプラスチックのレンガに対する代替案は、分離障壁と他の既存の壁やフェンスの正確なコピー(本物のコンクリートと鋼鉄で作られた)をベルリンの壁がかつて建っていたまさしくその場所に建てることであったかも知れない。それは我々に壁や境界に対する責任は万国共通に、そして国際的にあること、また政治家はベルリンの壁について彼らがしたように、壁や境界が取り壊されるよう要求しなければならないことを思い起こさせるだろう。

我々の文化的イニシアティブのいったいどれが和平を育むのを助けたであろうか? 私は中東の悲惨な政治状況を見ると、どれでもないと言おう。この質問がナイーブであることに、私は気づいている。というのは社会的および政治的プロセスにおける芸術の影響は測定できないからである。私がはじめに述べたトーマス・キルッパー(Thomas Kilpper)の「Al Hissan-ジェニンの馬」は、パレスチナの個人、グループ、および利害関係者だけを扱っており、イスラエルを含めようとしなかった。我々は、この活動が市民社会に貢献し、武力闘争よりも交渉を好む勢力を強くしたことを願っている。この「壁プロジェクト」は、壁の双方のアーティストと観衆を巻き込んだが、同時に、お仕着せがましいという批判も浴びた。これまでの事業で最も成功したといえるのは、ウェスト=イースタン・ディヴァン・オーケストラである。¹²

私は、文化的機関が自分の役割を果たすことができる唯一の有望な方法は、それぞれのプロジェクトの主催国において自由主義的風潮を育成することであるということを目指したい。芸術が栄え、またそれが公の話題の重要部分を占めるような社会では、タカ派的政策をとる可能性が比較的に見て非常に少ないのではないだろうか。

しかしながら、文化的イニシアティブは政治家を彼らの任務から解放するわけではない。特に中東では、西側政府は彼ら自身の「存在意義」を前面に出す傾向をやめ、必要に応じてありのままの現状を話さなければならないと考える。

1 詳細な情報と写真については次を参照: <http://www.kilpper-projects.net/the-jenin-horse/gb/description.htm>

2 Lucas Einsele: "The Many Moments of an M85 - Zenon's Arrow Retraced", concept note, 2009

3 Bourriaud, Nicolas (2002) *Relational Aesthetics*, Dijon: Les presses du réel: p. 14

4 *ibid.*: 107ff.

5 Tina Clausmeyer: *Engaged Art' - How Can Artists Become Mediators in Conflict?* (unpublished)

6 William Kelly, "Acknowledgements", *Violence to Non-Violence: Individual Perspectives, Communal Voices*, William Kelly が編集した文集でThe Peace Project によるもの, Harwood Academic Publishers, Craftsman House, Sydney, 1994, p.xvi.

7 Der Spiegel Online, Friday, November 20, 2009, <http://www.spiegel.de/international/world/0,1518,541892,00.html> (retrieved 03/04/2009)

8 Ed Vulliamy: "Bridging the Gap, Part Two", *The Guardian*, 13 July 2008

9 Gideon Levy, *Haaretz*, 15 January 2009 (English edition)


10 Meir Wigoder: *A User's Guide to Photographing the Separation-Barrier-Wall* (エルサレムのVan Leer Instituteにおける講義) "Challenging Walls"

11 <http://www.goethe.de/ges/prj/mar/lae/enindex.htm>


12 このペーパーを発表した後、本報告書刊行の前に、ダニエル・バレンボエム氏と彼のオーケストラのラマラ訪問は、彼がガザに対するイスラエルの攻撃を支持しているという疑惑によってキャンセルされたことを付記しておかねばならない。



Fostering Peace through Cultural Initiatives: Perspectives from Japan & Germany



Organized by the Japan Foundation & the Goethe-Institut
Co-hosted by the Mainichi Newspapers
With cooperation of Aoyamagakuin University
Joint Research Institute for International
Peace and Culture



Preface

Japan Foundation's Initiative in Promoting "Culture and Peacebuilding"

In today's world, one cannot draw the conclusion that peace prevails if there is no war between countries. Various flashpoints of conflicts still below the threshold of erupting into war are submerged in relationships among individuals, races and regions.

Taking this into account, the Japan Foundation believes that culture, arts and youth exchange can play multifaceted roles in building peaceful international and regional relations. From this standpoint, we reviewed our various cultural exchange programs conducted for the past few years and published a booklet in March 2008 titled "The Roles of Cultural Initiatives in Peacebuilding" with a focus on projects that contributed to peace through cultural activities.

From fiscal 2008, we launched a series of international symposiums with the Goethe-Institut, a non-profit German cultural exchange organization, with the aim of developing future-oriented programs by sharing and discussing the idea of "Fostering Peace through Cultural Initiatives" and reviewing our past projects.

In December 2008, we invited two guests from the Goethe-Institut, Dr. Hans-Georg Knopp, Secretary General, and Dr. Christoph Bartmann, the head of Culture and Information Department at its main office in Munich, to a preparatory meeting in Tokyo where we held intensive discussions on our past undertakings. Based on the outcomes, the Japan Foundation and the Goethe-Institut hosted a joint international symposium titled "Fostering Peace through Cultural Initiatives - Perspectives from Japan and Germany" on May 14th-15th 2009 in Tokyo, which was co-hosted by the Mainichi Newspapers. This report summarizes presentations and materials of this two-day event - the experts' conference on the first day and the public symposium on the following day.

Dr. Knopp and Dr. Bartmann again kindly accepted our invitation to the symposium on both days, where their regional directors from conflict areas - Afghanistan and Lebanon - and artists involved in their cultural initiative programs also participated. From Japan, artists and eminent persons from various circles who played an active role in addressing issues of peace and conflicts attended. Participants from both sides held lively and informative discussions.

We deeply appreciate Dr. Akiko Fukushima, a senior fellow at the Japan Foundation, for her assistance in our research and coordination work to publish the aforementioned booklet. We also would like to thank the Aoyama Gakuin University Joint Research Institute for International Peace and Culture for helping us organize this event.

We thank all presenters, sponsors and participants for their support and hope this report becomes a guidebook for future projects.

The Japan Foundation
December 2009

Foreword to Publication

Fostering Peace through Cultural Initiative

The Goethe-Institut and the Japan Foundation have been closely connected for several years. As sister organizations, they play an important role in the external cultural policy of their countries, promoting international cultural dialogue and exchange. Both the Goethe-Institut and the Japan Foundation know that their policies and activities need to be understood and supported not only by politicians but also by a broader public in our home countries.

We therefore accepted with pleasure the invitation of the Japan Foundation to discuss with us in Tokyo a subject which has also an important place in the agenda of the Goethe-Institut: the role of culture in the maintenance of peace. “Fostering Peace through Cultural Initiative” was the title of the conference in May 2009, to which experts from both countries were invited: journalists, academic scholars, and practitioners in cultural exchange. The purpose of the conference was to learn about strategies and modes of operation which our countries employ to foster cultural dialogue in regions which are affected by crisis and conflict.

Examples came from Afghanistan, Palestine, Indonesia and other parts of the world, and they provided a large number of inspiring examples of how cultural initiatives during or after civil wars, natural catastrophes or in situations of crisis or conflict can play a useful role. The opportunities for culture are not unlimited where violence rules, but they certainly should not be underestimated. “Culture”, not just in the narrow sense which limits it to the arts, but also in a more general sense that includes for instance sports or popular arts and crafts, helps to overcome the traumatic consequences of conflict and to promote the idea of co-existence in peace and security.

Although the basic objectives seemed similar, differences in methods became visible. It seemed just about possible to identify something like a Japanese and a German style in the way that peace is fostered through cultural initiatives. The Japanese examples were more down-to-earth, they were based on traditional and popular cultural forms, they underlined the importance of social interaction, while the German examples were more orientated on contemporary art-forms and demonstrated an impetus to social change. So the conference also provided an invitation to learn from the style of the other partner. And that led to the question whether and when the Japan Foundation and the Goethe-Institut should put their skills together into the same basket and merge some of their activities in an area of crisis and conflict. The question found a positive answer, a new round of talks will follow and hopefully pave the way for common projects aimed to foster peace through cultural initiatives.

Hans-Georg Knopp
Secretary-General, The Goethe-Institut
December 2009

1. Relationship between Peace and Culture

Is it right to assume that cultural differences are the cause of conflicts? This is the first point to be addressed when discussing the relationship between peace and culture. Needless to say, there have been many societies in history peacefully coexisting with others despite ethnic or regional differences, and we should avoid attributing conflicts and frictions to differences in culture. Yet, we cannot deny that culture intensifies such confrontations when ethnic or cultural differences are combined with economic or political interests.

Therefore, we must consider how such situations can be prevented in order to define conditions for co-existence and co-prosperity. This problem of co-existence of different ethnic or social groups is important even at the local or national level, but it has a more difficult dimension in the international arena, because unlike the national level, the international society finds it much more difficult to foster a sense of global community and unity, compared to individual nations, ethnic groups or communities. Therefore, the role of intercultural exchanges needs to be emphasized particularly at the international level.

To this end, we must accept the premise that it is essential for all human beings to share a common ethos and sensibility, to be aware of the significance of mutual understanding and differences in sensibility, and to tolerate differences in the interests of building up a sense of global unity.

2. Conflict Prevention and Cultural Exchange

Given that cultural exchange is defined as activities that enhance mutual understanding and foster the appreciation of mutual identities, we can say that it is a process of assimilation, absorption and integration. At the same time, it functions as a process and medium for independence, resistance and isolation. Because of these contradictory aspects, we must find an answer to this question: under what conditions will cultural activities have a lasting impact? In terms of conflict prevention, mutual understanding – namely developing a sense of unity that can be shared by all human beings – will be of great significance. We might, for instance, study the example of a cultural activity that raises common awareness about the need to eliminate nuclear weapons – such as the famous antiwar tale “Barefoot Gen.” This tale captures the devastating effect of an atomic bomb and is played in Pakistan, which is in conflict with India over the possession of nuclear weapons, in the form of drama by Japanese learners of Urdu language.

3. Cultural Exchange for Prevention of Escalation of Conflicts

In regions suffering from long-lasting conflicts, cultural exchange helps prevent the conflicts from escalating further by allowing local people to redefine their own and their opponent’s cultural identities which have been distorted by warfare. Hatreds on both sides skew and

negatively exaggerate the identities of both parties, fueling the escalation of an existing conflict. Cultural exchange contributes to correcting such distortions. Here, we might think of the case of “peace kids soccer” program under which young boys from Israel and Palestine are invited to Hiroshima and play soccer together afterwards.

When a conflict is prolonged, local people become isolated from the outside world, and their true lives and images become obscure in the eyes of the outsiders. Conflict itself rather than their suffering is presented to the world. Thus, the conflict and violence serve as the only medium for connecting the area of conflicts with the rest of the world, and the peoples at the area and their everyday lives, mindsets and emotions are not communicated well. One of the objectives of cultural exchange is to protect such people against psychological and cultural isolation, that is, to provide links between these citizens in the area of conflict and outside societies. Inviting a Baghdad citizens’ drama group to Japan and have them present a play can be cited as an example of such efforts to bridge the people of Iraq with the Japanese citizens.

4. The Role of Cultural Exchange after the End of Conflict

(1) Mental Healing

When a military or political conflict is near its end, we need to consider how cultural exchange can help heal psychological wounds. Victims on both sides will remain severely distressed, but it must be especially traumatic to be separated from fellow members of the same village or group and forced to fight against them. To help such people heal their psychological damage, cultural exchange activities offering both parties an opportunity to bilaterally express their feelings will be of help in redefining their identities. A good example is a joint drama workshop held to bridge the gap between people who were on the government and rebel sides in Aceh, Indonesia, by offering an opportunity to converse with each other and to lessen the pain of those who had no choice but to battle against people sharing similar ethnic origins.

(2) Passing down the Memory of Conflicts and Anguish

Physical damage is easily discovered and drawn to everybody’s attention, but mental anguish does not surface unless those who suffer open up their hearts. In many cases, those suffering are reluctant to talk about their agony. Providing such people with an opportunity to express themselves and keeping a record of their psychological wounds will ease the process of reconciliation and future conflict. This can be done through cultural activities. For instance, in order to record and pass down from generation to generation the torment of Vietnamese victims of the Vietnam War, various opportunities can be created in the forms of literature, dramas, and international symposia.

(3) Restoring cultural and ethnic pride

Conflicts often destroy or distort self-identity and demolish cultural traditions in which ethnic identity is expressed. Hence, a post-conflict peacebuilding process should include activities

for restoring and reestablishing a symbol of ethnic cultural identity, whether it is tangible (for instance a historical monument) or intangible (for instance performing art.) Inviting an Afghan craftsman to Japan to restore ceramic art destroyed during the civil war is one example of such endeavors.

5. Problems to be Addressed when Engaging in Cultural Activities for Peacebuilding

When conducting cultural activities for peacebuilding, we face practical problems and difficulties. Such issues include how to grasp the needs and intentions of local people and how to prioritize projects. In case where there are many possible options, it is not easy to determine when, what or how to launch and carry out such activities, or to judge priority of possible endeavors.

To put it differently, getting the best out of these cultural exchanges means giving careful thought to our methods, approach and degree of involvement.

The second point is risk taking. Cultural activists may run the risk of being involved in conflict. We have to ask ourselves, therefore, who is going to be responsible for reducing such risk. What can be done to avoid risks? One approach is to invite the people from both sides of conflict areas to an outside world, have them take part in cultural workshops. In such a method, however, our support will be indirect. An alternative will be to create protected spaces which enable us to safely conduct cultural activities in conflict zones. Yet, numerous issues beyond our control will arise, including how and by whom such a space should be actually constructed. There may, however, be a possibility that areas where cultural activities take place come to be considered and serve as protected spaces, if managed with the full cooperation of the citizens of the area.

Third, we need to deal with political risk. Can cultural exchanges remain neutral without being biased towards either side? This is a constant political problem and one we must find ways to avoid. Furthermore, organizers of cultural exchanges in conflict regions, especially government-related organizations, must consider how they should avoid the risk of getting involved inadvertently in conflicts and ensure the safety of activists. Failing to take appropriate measures will likely set off political risks in the country of origin of those organizations.

Finally, there is an issue of evaluation. It is very difficult to assess the effectiveness of cultural exchange for peacebuilding, and that requires a long-term perspective. The higher the military or political risk, the more significant this issue becomes in relation to accountability.

Program

“Fostering Peace through Cultural Initiatives - Perspectives from Japan & Germany”

Organized by the Japan Foundation and the Goethe-Institut,

Co-hosted by the Mainichi Newspapers

With cooperation of Aoyamagakuin University Joint Research Institute for International Peace and Culture

1. Overview

In the twenty-first century, “peace” means more than “the absence of war.” Facing more diversified threats, the world has taken up an active stance to fight against poverty, to minimize disparity, and to foster minds that recognize people from different backgrounds as equal counterparts and that pursue peace with future-oriented perspectives.

The role of cultural initiatives that aim toward more peaceful international/inter-regional relations today is thus diversified and multi-tasked, covering a wide range of topics from confidence building before the actual conflict to recovering mutual trust in post-conflict areas. The project types also vary from collaborative art projects to youth exchange for peace-building.

By looking at several case presentations from artists who have gained rich experience working abroad in conflict ridden places and from receiving communities, this conference will discuss the role of cultural initiatives for fostering peace, the types of projects expected in order to gain most effective impact, and the difficulties for those institutions in conducting cultural initiatives.

2. Schedule

Thursday, May 14 th , 2009	9:30-17:00 Closed Workshop
	17:00-18:00 Reception
Friday, May 15 th , 2009	15:00-18:00 Public Symposium
	18:00-19:00 Reception
	19:30- Film Screening hosted by the Goethe - Institut

3. Venue

Thursday, May 14 th , 2009	JFIC SAKURA Hall, The Japan Foundation 4-4-1 Yotsuya, Shinjuku-ku, Tokyo 160-0004 JAPAN
Friday, May 15 th , 2009	Goethe-Institut Japan in Tokyo 7-5-56, Akasaka, Minato-ku, Tokyo 107-0052, JAPAN

4. Program

(1) DAY 1: Thursday, May 14th, 2009 One-day closed workshop

(Japanese-English simultaneous translation)

9:30-9:45 Opening Remarks

Amb. Kazuo Ogoura, The Japan Foundation

Dr. Hans-Georg Knopp, The Goethe-Institut

Amb. Hans-Joachim Daerr, German Embassy in Tokyo

9:45-13:00 Session 1: Case Presentations by Artists & Evaluations

Four case presentations will be made by artists who have worked with the Japan Foundation or the Goethe-Institut in the past few years. Evaluation comments by receiving communities or organizers of the projects will follow each case presentation. The aim of this session is to share an overview of actual projects conducted by the two organizations and to facilitate discussions around them.

Co-facilitators:

Dr. Christoph Bartmann, The Goethe-Institut (Case 2)

Dr. Uwe Schmelter, The Goethe-Institut Japan in Tokyo (Case 4)

Mr. Tsuyoshi Takahashi, The Japan Foundation (Case 1 & 3)

Presentations:

1. Japanese case:

Hiroko Inoue, Formative artist

“Inside-Out: Realities and Expressions found from Fieldworks around the World”

2. German case:

Helena Waldmann, Choreographer

“Burka Bondage”

Rita Sachse-Toussaint, Director of Goethe-Institut in Kabul

“Cultural Development in Afghanistan: International Documentary & Short Film Festival Kabul and National Theatre Festival”

3. Japanese case:

Yasuhiko Shirakata, Ceramic artist

“Meeting with Istalif and Our Future”

Yasunori Nagaoka, Ceramic artist

“Guiding Istalif from Traditional Wood-fired Kiln to Gas-fired Kiln”

4. German case:

Eberhard Junkersdorf, President of the German Film Board, Film Producer and Oscar

Awardee:

“The Global Film Cooperation as a Tool for Film-Project Cooperation between Germany, South- and North-Korea”

Uli Gaulke, Film director

“Comrades in Dream -The First Film Coproduction among Germany, South- and North-Korea, its Development and International Reception”

13:00-14:30 Lunch: Luncheon speeches

Mr. Ronald Grätz, Secretary General of the Institute for Foreign Relations (ifa) in Stuttgart

Mr. Kenjiro Monji, Director-General, Public Diplomacy Department, Ministry of Foreign Affairs, Japan

14:30-17:00 Session 2: Missions and Roles of Cultural Initiatives for Fostering Peace

Facilitator: Tsuyoshi Takahashi

Keynote Speeches

Amb. Kazuo Ogoura, The Japan Foundation

Dr. Hans-Georg Knopp, The Goethe-Institut

Panel Discussion

Panelists

Mr. Ronald Grätz, Secretary General of ifa (Institute for Foreign Relations, Stuttgart)

Prof. Kenichiro Hirano, Professor Emeritus at University of Tokyo

Dr. Hans-Georg Knopp, The Goethe-Institut

Megumi Nishikawa, The Mainichi Newspapers

Professor Kazuo Ogoura, The Japan Foundation

Prof. Yasushi Watanabe, Keio University

(2) DAY 2: Friday, May 15th, 2009 Public Symposium

(English-Japanese simultaneous translation)

15:00-15:45 Opening Session

Welcome remarks

Fumio Matsunaga, Ministry of Foreign Affairs

Dr. Uwe Schmelter, Goethe-Institut Japan in Tokyo

Keynote Speeches

Kazuo Ogoura, The Japan Foundation

Dr. Hans-Georg Knopp, The Goethe-Institut

15:45-16:45 Session 1: Presentation by artists and receiving communities

Moderator: Dr. Uwe Schmelter

Hiroko Inoue, Formative artist

“Inside-Out: Realities and Expressions found from Fieldworks around the World”

Fareed C. Majari, Director of Goethe-Institut in Beirut

“When Everything Else Fails - The Role of the Arts in Conflict Resolutions”-Cultural Cooperation between Palestine, Israel and Lebanon

Yasuhiko Shirakata, Ceramic artist

“Meeting with Istalif and Our Future”

Yasunori Nagaoka, Ceramic artist

“Guiding Istalif from Traditional Wood-fired Kiln to Gas-fired Kiln”

16:45-18:00 Session 2: Panel Discussion

Moderator: Megumi Nishikawa, The Mainichi Newspapers

[Panelists]

Prof. Kenichiro Hirano, Professor Emeritus of University of Tokyo

Dr. Hans-Georg Knopp, Secretary General The Goethe-Institut

Fareed C. Majari, Director of Goethe-Institut in Beirut

Amb. Kazuo Ogoura, President, The Japan Foundation

Helena Waldmann, Choreographer

Prof. Yasushi Watanabe, Professor of Keio University

18:00 Closure

18:00-19:00 Reception

19:30 Film Screening hosted by the Goethe-Institut

“Comrades in Dream” by Uli Gaulke and documentary film “My Kabul” from Afghanistan in the Goethe-Institut Hall

MORNING SESSION

Inside-Out: Realities and Expressions found from Fieldworks around the World

Hiroko Inoue

Since 1992, I have been active in producing and presenting works of contemporary art. In 1998, I received a special award in sculpture in the Osaka Triennale, and with assistance from the Goethe-Institut went to Germany in 1999 to produce and present my works. Currently, I continue to work as an artist, dividing my time between Japan and Germany.

In 1995, a huge earthquake shook Hyogo prefecture, in the center of mainland Japan. This was the Kobe Earthquake that instantly took the precious lives of about 5,000 people, and I saw its devastating consequences. I saw the deep emotional scars left unhealed and the isolation of people dying alone in temporary housing, and took an interest in the social systems governing the aftermath of the earthquake. I have since worked on projects touching on these social issues, using motifs such as inside and outside views in mental hospitals and juvenile reformatories, German concentration camps, and children I met in various countries around the world.

Though I have never set foot in actual war zones, I have been to remote regions in Asia, Europe, North America, and Arab nations. Though the world is supposedly becoming more globalized, there are no differences in the social issues that arise in every part of the globe, be it in modern cities or the remotest of regions. In the following, I would like to tell you the details of my stays abroad, my feelings as an artist, and how my experiences came to fruition as works of art.



1992 First one-man exhibition, started out as a textile artist at the time.

1995 The Kobe Earthquake

Though the city was reconstructed, the shock of the incident traumatized many people, and its effects were particularly damaging to children. This realization made me turn to taking photographs from both inside and outside the windows of mental hospitals. For the 13 past years, I have been producing works using the windows of isolated facilities in various parts of the globe as motifs. By portraying the gaps in people's views when looking outside from the inside of a window as opposed to looking inside from the outside, I want to question what position the viewer takes in terms of the boundary created by this single window, and how we can connect with others.

1997 Art Forum Yanaka / Exhibition in Tokyo

Works using windows in mental hospitals (Light box)



1999 One-man exhibition in Düsseldorf, Germany
Works on windows of mental hospitals (Light Box)
→ Print photographs on fabric, which are then placed on canvasses and incorporated into the light boxes.

Since 1999 I have owned a studio in Germany, and I also started visiting former sites of concentration camps the same year. This is a view from a window found in the Czech Republic concentration camp in Theresienstadt. It was a hot summer day when I pointed my camera at this particular window, with a vast blue sky stretching beyond the window frame. The people who had once lived here were never able to leave. I felt that countless people had once stood at the place where I was standing, and that they were connected to the person I am now. The terrible reality did not only belong to the past, it continues to be an issue now.

2000 Hyogo Prefectural Museum of Art <Memories of Souls> A Memorial for the people who died in isolation



As of July 25th, 1998, there have been 220 deaths in isolation of people who may have had jobs, families, and homes had the earthquake not stripped them of everything. I produced this work because I wanted to say to those who became addicted to alcohol, lost all contact with the outside world, and ended up dying alone, that they will never be forgotten.

2002 I took a plane to Nome, Alaska, a city facing the Bering Sea that is two and a half hours northwest of Anchorage, USA to visit the Inuits. The time was late summer, and the winds blew all day. In this vast land, harsh climate, and with little work available, the young escape to alcohol in desperation. During my one-month stay, there were two murders among drunken young people.

The most frequent crime in this remote city was domestic violence, and I was shocked to learn how the socially vulnerable people, including children, were being sacrificed. All the issues faced by modern society today were being imposed on the children, the elderly, and other socially disadvantaged people. The situation is the same for Japan, where many young people are isolating themselves from society or struggling with depression. It was during my stay here that I thought for the first time that I would like to use children as motifs for my work. By portraying a child with his eyes closed, I am asking the viewer: what do we as a human race want? Where do we want to go? And what are you going to do in this chaotic situation?

- 2003 Goethe-Institut Tokyo / Tokyo <WHAT WILT THOU-MEDITATION>
- 2003 Chukyo University C Square / Nagoya <WHAT WILT THOU-MEDITATION>
- 2003 Kunstmuseum Alten Post, Mülheim an der Ruhr <WHAT WILT THOU-MEDITATION>
- 2003 Mseum Kunst Palast / Düsseldorf, Germany <WHAT WILT THOU - MEDITATION>

2003 I stayed for one month in Yemen, located at the southwestern tip of the Arabian Peninsula

In Yemen, civil war waged between the northern and southern parts of the country over a decade ago, and people were still overshadowed by this war at the time of my visit. I stayed in a city called Ma'rib, roughly 300km southeast of the capital, Sana'a, where conflicts among tribes remain to this day. Trading once flourished here during the era of the Queen of Sheba, with huge temples, vast green fields, and flowing rivers, but has now turned entirely into desert. The devastating scene with the remains of temples and cemeteries in ruins, scattered with bones and trash, made me fear that this scene may overlap with the future of Tokyo.

2005 I stayed for one year in Austria as Special Advisor for Cultural Exchange for the Agency for Cultural Affairs, Japan. During this time, I held an exhibition at the Jugendstiltheater in the Otto Wagner Spital, which is located in the suburbs of Vienna. This hospital is where approximately 470 Austrian or Roma children with physical disabilities fell victim to human experimentation during the World War II. I attempted to juxtapose the present with the past in this place by placing portrait photographs of 18 Austrian and Japanese high school students with their eyes closed in a circle with a diameter of 7 meters. I also presented a light box on the floor, made from color photographs of various windows in this old mental hospital, which dates back to 1902. <Where are you going from here?>



2007 I was invited to stay for one month at Clemson University in South Carolina, USA, for a project to create sculptures using organic materials within campus with students of sculpture and spatial design. The site of the university had formerly been used as a plantation farm, close to Charleston Bay, where black people arrived after being shipped from Africa. After thoroughly researching the area's history with students and holding numerous meetings, it was decided that a place for <meditation> would be created, where various ethnic groups can come together. About 1,000 wild bamboo stems growing on campus were cut down, and a sculpture roughly 17 meters in length was completed. It is located in a quiet area where you can observe the shadows of the bamboo parts moving in synch with the rising and setting of the sun.

2009 I stayed in Montana, USA, from beginning to end of April: more specifically, in a

town called Libby, located in northwest Montana. The entire population of the town suffered from asbestos pollution; about 300 of its residents had died from cancer, and roughly 1,000 still suffer from this disease. Since the soil is polluted, locals cannot grow plants and children cannot swim in the nearby rivers.



I was able to see the current reality faced by the earth by staying in various remote regions, as well as overall social structures and issues and the lives of people. I believe that what is happening now in remote regions is also happening in other parts of the globe. On the other hand, in Japan, where it is difficult to feel the joy of life and which is in a time of instability and uncertainty about the future, many are fighting against despair and futility. This, I think, is also a form of conflict.

I believe that art has the power to express dreams and despairs, extract the reality of the world, and convey messages. My aim is to create art that looks into how people commit to memory the chaotic modern society today, how they overcome these times, and what they are trying to pass on to future generations.

I hope that my works will serve to trigger in viewers the question of why <we are here now.>”

Cultural Development in Afghanistan: International Documentary & Short Film Festival Kabul and National Theatre Festival

Rita Sachse-Toussaint

President Ogoura,
Excellencies,
Secretary General Mr. Knopp,
Ladies and Gentlemen,

I presume that most of you have never been to Afghanistan before and might not have the opportunity to do so in the future.

So, I would like to show you some pictures of Afghanistan, mainly from Kabul. There will be no comment on the pictures.

After that I will present two examples of cultural development that aim towards the rebuilding of a civil society.

(Pictures)

Following these impressions from Afghanistan let us first examine the framework conditions underlying our cultural work in Afghanistan. Next we shall examine cultural activities of the Goethe Institute in Kabul. Then I will point out the tasks ahead for Afghanistan and the supporting countries to enable the country to master the immense challenges. Finally we focus on the development of the international film festival and the national theatre festival.

Let us start with the framework conditions:

- Afghanistan has a high potential of young interested and motivated people. The Goethe -Institut Kabul supports young artists, university teachers, school teachers and students.
- We find more participation and interest in social issues such as the Sharia law and more individual initiatives like the establishment of a company or a small shop.
- You all know the disastrous economic situation in Afghanistan, characterized by unemployment that leads to corruption and a severe increase of criminality.
- Public order is still not established.
- As to the security situation, I already mentioned the increase of criminality. In addition, politically motivated crime has risen. As a consequence the reaction of Afghan police and international military has become unpredictable.
- The elite have left the country.
- Society faces a conflict between tradition and modernity and a strict hierarchic social structure.
- Most women have either no access or restricted access to public life.

· After all, the political situation is not stable.

In 2003, the Goethe-Institut Kabul celebrated its reopening. Since then we have had to face these conditions.

In the first year we identified the areas for our cultural initiatives as film, theatre, photography and literature. We provided technical support to the Faculty of Fine Arts at University Kabul, to the National Theatre and to other partners. Furthermore, we organized workshops for artists and students at the Faculty of Fine Arts.

It is important to take into account the individual situation of an artist and to pay appropriate attention to him or her so that we are able to support the artist according to his or her needs, e.g. an actress who has been threatened with murder for being an actress.

Our cultural activities such as the film festival provide the artists with a national and international platform for exchange.

We still are in the process of developing a festival structure. The focus in our projects is on quality management and sustainability.

It would be too early to transfer some of our programs to Afghan ownership, e.g. the film festival. This transfer depends on a sufficient qualification of artists and cultural managers. Once this step completed the Goethe Institute in Kabul will reorient its cultural work.

Our activities contribute to rebuilding the cultural area, an area as important for Afghan society as every other social area. In other words, hospitals, schools, road construction, employment and so forth are not more important than the rebuilding of the cultural field.

Only then Afghanistan will be capable to face its challenges

- redefinition of society
- definition of values
- national identity
- building up a stable civil society

Let us focus now on two of our activities, the International Documentary and Short Film Festival and the National Theatre Festival.

We decided to promote the development of short and documentary films for two reasons.

1. this media is appropriate to reflect history as well as the actual situation,
2. documentary films can be realized with relatively modest means.

Our aims are to offer filmmakers a platform for national and international exchange, to

provide them access to international festivals, to increase step-by-step the quality of film productions, and to establish a festival structure.

In 2006, there were three participating countries: Afghanistan, Germany, and France. The Goethe-Institut and the French Cultural Centre were supporters and the main organizers. Our cooperating partners were ARTE, Afghan Film, and the Ministry of Information and Culture. We began to establish public relations. We had to set up an organisation structure and to define the regulations and criteria for participation and selection.

The Goethe-Institut organized workshops during the festival with experts from abroad. Sustainability is one of the most important criteria for our activities. Therefore we organize additional workshops for young filmmakers throughout the year, in particular workshops with our French partners and Atelier Varan in Paris. The recent production “Children of Kabul” had been admitted to this years film festival in Cannes.

In 2009 there are three supporters – the Goethe-Institut, the French Cultural Centre, and the British Council – and nine participating countries. The quality of Afghan film productions is increasing from year to year. Also, the organisational structure has improved.

Does the film festival in Kabul need a red carpet? - Yes, it does and there should be no doubt. We are more active in sponsoring, and we obtained more transparency for criteria and regulations. Accordingly, the festival has become more professional.

The development of the national theatre festival with theatre groups from the provinces is similar to that of the film festival. Let me point out only a few additional aspects:

- It offers actors and directors a national platform, the only opportunity for exchange,
- The quality of productions increases through intercultural exchange, e.g. in 2007 the Goethe Institute invited Helena Waldmann for a guest performance,
- In 2009 we offer four workshops in Kabul and three in the provinces before the festival,
- We also support guest programs in Germany for directors and actors, e.g. in 2009 a puppet theatre player had the opportunity to attend a workshop at the Ernst Busch Drama School in Berlin. In September 2009 he is invited to study for a year in Berlin.

As a result of these initiatives five young puppet theatre players established Afghanistan’s first puppet theatre ensemble, *Parwaz*.


I could not find a better example to demonstrate the importance of cultural initiatives to provide a perspective to young talented people and to encourage them to contribute to the rebuilding of their society.

Thank you for your attention.

 GOETHE-INSTITUT

GOETHE-INSTITUT
Kabul
Examples of Cultural Development:
Documentary & Short Film Festival Kabul /
National Theatre Festival
 Fostering Peace through Cultural Initiatives
 Tokyo, May 14-15, 2009
 Rita Sachse-Toussaint

1-1

 GOETHE-INSTITUT

Focus

Framework conditions

Cultural activities of GI Kabul


Tasks for AFG and supporting countries

Challenges for AFG

Examples of cultural development: filmfestival,
 theatre festival

2

1-2

 GOETHE-INSTITUT


Framework conditions

- high potential of young people: interested, motivated
- more participation in social processes, individual initiative
- disastrous economic situation – unemployment
 - corruption, criminality
- insufficient public order
- absence of sense of right and wrong
- security situation – politically motivated attacks
 - unpredictability of Afghan police + international military
- no access to education for parts of population
- insufficient educational situation
- elite in foreign countries
- conflict between tradition and modernity
- hierarchic social structure
- restricted access for women to public life
- unstable political situation

Cultural development in AFG

3

1-3


 GOETHE-INSTITUT

Cultural activities of GI Kabul since 2003

- evaluation of the situation + identification of areas for cultural initiatives (film / theatre / photography/ literature)
- technical support + reconstruction / production means
- qualification of artists
- appreciation / attention for artists + support for their activities
- platform of exchange for artists (e.g. festivals)
- intercultural exchange (e.g. festivals, workshops, experts)
- development of festival structure (cultural management)
- quality management
- sustainability
- autonomy
- Afghan ownership
- new steps

4

1-4

 GOETHE-INSTITUT


Tasks for AFG and supporting countries

Necessity of building up all social areas

policy - economy - culture - social policy - environment

5

1-5

 GOETHE-INSTITUT

Challenges for AFG

- definition of society
- definition of values
- national identity
- building up a civil society
- stability

Teil der Präsentation (angepasst über Anwerbskopf- und Fußzeilen)

6

1-6


 GOETHE-INSTITUT

Examples of Cultural Development
International Documentary Filmfestival

- Why short & documentary film?
- targets: establish a festival structure / platform for exchange / access to international festivals / quality of productions
- festival structure 2006
 - participating countries: AFG/ GER / F
 - 2 supporters: GI, French Cultural Center
 - cooperation with partners: Ministry of Culture, Afghan Film, ARTE
 - public relations
 - organisation structure: organ. committee/selection committee/jury
 - definition of rules (Call for Entry, selection criteria, criteria for jury)
 - workshops during the festival (ARTE, experts from abroad)
 - guest programs for Afghan filmmakers during the year
 - workshops in cooperation with Ateliers Varan Paris

7

1-7

 GOETHE-INSTITUT

2009

- 3 supporters: GI, CCF, British Council
- 10 participating countries
- increased quality of productions
- improved organisation structure:
 - festival director
 - event manager
 - improved public relations
 - sponsoring
 - more transparency for rules/criteria
 - more professionalism

8

1-8

DREIHE-INSTITUT

**National Theatre Festival
theatre groups from Kabul and provinces**

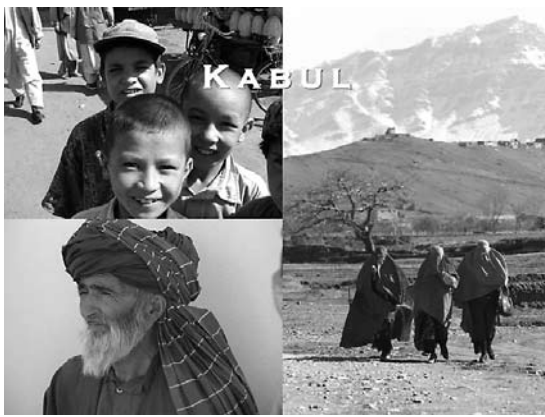
Additional aspects:

- national platform
- increase of quality of productions:
 - intercultural exchange (guest performance H. Waldmann 2006)
 - workshops during the festival (e.g. Helena Waldmann)
 - workshops between festivals (Fac of Fine Arts)
 - workshops in provinces (2009)
- guest programs in Germany for actors, directors
 - (e.g. puppet theatre actor at Ernst-Busch-drama school Berlin, foundation of Puppet Theatre Group „Parwaz“ in 2009)

1-9



2-1



2-2



2-3



2-4



2-5



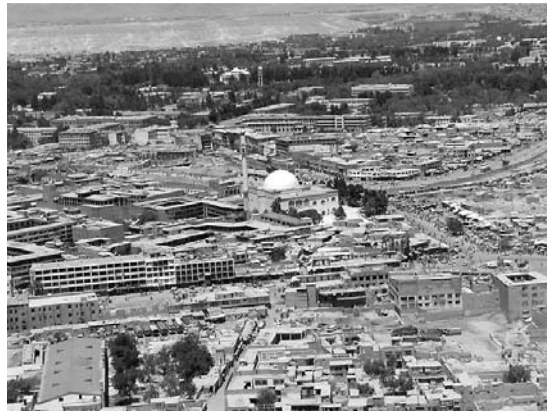
2-6



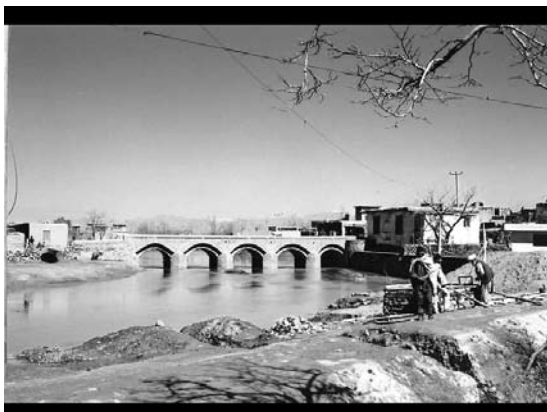
2-7



2-8



2-9



2-10



2-11



2-12



2-13



2-14



2-15



2-16



2-17



2-18



2-19



2-20



2-21



2-22



2-23



2-24



2-25



2-26



2-27



2-28



2-29



2-30

Burka Bondage

Helena Waldmann

Ladies and Gentleman,

First I would like to thank the Japan Foundation and the Goethe-Institut for this kind invitation and for the interest in my theater work. Since 1990, after finishing my theater studies at university and working with famous authors like Heiner Müller and directors like George Tabori, I was inspired to question the matter of “reality” on an already “real” stage. Today, working as a freelance theater director and choreographer, I have been living in Berlin since 2000 but most of the time I am directing in an international context:



✎ such as in Salvador de Bahia/Brazil were I produced a piece called “Headhunters”, which won the UNESCO prize;

with the Dramatic Art Center in Tehran/Iran were I produced a piece called “Letters from Tentland”; ✎



✎ and, in 2005, with Mr. Majari, who is among us today, who ran the Goethe- Institut in Palestine at the time.



We worked with a dance company based in Ramallah and a theater company based in Gaza creating a dance movie called “Emotional Rescue”. The subject of all these theater works, which were enormously supported by the Goethe-Institut, stuck closely to the realities of the people we met. Although, it was never my intention to question all these big words like the suppression of human rights, or the oppression of women.

It always became a REALITY on stage. My concerns were not really into those political debates, who are gaining for lobbies or trying to evaluate arguments, which are, at least, obvious: You shall not kill. You shall not oppress.

All that stuff is happening - and I am not a lawyer, but a director. As a director, I like to ask, how all circumstances of REALITY are to be represented on a stage, which is a REALITY in itself.

First of all, European concerns are: I am exotic, since I am interested in people, who are living not only, in Berlin, but also in Tokyo, Kabul, Tehran, Ramallah, Salvador de Bahia. For Europeans: it's “elsewhere”. For me: it's reality. The story I would like to tell you today is perhaps much more common for you than for European people. It's a story I found in

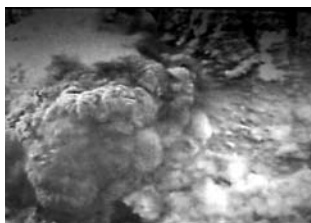
two countries, which cannot be more different. Japan and Afghanistan.

In Afghanistan in 2001 the nearly 2000 years-old Buddhas of Bamiyan were destroyed by the Taliban. 🖱



🖱 These Buddhas were, at 55 and 38 meters, the tallest standing Buddha statues in the world. In the Ancient World the region of the Buddhas, called Gandhara, located on the Silk Road, used to be a melting pot of cultures, connecting Asia and Europe, East and

West. This historical landscape in today's Afghanistan gave rise to a very remarkable mix of cultures. The history of the exceptional adventure of this mix is a story of liberation,



adaptation, transformation and change. The burst of the Buddhas was the beginning of an almost global war against the Taliban, who were actually, only finishing a process which had started with the beginning of the Muslim control over that region and had lasted for more than 400 years.

Already by the sixteenth century the Buddha's faces and hands were destroyed; 🖱



🖱 300 years ago the Buddhas lost their feet and any signs of sexual organs.

From the point of view of the Taliban, namely Omar Mullah, who destroyed the Buddhas within three days using several tons of dynamite, he achieved what his ancestors had tried over generations: the destruction of the Buddhas of Bamiyan. 🖱



Fanatic Afghans tried to eliminate a sign of history, they considered it was not their history. The world was stunned, shocked and even amazed, when these Buddhas were destroyed. Amazed, since the video artist, Acci Baba from Japan told me a German research team found a very old scroll in the remains of the Buddhas indicating the words: "Nothing is eternal". "Nothing is eternal" tells us those generations building the Buddhas in the caves were pretty much aware of the finite nature of their doing. It doesn't mean they believed in

an end of their religion, but in an end to the material equivalent of all their physical efforts. They believed, their hard labor would be in vain one day. The day has been marked through three tons of dynamite and in consequence, through thousands of victims, especially from Afghanistan. The finite nature of the physical efforts - nothing better could express the work of dancers, nothing better could express the work of soldiers alike. The finite nature of the nature of dance - means a belief in movement, which is finite from its first step on. Nothing is eternal.



✍️ My first touchdown in Kabul, was during the 4th National Theatre Festival in summer 2007.

In only four years, the Taliban had lost ground and power. I was invited to the festival with the follow-up



production of “Letters from Tentland.” ✍️



“Letters from Tentland” was a grand collaboration between the Goethe Institute Munich and the Dramatic Art Center in Tehran/Iran. Back in 2004, I was invited to give a workshop in Tehran with Iranian actresses only, in order to create a piece of dancing tents, a so called 'dance under cover'. ✍️

“Letters from Tentland” became a strong and international touring dance production from a country, Iran, where dance is forbidden and censorship is most common. “Letters from Tentland” was a piece, which offered famous actresses from Iran to talk and dance hidden behind tents.



The word for tent also symbolizes the “Tschador”, the Persian veil.

A year later, when the piece became recognised as too critical against the Iranian state, and had been



forbidden, I called in some Iranian actresses, who are living in exile, to continue the touring. We called their answer, to the forbidden forerunner: “Return to sender” ✍️

Women in exile answered in their own “Letters” to the Iranian actresses who were no longer allowed to act in the piece and who were strongly warned to stop any further contact with me.

I tell you these past activities, because they triggered off the invitation to Kabul to show “Return to sender” to an Afghan audience. Here again, with the support of the Goethe Institut in Kabul, 🖱

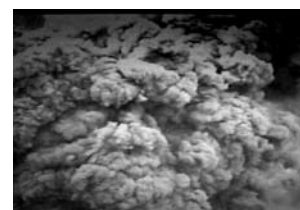


🖱 a workshop showed how touched the Afghans were, and how eager to talk freely about their situation on the most effective platform of free speech, which is, to Afghan people, the stage. These mere facts made me curious to learn more about Afghanistan. I returned to Kabul to work with young actresses, who taught me, they would consider themselves “The Generation Rain” What does it mean? “Generation Rain” It is a generation stuck in the mud of a history, very much tight to fundamentalism, although the Taliban are not ruling at the moment.



It is an Islamic country and freedom inside the boundaries of this religion can be seen alike the crucial definitions by the Taliban, but also alike the more liberal definitions in Pakistan. Which is, by irony, a hide-away for most of the Taliban. The “Generation Rain”, in one word, has -therefore - lost orientation. In the same year, in 2008, I was invited by the Association of Japanese Theatre Directors and the Goethe-Institut, to present workshops and symposia in Osaka and Tokyo, where I was able to meet some of the great masters of contemporary criticism in Japan, amongst them Mr. Hiroshi Tsutsumi. Here I heard for the first time the word “Generation Lost” describing young Japanese Artists who do not consider to have a future, but to express - maybe a coincidence - the behavior of a generation after the destruction of the Buddhas of Bamiyan. Maybe it is only a coincidence, but suddenly I felt a neighboring sharing of experiences between the “Generation Rain” in Afghanistan and the “Generation Lost” in Japan.

Both desperate, both eagerly looking for another future, both resistant to their findings in the present, both looking for something, you may call a: RESET BUTTON.



You may judge, if I am wrong or not, but the longer the discussion became between my Japanese friends Yui Kawaguchi and Acci Baba, and the longer I discussed with Afghan women, able to use the internet as a communication tool, I suggested, that

both sides, Japanese and Afghans, may chat on the internet without any visibility to censors, commentators or critics to see, how many differences and similarities they share. A starting point for the talks was the blowing up, that is to say, the vanishing of the Buddhas of Bamiyan.





To both sides, Japanese and Afghans, the empty niches, which were left after the blasting, looked like frames of something which is not allowed to exist. Both asked: Do we have to blast the frame or to blast what's inside the frame? Both sides saw themselves mirrored in the forced invisibility, in the vanishing of their body. Both sides saw themselves in the whirling dust. Both talked about an immense pressure in their society, which they can not withstand. Both talked about the boundaries to tradition, moral codes and senses of honor. Both sides talked about the blasting of themselves. Both sides talked about a huge longing for free Heaven. And, furthermore, both shared a legend of a bird, which seems to have a common heritage. In Afghanistan, the bird of REBIRTH and RESET is called Simurgh, in Japan it's called Hou-hu.

More was offered in the role of freedom. Related by Japanese dancers who thought of Shibari in comparison to the Afghan_ladies'_quest 📖

for the role of the Burka, which became the title for the upcoming German-Afghan-Japanese collaboration, called: "BurkaBondage"



which will be premiered in Berlin, in October 2009. To end my speech here, I personally think, the most fruitful and most supportive role of all the cultural organizations, I could work with so far, also including the Dramatic Art Centre in Tehran, has always been the confidence in the experimental confrontation between two cultures, who hardly do know anything from each other.



📖 Afghans have hardly any idea about Japan, and neither do Japanese people about Afghanistan, 📖

not to mention Germans, who gain hardly any knowledge from Afghanistan other than some military aspects of the role of German troops in Kundus, in the North of Afghanistan. The most prominent role, I experienced from cultural organizations, is to undermine cultural prejudices



as they are produced by the media and being never shy to strengthen the role of young artists, who actually do not represent the national ideas of the "big arts". But we should listen carefully to the echos from a generation, which is considered to be contemporary and our future. On the poster is written: Your way is eternal. Hey, it's a scream at the top of the future's voice. (Dein Weg ist ewig. Hey, das ist ein grosser Schrei aus dem Hals der Geschichte.)

I hope, my contribution can be fruitful to our forthcoming discussion.

Thank you for listening to me.



Meeting with Istalif and Our Future

Yasuhiko Shirakata

Thank you for including Istalif pottery in today's program. And thank you for giving me, a mere potter of Tobe ware, the opportunity to participate in this Japan Foundation project and experience Istalif pottery. But perhaps Istalif pottery was luckier than I am. Now allow me to tell you a little about this craft.

Despite a history of 300 years, the craft has had little interaction with the outside world. A 90-year-old elder of the village, Noor Ahmad s/o Abdul Samad (Photo 1), welcomed me, saying that I was the first potter to visit them since a French ceramic artist came more than 40 years ago. This was how my experience with Istalif pottery began.

The village where the kilns are located is spread over the steep side of a mountain. Few roads allow cars to enter and the lack of infrastructure seemed to weigh on people's daily lives.

(Photo 2) This is a photo taken in 2003 of Ando-san and the main street where the bazaar is held. In a 2006 photo (Photo 3) provided by the Japanese embassy in Afghanistan, I was surprised to see telegraph poles. Although the people now have access to electricity, its supply reportedly often stops. Life in Afghanistan is still harsh but it is important that the Japan Foundation is supporting Istalif pottery just when life there is about to change significantly.

Now I will move on to the production process of low-fired Istalif pottery.

This is a site where clay is dug and sieved (Photo 4) located about 1 km from the village. The clay is put in bags and carried to the village. The task is reportedly exhausting, so I suggested they adopt a division of labor since pottery may not suit everyone born in Istalif. I heard that they are following my advice now.

Since the wedging of the clay involves stamping it with their feet and turning it once in a while with a spade, people complained that their heels split and bleed causing severe pain. Last December I sent pairs of "tabi" socks we use for rice planting in Japan. The villagers were very happy and I feel like sending many more of those socks to them.

This is a potter's kick-wheel (Photo 5). This is Noor Ahmad s/o Abdul Samad (Photo 6). They are skilled in the potter's wheel and when I told them about the "tombo", a tool we often use in Japan to measure the opening and depth of a piece of ceramic at the same time, they surprised me by saying that they don't need such a tool because they use their hands to measure.

Since this kick wheel is an important traditional technique of Istalif, I strongly recommended that they keep it and do not install electric wheels.

It is not easy to prepare the glaze. Although they buy the ingredients at a specialized store in Kabul, the procedures that follow require hard work as they have to break the stone up by hand using millstones and holes made in the stones. This procedure needs to be mechanized quickly. Another problem is the lead that comes from burnt glaze. Regulations against lead are tightening globally and it might become harder to sell Istalif pottery as tableware. Although the glaze is a big problem, we are unable to help them in this respect at the moment.

The kiln is wood-fired and angular on the outside and round inside (Photo 7). The ceramics are stacked in the kiln (Photos 8 and 9). Since this is a really efficient way of stacking, I told them to keep the method even if they switch to gas-fired kilns.

These are tripod stilts that are essential when stacking the ceramics inside the kiln. Since about 1,000 pieces of ceramics go into a kiln at the same time, the same number of these tools is needed. The tips of the legs break easily and the stilts are hard to make. It also leaves marks on each piece. Since this mark is like a trademark of Istalif pottery, it should remain on the pieces.

Yet improvements must be made. When potters from Istalif trained in Japan in 2005, I asked them to take home 1,700 porcelain-clay “tochi” boards to place on the three legs of the stilts. The boards can be used repeatedly and they make the marks smaller. Although it is a small tool, I think its introduction was an epoch-making event during the 300 year-history of Istalif pottery. But 1,000 or 2,000 are simply not enough. I want to send them 100 kg of clay from Tobe.

Istalif has a facility that is like a vocational training center for women (Photo 10). The British have installed a small gas-fired kiln there and they would be able to make “tochi” boards if only they had the clay. But is not possible just yet.

Afghanistan is a large nation and there may be clay more resistant to heat somewhere. Unfortunately, it is not possible to look for it now.

Here (Photo 11) Mr. Mohammad Farouq Asefi is firing the ceramics in the kiln. He watches the color of the fire from a small hole above the entrance of the kiln and decides when to extinguish the fire based on experience and hunch. Although the results are somewhat uneven, he is proud to be able to see the colors of the flame.

It seems that the soaring price of firewood is making the firing of the ceramics difficult. Istalif ware is soft ceramic that is fired at about 900 degrees Celsius. Its fire-resistant temperature is about 1,100 degrees Celsius so that when they are fired at more than 1,250 degrees Celsius like the Tobe ware, they melt and lose form. But if they are fired at 1,100 degrees Celsius, the problem of the harmful effects of lead will be solved and they will increase in strength.

Therefore, the villagers strongly wish to install gas-fired kilns. Unfortunately, they probably have to wait a while for this to happen.

Making ceramics is difficult in many aspects but selling them is even harder. Yet Istalif has a strong advantage in terms of name recognition and long-established sales channels. The potters also have a flair for business. It made us laugh when we found out that a bowl, which we bought at the village for two dollars, was being sold for 75 cents in Kabul.

In 2005, 13 potters from Istalif received training in Japan. Hopefully it was a valuable experience for them. Since I have a list of episodes but cannot introduce them today, please look at a report by Mohammad Farouq Asefi.

Also please take a look at the materials distributed for the training offered to Abdul Mtin s/o Abdul Salam and Noor Ahmad s/o Abdul Samad who were able to visit Japan again in December 2008.

In Istalif, there is a custom of making small hand-formed ware. I wanted to show them how to make larger pieces so they can create new specialties such as sculptures and ornaments based on their own aesthetics. So with the cooperation of the Shigaraki Ceramic Cultural Park, the two trainees experienced the joy of making large pieces (Photo 12, 13). They were also able to make plaster casts that are useful when making the same pieces. I hope their experience will slowly take root in Istalif.

Making ceramic is a job that makes sense when pursued for a lifetime. Please give them time. I think their future is bright. I would like to finish my speech by wishing that peace will prevail in Afghanistan soon. Thank you.

-イスタリフ焼との出会いと今後-

白瀧八洲彦

国際会議「平和のための文化イニシアティブの役割
～日独からの提言～」

“Meeting with Istalif and Our Future”

Yasuhiko Shirakata

Presentation at “Fostering Peace through Cultural Initiatives
-Perspectives from Japan & Germany-”
May 14 & 15, 2009



photo 1



photo 2



2006年 イスタリフのパザール
(陶器屋が約30軒、軒を連ねる。)

photo 3



photo 4



photo 5



photo 6



photo 7



photo 8



photo 9



photo 10

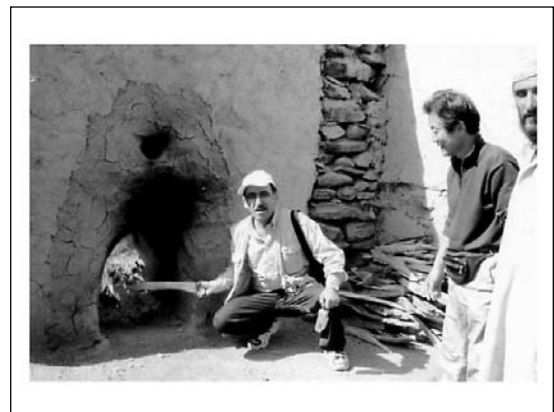


photo 11



photo 12



photo 13

Guiding Istalif from Traditional Wood-fired Kiln to Gas-fired Kiln

Yasunori Nagaoka

My name is Yasunori Nagaoka and I make ceramics in Gifu Prefecture in central Japan. I have heard that after they returned home from their first training in Japan the craftsmen of Istalif in Afghanistan began producing a gas kiln experimentally. Until then, they had used traditional wood-fired kilns, which are not environment-friendly since they require a large quantity of wood. Although the gas-fired kiln is commonly used in Japan, it is more complicated than it looks. Therefore, I feared the villagers would have a hard time producing it experimentally. For this reason, I asked the Japan Foundation to organize a training program to help them. Last December, the plan became a reality and two young craftsmen arrived in Japan and began training at my workshop. Although it was early winter and cold, they completed a gas kiln under the guidance of a professional kiln builder and through the help of an interpreter. They asked questions and made sketches. The two craftsmen said they wanted to build a communal kiln when they returned to Istalif. Since Istalif ware will be fired at a higher temperature than before when they were fired in wood-fired kilns, the craftsmen will face the same problems as their counterparts in Japan, such as how to improve the clay and glaze to withstand higher temperatures, and maintain the gas-fired kiln. Therefore I think advice from experts in kiln building, clays and glazing will be important.



Receiving Gift



Practicing



Training in Shigaraki

German Film Cooperation Crossing Borders in Korea

Eberhard Junkersdorf

First of all I would like to apologize that I was unable to come personally to today's conference due to a health problem which is not severe, but strong enough to make my trip to Tokyo impossible. I am very grateful to the Goethe-Institut Japan in Tokyo and the Japan Foundation for having invited me.

Peace in my understanding is not the result of governmental command or victory of a mighty person or country against a weaker one. Peace very rarely has a final target line or a reliable final result. Peace is always an ongoing process and the result of many single decisions. Every situation requires the proper decision so as not to interrupt the peace-making process.

It is of course culture that can and has to play an important role in a peace-fostering process. This applies for Europe as well, where in nearly all countries the fundamental base of a modern constitutional state is implemented and accepted. As a mediator for German culture, Goethe-Instituts worldwide are playing an important part in the peace-fostering process. This role is especially valid for regions and countries where a normal process of enhancing dialogue and mutual understanding has yet to be developed.

In the heyday of the Cold War, it was mainly culture and its representatives who were able to penetrate at least occasionally the iron curtain to make inter-human connections possible. These connections brought people closer together by way of a learning process that resulted in a better understanding of each other and reduced prejudice.

In a divided Germany, appearances by West German artists in the former GDR have always been something like a sensation for the population of East Germany. The West German rock singer Udo Lindenberg for example became a kind of pathfinder with his concert tour "There is a special train going to Pankow." He soon became a symbol for a young generation of East Germans, who later dared to listen to music from the western hemisphere. Western music was officially called decadent and was for East German rock singers a kind of guarantee to perform their music without being afraid of repression.

When I went to South Korea and North Korea for the first time in my life on the invitation of the Goethe-Institut in Seoul, I thought that as a Berliner who had experienced in 1961 the construction and in 1989 the fall of the Berlin wall, I would be very well mentally prepared for the encounter with this divided country. I was tense and curious when I started the trip. I had a few of my films in my personal luggage, which I wanted to show in both the South and the North. First, I went to Seoul, a rather Americanised city full of vitality and activities. The people on the streets and in the shops and markets conveyed immediately an impression of diligence and efficiency. In the discussions I had with students and their teachers in film schools, I was surprised about the precise knowledge they had of German films and

their filmmakers. Their huge interest and their extensive knowledge of the international film culture were really impressive. They admired the German governmental system of film subsidies and thought it would help the South Korean film industry a lot if they could have similar conditions. I visited a theatre in Seoul that had sold out tickets every evening for a long time. I was shown the German musical "Line Number One" by Volker Ludwig from GRIPS-Theater in Berlin, of which I had produced a very successful film directed by Reinhard Hauff. I was very surprised to learn that this typical German musical had been shown there for more than 3000 times already and that it was so well transformed to another cultural hemisphere and another language. When I later talked to the actors, I understood that there were similar problems young people in every country were confronted with and that was the reason why this stage piece was so successful in Korea.

Talks became more complicated when I carefully asked about their assessment of the possibility of reunification of the two Koreas. There were answers like, "We are afraid of the political leadership, which has been claimed by the North Koreans," and "The reunification will wreck the good economical situation of the South if we were to reconstruct the missing infrastructure in North Korea." These answers gave me the impression that the time for reunification was not yet mature, but hopefully is still to come.

With a lot of impressions from South Korea, I was very eager to go to Pyongyang to see the North Korean capital and to meet the people there. The journey from the South to the North was more complicated, as one would have imagined, because there is no easy transition from one part to the other. One has to fly from Seoul to Beijing and then take an airplane, which flies almost the same way back in order to bring you to Pyongyang. This flight showed me the actual status of the development of relations between the North and the South. The welcome at the airport in Pyongyang, with its intensive passport and customs control, corresponded to the familiar proceedings on arrival to former communist countries. My first impressions of the country were - in contrast to my expectations - surprisingly positive. Wide freeways leading from the airport to the city, though more used by pedestrians than cars, brought me into a busy and clean city of people transporting all kinds of goods on very simple handcarts and bikes. There were no traffic lights, but the traffic was regulated by very charming and good-looking young female police officers who did their job with great efficiency.

The difference between Seoul and Pyongyang was for me a kind of a clash of different civilisations, and it was not easy to imagine that one could come into a dialogue concerning cultural aspects. But shortly after the first meetings with the responsible people, I was sure that we would rather quickly come to an understanding about cultural exchange. This understanding would have to become an important element in order to establish a base of confidence. Personal contacts there were very important and had a vital role, because at that time, there were very few chances of communicating with foreigners.

The days in Pyongyang were particularly planned to find out what kind of possibilities might

exist for co-operation and/or services for the production of animation films. The responsible governmental institution gave me all kind of opportunities to visit the state run SEK animation studios. At these studios, I had the chance to meet and to talk to animators and other artists and studio executives, all of whom gave me the impression of being seriously interested in cooperating with Germany.

The artists were all perfectly well-trained, especially the animators and background painters. The difficulty was the lack of English, as most of them only speak Korean. Furthermore, they lacked the bases of computer animation, such as up-to-date high-tech equipment and reliable electrical infrastructure.

I was very surprised by the many possibilities the government is submitting in order to educate kids in different kinds of culture. Governmental institutions develop musically talented children. These children, most of whom were not older than ten years old, performed very proudly and showed how they could already play their instruments with virtuosity. A professional education is given to painters, artists, singers, writers, acrobats, and actors. These individuals are trained in special schools that offer an excellent chance to become first-class educated artists.

A masterpiece of cultural diplomacy had been realised by the Goethe-Institut in establishing a so-called reading room. I could take a look at this room even though it was still under construction. Opened in 2004, this information center received strong and positive recognition worldwide. It was, until today, the only foreign cultural facility in a country where so far the consumption of foreign media, especially from Western countries, is prohibited for most of the people.

I left Pyongyang with the certainty that my visit had helped the parties involved to approach each other and to build up confidence and trust. To start this process, I offered three talented Korean film technicians six-month scholarships in Munich to learn the language and learn about technical equipment used in German films. This cooperation was arranged with the world-famous Arri-Company in Munich and the Bavarian Radio and TV station Bayerischer Rundfunk for the production of a televised animation series for children. In return, the Koreans invited me to take over the presidency of the jury in their next International Film Festival in Pyongyang. I considered that to be a great honor and a gesture of rapprochement and trust-building .

In September 2006, I accepted this invitation. I was looking forward to seeing old friends I had met during their 2004 visit to the Berlin Film Festival. At that festival, these friends had cooperated with the Goethe-Institut in Seoul to premiere some of their films to a very critical international audience. Yes, the film cooperation between Germany, South Korea, and North Korea seemed to work.

The motto of the festival, "Independence, peace, and friendship," was rather surprising for a

country that is hardly demonstrating any one of these terms. Not very much less surprising to me was the selection of German films in competition. All these films were recommended by the Goethe Institut and were accepted by the festival. The films dealt exclusively with issues of freedom, dictatorships, and conflict.

Already present in 2004, films such as “Rosa Luxemburg” were accusations of abuse of power. “The lost honour of Katharina Blum” showed how violence comes into being and where it can lead to. The contest-winning film, “The Promise” by Margarete von Trotta shows the escape of four young people from a repressed East Germany to a free West Germany. Three refugees succeed, but one boy is caught and arrested so that his girlfriend can make it to West Berlin. The relationship between the two is destroyed for years. “The Promise” was awarded with the Grand Prix at the festival in Pyongyang. The film makes a clear analogy to the situation in North Korea.

The festival jury consisted of a Chinese film academic, a Russian filmmaker, an Italian festival director, a North Korean official delegated by the Ministry of culture, and myself, to whom the chairmanship was entrusted. The atmosphere and the climate within the jury were extremely good from the first day to the last even though most of them communicated exclusively through interpreters.

The daily travel from the hotel to the house of culture where the films in competition were shown to the jury always provided moments of discovering situations on the streets. I saw for example how the traffic police, most of them very good-looking young women, handled the modest traffic. I did appreciate that the German films in the competition had Korean subtitles, which had been controlled and supervised by the Goethe Institute. These subtitles allowed Korean audiences to follow the original dialogue. Nearly each performance of the 73 films shown during the festival drew the attention of the audience. Every screening was sold out, and more than twelve thousand spectators came every day to see the films. I never found out if they paid or if they had been allowed to see the films without paying, but this was not important to me. More important to me was the fact that they could see critical films dealing with repression, violation of humanity, censorship, the lack of freedom of speech, and military dictatorship. I am sure that these intelligent audiences saw situations analogous to those in their own country.

My motivation was to have the challenging task of going to a country where what we take as normal and for granted does not exist, including the possibility of freedom of speech or democratic life, and to be in a position of jury president to talk to people in a more open way than I could as an ordinary tourist. It was a great experience to discover the audience's interest and acceptance - and sometimes even enthusiastic reaction - while watching the films.

The main prize of the festival went to the film “Napola,” which tells the story of one of Adolf Hitler's notorious “Elite” colleges. The director told the story from the point of view of a 16

year-old pupil who is first misled by the regime, but then slowly starts doubting. A special prize went to the films “The wonder of Bern” and “The life of Sophie Scholl.” Some critics in Germany complained that there would have been better films that could have been honored. Others were moaning that participation in that festival was only an act of appeasement.

I do agree that there would have been other films to give a prize to, but I am sure that the awarded films fulfilled a task that the others would not have done. I do not agree with the moaners - of course no one expects that when you go to a festival in difficult areas, you could change the system of the country only by participating. Participation in such areas is nothing more than putting up candlelight in order to bring about enlightenment. However, any small amount of candlelight can perhaps lead to mental illumination.

Culture and cultural activities are able to overcome borders and obstacles. Cultural cooperation helps to foster the initiative of peacemaking. In dealing with politically difficult systems, it is definitely better to get engaged than to stay absent and remain inactive. I say this because mutual engagement leads to dialogue and rapprochement, absence and refuse to standstill.

Comrades in Dream -The First Film Coproduction among Germany, South- and North-Korea, its Development and International Reception

Uli Gaulke

To shoot a film in North Korea means to be confronted with images and realities of an artificial society and to run the danger of perceiving this as reality. My method to deal with this was to find a protagonist who was so touching that she instantly compelled audiences to follow her story. The inconsistency of her appearance and the openness of her presence turned out to be a nightmare for the officials. Her way of talking about her private life was a reason for constant disputes throughout the shoot. I was expected to deliver the image of a North Korean woman as being inconspicuous, exchangeable, and streamlined. That was where my film started from. As a filmmaker I could not accept that they reserved the right to decide how people act in front of my camera. My aim was to create a space where the personality of the protagonist could be self-fulfilled. Many of the absurdities and dangers of the surrounding reality were revealed that way. The project was under permanent threat of collapse. Only the patronage of the Goethe Institute set the stakes for a possible failure, which would have meant a loss of face for the Korean authorities. Slowly but surely both sides were forced to move towards each other and try to understand the different points of view. The film was presented at more than 50 festivals worldwide. During my trips with the film I encountered people who were curious about a country afraid to open up because of the fear of hurt pride. To understand and get an interest in other people and cultures is to confront this fear. This way understanding becomes possible. That is what I hope my film can contribute.



LUNCHEON SPEECH

Three Rationales of Germany Cultural Foreign Engagement: Experiences and Reflections of ifa

Ronald Grätz

Ladies and Gentlemen, distinguished guests and colleagues, I am delighted to have the opportunity to be here and to share with you some of our experiences at the Institute for Foreign Cultural Relations (ifa) in addressing issues of culture and conflict. By way of introduction my name is Roland Grätz and my role is that of the Secretary General at ifa. I will begin, if you don't mind, by paraphrasing our Foreign Minister - Frank-Walter Steinmeier: "Culture and cultural exchange is not a peace treaty, but is a crucial instrument in any serious effort to reach a sustainable and durable peace."

Conflict when dealt with through constructive peaceful means such as dialogue and cultural actions will lead us towards liberty, rule-of-law, justice and a respect of individual human rights. The role of building healthy relationships between states as well as engaging and promoting grassroots confidence and dialogue in conflict areas is frequently one of the most inspiring means of learning, development and change.

However, as we all know, there is also a more onerous side. Often difference and change is managed through physical violence. This is compounded through cultural violence: social exclusion; polarization e.g. in media; a distortion of historical facts portraying ethnic purity e.g. in school textbooks; single language policy as a means of marginalization and an attack on the very identity and values of groups and individuals.

Given these two sides of the coin, what can we do? - I cannot provide any recipe for success, that does not exist, but I can contribute some of our experiences and recent reflections.

Germany's foreign cultural policy can best be understood when looked at from three distinct rationales: first, presenting and positioning itself within the international community; second, promoting dialogue and building confidence between itself and other actors as a means of hindering the outbreak of violence; and, finally, as a third party intervening in crisis regions. Hence, cultural diplomacy works in international relations, in crisis prevention and in conflict transformation and peace-building.

Ladies and Gentlemen, let me structure my contribution along these three rationales and emphasize ifa's crisis prevention and conflict transformation experiences. Before closing, I would like to share with you some reflections from our work by highlighting some challenges and dilemmas as well as some considerations that guide as much as inspire our work.

Three Rationales of German Cultural Diplomacy

1. Presenting and Positioning Germany within the International Arena

Concerning the first rationale, presenting and positioning Germany within the international arena, we have two main policy issues before us: national identity and international cooperation. It is about addressing and redressing the past as a perpetrator and, second, it is about working to build durable relationships to prevent crisis in the future.

Germany's approach in dealing with the past has changed dramatically over the years. In the immediate post-war years, there was a 'deadened silence' derived from both extreme guilt and untouchable shame. The mostly unquestioned German cultural tradition was used on both sides of the Berlin wall as an ice-breaker in international relations. It can be illustrated by the establishment and naming of the Goethe-Institut on one side and the Herder Institute on the other. It was only until the children of that war generation grew up that learning, and even a culture of dialogue, could begin. Especially noteworthy is the realization of the German-French Youth Exchange Scheme where parents would let their children visit the former enemy.

This, in conjunction with the end of the Cold War later in the century, has marked a significant change in cultural policy options. For example, the intensive work in nurturing German-Polish relations. This can be illustrated through more than 600 German-Polish town-twinning arrangements, and partnerships between districts and municipalities as well as schools, universities and scientific societies. Additionally marking this progress in cultural relations is the establishment of a German-Polish Bi-national school in Warsaw which was the result of the signing of the Agreement between the Federal Republic of Germany and the Republic of Poland in 2005. A distinct policy of remembrance including cultural actions like film, literature, theatre, memorial places and even dance has paved Germany's return to the international community. It is, nowadays, regarded as a model for reconciliation processes in some post-conflict countries.

However, further work is needed in preparing ourselves for the future. All actors, including Germany, will have to tackle the issue of scarce resources and adjust to the shifting economical and political power centres within the international arena. In a recent study by the statistical service of the European Commission, it is estimated that the population of many western European countries will be 'shrinking' with seismic, long-term consequences on education and the social services. The exception to this shrinkage is United Kingdom where it is speculated that immigration is the main key. Our planning and strategizing must be far sighted and full of cross-cultural cooperation.

2. Engaging in Crisis Prevention, Confidence Building and Dialogue Promotion

The second rationale is 'crisis prevention' or alternatively 'peace promotion'. How are we going about building relationships between Germany and other actors to promote peace and

tolerance?

The kaleidoscope of activities is wide. Let me highlight two areas which I believe are of particular relevance in this day and age: European-Islamic dialogue; and education and training. Especially in the light of recent years, where extremists are given more space than the moderates in media reporting, we have continued both quietly and modestly to promote dialogue between Europe and Islamic countries.

The European-Islamic cultural dialogue programme promotes mutual understanding through school partnerships and the exchange of students, teachers and academics. This is supported through efforts such as the internet dialogue portal QANTARA and the exchange programme Cross Culture Internships. The former, pioneered by ifa in partnership with the Goethe Institute, acts as an interface between the Islamic World and Western world; the latter, offers young professionals and volunteers internships with a view to develop their professional and intercultural competencies.

Further, in terms of education and training, Germany has supported initiatives that promote the development of unbiased education materials such as text books. The Georg Eckert Institute for International Textbook Research, together with partners from various countries including Egypt and Jordan, continues its long-term project that works to analyze representations of the 'self' and of the "others" in Arabic and European educational media.

The second training example that I would like to share with you is the Euro-Med Youth Parliament. This was established during the German-EU Presidency in 2007 and involved the training of 100 youth. The goal is to continue the promotion of cultural dialogue in the Mediterranean region and provide further training in intercultural communication skills and understanding of political decision-making.

3. Engaging in Conflict Transformation & Peacebuilding (specifically as third party)

The third and final rationale underlying cultural work concerns Germany as an external actor, specifically in crisis regions: namely, in conflict transformation and peace-building work. I will illustrate this with some of the regional efforts in South-East Europe and Afghanistan and our engagement with a core group of civil society, namely, youth.

Lying at the intersection between policy and NGO implementation is ifa's 'zivik' programme for civil conflict resolution. It acts as an intermediary and advisor for both non-governmental organisations and the German Federal Foreign Office. It financially supports peace projects carried out by local peace constituencies. Its work further involves conducting evaluations and analysis, as well as identifying and documenting good practices and lessons learned - including cultural efforts.

In South-East Europe, ifa's work within the framework of the Stability Pact has focused on

the development of free media. The Stability Pact for South-East Europe serves as a good example of German engagement in cultural and educational projects to re-build democratic structures, enforce human rights and strengthen civil society.

Concerning the development and promotion of free media, ifa has developed an extensive programme in the successor states of the former Yugoslavia and in Albania, Bulgaria, Moldova and Romania. For example, in Moldova, Media-ImPact was set up in 2003 as a direct response to the limitation of the then current media institutions focusing on the change process. Specifically, it aims to support the orientation of media institutions, public opinion and the intellectual community towards the values of an open society and democracy. Media-ImPact additionally provided training and support to enhance the quality of media production.

Similarly, the Stability Pact for Afghanistan has an equally broad outreach with a clearly stated objective, amongst others, to “shape identity through cultural activities and establish independent media.” [i][i] This includes the promotion of schools, higher education partnerships and scholarships. Further measures cover the concerns of women and gender.

Concerning the development of the rule-of-law and good governance, the Max Planck Institute for Comparative International Private Law has worked to publish textbooks on Afghan family law. This was as a direct response to the wide-spread distrust in the state institutions arising from the coexistence of codified law, unwritten Islamic law and local customary law and the subsequent legal uncertainty. Another example is the Heinrich Böll Foundation which has been involved with dialogue promotion with traditional tribal structures. The foundation’s work is of particular significance in the reforms of Afghanistan’s civil and criminal law, providing further important incentives for broader debates on issues such as the enforced marriage of girls.

Following on from this, let me highlight a little about our engagement with that core group of civil society -youth. As many of you know, youth are increasingly becoming a vulnerable target group for mobilisation and recruitment for war or into spoiler groups. International experiences have shown that youth can play not only a valuable but also a necessary role in peaceful social change for democracy. In terms of German efforts, this has been acknowledged on the implementation level and can be seen in the creation of institutional sectors for youth such as within the GTZ, the German Development Agency. We at ifa continue to applaud and support this trend.

Apart from this, there are two specific youth programmes within the framework of foreign cultural policy that I will raise: D@Dalos and the mobile.culture.container programme.

The UNESCO Education Server D@Dalos for Human Rights and Democracy focuses on South-East Europe and provides teaching and training materials on political education. It is available in ten languages. Additionally, it works to establish international school

partnerships and school projects. The success can be seen by the 100,000 visitors per month using the server.

Under the auspices of the OSCE Representative on Media, the mobile culture container project was initiated in 2001. The project revolves around the concept of 16 mobile containers which provide the space for exchange on youth policy, access to the media and holds music, drama and film events. The driving force is to create a safe space for young people to meet and discuss their future.

Challenges & Guiding Notions

In the final part of my contribution, I would like to put forward some of the challenges, dilemmas and open questions that face our work as well as to share with you some notions that continue to guide and inspire our work. The main four challenges are:

the ambivalence of culture: culture, per se, causes neither peace nor conflict. To repeat my introductory words of Steinmeier “cultural exchange is not a peace treaty”. It is a vehicle or a catalyst. Unfortunately, it too can be used as a vehicle for polarization and violence. Any intervention in culture must acknowledge and, at all costs, be fully aware of this dual role in conflict settings and how that intervention can exacerbate as much as assist change.

the intertwining of culture, identity and memory: from our own experiences in Germany, we have realized in dealing with the past that our national identity is linked to our culture. Especially in reconciliation work it is necessary to understand that it is not possible to work on one without affecting the other two.

measuring impact, success and effectiveness: especially in our field where culture is by definition frequently intangible, we have still a long way to go in knowing and assessing what good we do. While sterling progress has been made in conflict studies over the past ten years in moving toward evaluating our work, especially under the various methodologies that lie under the term Peace and Conflict Impact Assessment such as Do No Harm, further work must be invested into both analysis and assessment. Based on studies from the field, in assessing the effects of conflict interventions such as mediation, peace education and dialogue processes, we are as far as an “educated guess”; in assessing the conflict impact of cultural actions, we are, unfortunately, still in the realm of “hope”.

The final challenge concerns **the need to position cultural work or diplomacy within a broader framework.** We know that conflict as well as peace involves all aspects of society, affects all dimensions of life and no one is excluded from the consequences. Issues are connected to one another often in painful dilemmas: peace processes versus the rule-of-law; no development no peace - no peace no development; and the argument for principled negotiations versus the practical realities of continued small scale hostilities and breaks in security during a cease-fire. We do not have the luxury of not looking at how our small

endeavors fit within the broader picture. We must find the balance between practical, micro projects and academic theories. The Reflecting on Peace Practice project by the Collaborative for Development Action (CDA) has made some in-roads into examining how this fits together under the term “Peace Writ Large”.

Let me now close on some of the notions that guide our efforts. Some are as old as the field. However, we feel that we must continually return and remind ourselves of them in our everyday work.

Long-term engagement: social change takes time - in many cases of suffering and social healing of traumatic experiences, often longer than a generation. Any effort at dialogue and confidence building must recognize the long-term perspective as well as maintaining a certain sense of patience.

Limits of External Actors in Cultural Work: In extremely polarized societies, frequently, the most constructive role can simply be the creation of forums in which people from different camps can learn and move towards mutual understanding. Sometimes the best that we can do is simply to moderate and provide a safe space ensuring mutual respect.

The uniqueness of the local context: especially in cultural work, forms of engagement must be determined by the local context. What is more, evaluation reports and impact assessments within the last few years have indicated that the effectiveness of a project, quite often, is how closely it is tied to the this context in terms of target groups and timing. There are no golden or universal solutions but only golden mistakes. Without local ownership of a process, there can be no sustainable peace.

Increasing strategic partnerships and the policy-grassroots linkage: especially work that addresses societal memory requires a close exchange between artists, cultural workers, peace and conflict researchers and actors from all sectors and disciplines. A durable and stable cultural memory can only be integrated into politics and society if there is support by government institutions, parliament and civil society alike.

I would like to end on one final notion. While I have highlighted various successful efforts through out my contribution, I believe that the most important issue to keep in mind, whether in terms of international relations, cultural actions, crisis prevention and peace promotion or conflict transformation and peacebuilding is a sense of proportionality. Our efforts can only play a part in a concerted effort and a degree of modesty must be maintained. On this note, let me finish on a question raised by a German playwright, Bertolt Brecht,

“Who built the pyramids? The history books are full of the names of kings; but where did the stonemasons, the brick layers, go? ”

Ladies and Gentlemen, distinguished guest and colleagues, I would like to thank you for your

patience and time and would like to wish you sincerely all the best and much encouragement for your future efforts.

[i][i] “German involvement in Afghanistan - stability and reconstruction”, German Federal Foreign Office, 15.02.2006 at <http://www.auswaertiges-amt.de/diplo/en/Aussenpolitik/RegionaleSchwerpunkte/AfghanistanZentralasien/EngagementDeutschlands,navCtx=3D265692.html#t18> (Accessed 020509).

AFTERNOON SESSION

Missions and Roles of Cultural Initiatives for Fostering Peace

Dr. Hans-Georg Knopp

Thank goodness, between Germany and Japan no cultural initiatives are required in order to create a state of peace. There is peace between our countries – even in the expanded sense of the word that underlies the concept of this conference. As is stated in the programme, peace is more than the absence of war. And that is certainly true. It is good that we can agree that this state undoubtedly exists between our two countries. In this situation it is possible to set off on the search – as we have done today, and will continue to do - for the “something extra” which distinguishes the state of peace, when the guns are silent - often it is culture that fulfils this role.

This “something extra” requires confidence. This confidence exists between Japan and Germany. Even if today and tomorrow, we want above all to talk together about the role of cultural initiatives in dealing with international conflicts and crisis situations, it is perhaps not inappropriate to note at the beginning of my remarks: even in a state of peace, such initiatives are in no way superfluous. They are an important part of that “something extra” that distinguishes peace.

The relationship between our two countries shows that in a satisfactory way. The ongoing cultural initiatives between our two countries can – firstly - be a simple expression of mutual peaceable cultural interests. Secondly – they can serve to still further strengthen the relationships between our two countries. And – thirdly - cultural initiatives can serve to allow experiences to be exchanged. This particularly refers to historical experiences in both our countries on how we cope with the difficult legacies of the 20th century.

But it also deals with experience on how to handle the present day, including naturally above all, dealing with the issue of the world’s globalisation. I am absolutely convinced that both sides can greatly benefit from such an exchange.

Kazuo Ogoura, your country is demonstrating an interest in such an exchange by making it possible to hold this conference here in Tokyo. In my country, Germany, there is also much interest in such an exchange. The diverse, and as seen from my standpoint, extraordinarily fruitful co-operation between the Japan Foundation and the Goethe-Institut is the living result of this interest. From our side, it does not only exist because we want as a result to learn something about Japanese culture. But also because such an exchange of experience always provides us with the opportunity to understand our own German culture better. I am firmly convinced that cultural exchange always provides the opportunity to learn something more about ourselves. There is the opportunity to analyse things that have previously been regarded as self-evident. For this often not very straightforward but in the modern world, necessary process, that “something extra” is required, which is what distinguishes peace.

I actually believe that such a process of analysis of one's own views and self-identification is of great importance in a world which is becoming increasingly complex and bewildering. It is a pre-requisite for the high level of empathy, which must be contributed to the bringing together of cultures and of states, i.e. the ability to think oneself into initially unfamiliar points of view and into global perspectives.

Without this ability it will be very difficult to get on top of the cultural challenges of the 21st century.

To a certain extent, this conference already forms part of the various cultural initiatives shared by our two countries, which make such an exchange of experience, and therefore of empathy possible. Please allow me now, in my capacity as General Secretary of the Goethe Institute to express my sincere thanks for your co-operation in the conception and the organisation of this conference. In fact, for my organisation, the question of how, using cultural initiatives, peaceable relationships between different societies can be constructed and supported is very important. And I greatly value the opportunity to come to the Japan Foundation here for a general exchange of experience - and also the varied, and as I see it, successful work which our organisations continually undertake in practice.

But there is something else that I would like to say at the start: please permit me to express my personal thanks for the opportunity to talk to you here. Personal discussions, direct exchanges are in my opinion of great importance in the process of intercultural dialogue. It is impossible to replace person-to-person exchanges with anything else. To some extent, one could say: to make that possible, or to be more precise, to make it possible between equals is the essence of our work. Exchanges between people where they can look each other in the eye forms part of that "something extra" which characterises peace. I am delighted that I can be certain that you, as our host, see it exactly the same way. And also: the opportunity to be able to speak here is a great personal honour to me. I would like to thank you very much for that.

In fact by no means all the international and intercultural relationships operate so satisfactorily as those between Germany and Japan: sadly, quite the contrary. If we look around the world, we must note that in many areas, we are only now engaged in actually setting up the foundations for a fruitful intercultural exchange. Much building work still has to be done. And in some regions of the world, there are grounds for concern that the work will not be at all easy to do. Occasionally, there is even the impression that great efforts are required to prevent existing contacts from being totally destroyed. A certain amount of caution in setting objectives is therefore required. Far from being a question of working on cultural conflicts, let alone solving them, sometimes it is more a question of just initiating first cultural contacts. Or, to put it another way: there is occasionally talk of the form of a network, when cultural initiatives in support of peace are being discussed. In some areas of the world, the objective is to identify as a first requirement bases or fixed points which can underpin

the network that is to be constructed. Even that is sometimes regarded as quite difficult. I am thinking here of regions such as the Middle East and North Korea. What then stands in the way of friendly cultural exchanges? What are the challenges facing cultural relations between different societies in the 21st century? What prevents us from sometimes searching for the “something extra” which should really characterise peace?

My initial point is: we must all recognise that the legacies of the extremely violent 20th century will be a major long-term issue. Conflict researchers believe that wars such as the Second World War have huge after-effects on the thought processes of society for at least three generations. That represents 100 years, of which just 64 have passed. Many psychological consequences of the war, such as traumatisation only show themselves after a certain amount of time has passed. That can be demonstrated in Germany by considering the fate of the many refugees. And expulsions, with all the misery that they bring for people, also took place in the theatres of war where the Japanese fought in the last century. Such legacies form an important framework for the work on intercultural dialogue and cultural initiatives. We immediately think of the hugely difficult issues when we consider these legacies. The battlefields, the concentration camps. The wrongs inflicted on the Jews by the Germans.

How deeply the 20th century is stuck in our bones, how it continues to form part of the general consciousness of societies can be seen from examples, which might at first sight seem rather improbable. I was recently stopped in my tracks by a very personal essay by the German arts journalist, Nils Minkmar, in which he writes about his French grandfather. Nils Minkmar’s mother had a French father, i.e. the French grandfather. When he visited his German grandson, he never ceased to express surprise at how the Germans liked to eat grilled sausages. His attitude to this simple dish was not just coloured by the marked preference of a French person for sophisticated cuisine. The whole idea made him feel uncomfortable for a completely different reason. As a young man, he grew up hearing the propaganda that the Germans economised on their food in order to finance the armed forces and to equip them for war. The grilled sausages kept reminding him of this.

Obviously this man was fully aware that war between Germany and France is a complete impossibility. But in the deeper recesses of his mind, there was still great scepticism, an uncomfortable feeling. If you look at it from his point of view, that is hardly surprising. In the course of a century, Germany fought three major wars against France. In 1870/71, 1914 to 1918 and finally in the Second World War, 1939 to 1945. During the time of the German Empire, France was regarded as Germany’s traditional enemy. And it is true that Germany did economise on what people ate, in order to be able to finance armaments production. That is a fact that German society may have now largely forgotten, but which can certainly live on in the memories of people who were members of the community in the countries then at war with Germany. Historical memories have long, very long lives.

This small example demonstrates two things: firstly within people’s normal experience of daily life, it is necessary to take into account traditions and attitudes which reach back far

into the past.

That even applies with societies such as Germany and France, where there have been numerous efforts over many decades to achieve reconciliation. There are over 2000 town-twinning agreements between German and French towns. Without even thinking of French cuisine or French fashion - French literature, French films fascinate very many people in Germany. On the other hand, French philosophers were often inspired by German thinkers. There is now an international history book, which is used for teaching purposes in both German and French schools - it is by the way a project which is to be very warmly welcomed. I have also heard that interesting events relating to it have been held here at the Goethe -Institut in Tokyo. There has also I understand been very fruitful German-Japanese co-operation in relation to the issue of how old wartime enemies can be reconciled.

Here it is necessary to recognize: even where the situation is as satisfactory as it currently is between Germany and France, despite so many varied cultural initiatives, memories from wartime show themselves to be astonishingly long-lived; the past is still present today. This does not in any way mean that cultural initiatives have had no effect. Quite the contrary, it only demonstrates that it is possible to create in the memory a common awareness that nothing like that should ever happen again. And it also demonstrates that people cannot get enough of such cultural initiatives. If that is the case between Germany and France, where peaceable neighbourly relations have existed for more than sixty years - how much more validity must this thought have in areas of the world where the memories of war are much more recent!

Or in colonial situations where European armies actually arrived with their aggressive superiority complex!

Colonialism in particular has left behind deep and as yet still unhealed wounds, because it represented not only an imperial world order, but also one in which Western culture was represented as of higher value than all others, and therefore provided the cultural justification for imperialism.

This resulted in mental attitudes which still today remain, even if unintentionally, virulent and their consequences still in many parts of the world determine the relationship between Europe and ex-colonial territories. There are still cultures which have no voice in the concert of cultures, they are not seen, not heard and not noticed. Particularly in the relationship between economically powerful and less powerful countries, a responsible attitude is called for as far as external cultural policy is concerned, but not only in that respect. A musician such as Barenboim has for instance clearly recognized this and converted the resulting responsibility into a project with his East-Western Divan Orchestra.

External cultural policy would be particularly well-advised also to take on this responsibility and not to want to fall back again into using hectoring tones. Tensions of crisis proportions

would be pre-programmed in people's hearts and minds.

Secondly the small example of the French grandfather shows that the sensitive points of contact between various historical or cultural traditions often arise in totally unexpected places. To stay with the example from ordinary life: please believe me – there are few things that Germans would regard as more everyday or more harmless than their grilled sausages. That they remind people of war arouses in German minds feelings of simple blank astonishment. But that is the way it is, and it has its historical justification.

General conclusions can be drawn from this situation. Many emotive issues between societies and cultures are known in theoretical terms. In the current world situation, they concern the realization of human rights, the position of women in society and dealing with religious traditions. But at which points in practice and on which actual occasions, conflicts will in fact arise cannot be predicted.

Even if only because of the long life-span of cultural conflicts, it is sensible to plan cultural initiatives to preserve peace on a very long-term basis. But also because of the complexity and unpredictability of cultural conflicts, it is necessary to draw conclusions – and both the Japan Foundation and the Goethe-Institut are already doing that. Cultural initiatives should be transparently planned with a high degree of willingness to take into account the relevant partner's point of view. And it is always necessary to be ready for surprises. Anything else would simply be counter-productive. With short-termism, a demand for fast results, it is impossible to build up the confidence which is required in order to be able to handle judiciously unavoidable surprises arising from cultural exchanges.

Whether therefore such projects which provide the rationale for national years or weeks of culture, are consistent with the approach described here must quite rightly be questioned.

Quoting words from Sarat Maharaj: cultural exchange is comparable to a research process where the partners in their research look for appropriate ways of expressing the results. That is particularly of immense importance with cultural initiatives for creating peace. They can in the end take on a similarity to overland exploration where the way forwards through unknown territory is trod with great caution. In English-speaking countries, there is a useful expression for this: we agree to disagree. It probably needs to be used frequently. The ability to take on board the position of another party without giving up one's own position is a basic requirement for intercultural communication: with cultural initiatives in problem areas it can develop into a necessary art-form. Instead of looking for a consensus, dissent in the link-function should be expected. If you are successful, you are richly rewarded. It is especially through differences that people learn better how to understand and express themselves. That also belongs to the "something extra" which distinguishes peace.

That brings me to my second major point in the search for what has to be overcome if a strong network of cultural initiatives is to be preserved. Initially I spoke about the long-lasting

character of cultural processes. Secondly I believe that we must build a realistic picture of the status of the processes, which we like to gather together under the concept of globalisation. We are still occasionally surprised how far these processes have already gone.

Two recent events which caused alarm to people throughout the world demonstrated how much the world has become integrated. The first is the financial crisis. There is not a country in the world that can avoid it. And no country in the world can solve it alone. The second is swine-flu which originated in Mexico. As a result, it is necessary to note how quickly today a local event can spread throughout the world – two, three days were easily enough.

From Mexico to Germany and also to Japan, it is just a few hours by plane.

The current status of globalisation has had an effect on the encounters between different cultures. They develop a major dynamic of their own – particularly in a situation where two large societies, China and India, lay claim to being global players in the 21st century. And among the Arab countries, powers are emerging that will provide a challenge for both centre-left governments and for cultural movements, and indeed both in Western countries and in those parts of the world subject to Islamic influence.

The German journalist, Mark Siemons recently observed that as a result of the current status of globalisation, the Western industrialised countries – i.e. North America, Europe and Japan – no longer simply stand separate from other cultures. Instead they are directly involved in the “history, battles and traumas” of the remainder. Such a situation of direct involvement only used to apply between immediate neighbours, and as the German-French example showed, with complicated consequences. Now this situation applies in principle throughout the world.

The attacks of September 11, 2001 on the World Trade Center in New York confirm the importance and the urgency of this analysis. These acts of terror actually represent symbolically a situation in which the peaceful meeting together of cultures failed. As I see it, since then the concept of intercultural communication has once again received a new stimulus. Unlike the battle between cultures, it is considered to be something that maps out the way forward from the dilemma affecting a world society in which the blocs defined in cultural terms face each other in a state of enmity.

Megaphone diplomacy as a national marketing tool is not the solution with blocs, where relationships are of hostility. In such situations, one culture is ranked against others and as a result tensions of crisis proportions are actually deliberately built up.

This is also true. The rule of thumb obviously applies: the more that societies communicate together and the more complex the communication channels, the less likely it is that a state of war between them will arise. But it must also be recognized that intercultural dialogue always requires efforts and that is not something that only starts when the guns fall silent.

And it must also be recognised that this dialogue cannot always be without friction. The multicultural global society of the 21st century will in no way be so romantic or so pleasant as that which the poets and thinkers of the German classical era used to describe. Perhaps Japanese thinkers allowed themselves fewer illusions from the outset in this respect.

But the concept of the battle of the cultures is in itself inappropriate because it is too crude to reflect the real challenge. In the final analysis, it is certainly not cultures that communicate, but rather individual people, one with another. Intercultural communication stands for the idea that individuals can make creative exchanges in a situation where the cultural backgrounds that have moulded them differ widely. What is required for that purpose is constructive contacts with cultural diversity and with different value systems. People should not feel threatened by experiencing the unfamiliar, but be creatively challenged by it.

How is a constructive contact of this type to be achieved? That is for me the key question in the conception of cultural initiatives for preserving peace. What is interesting is that obviously the better they succeed, the less they are associated with clear intentions. Openness between cultures cannot be created by command, and it also cannot be simulated.

How then is it to be done? It is important to realize that cultures are not in any way firmly defined blocs. Their inter-relationships and connections and their pervasiveness were extensive before the period which we call globalisation. Today they have proliferated and accelerated in a previously unimaginable way, so that we can no longer think of cultures as unchanging and unadulterated in a sort of container. My experience is that as soon as you actually become practically involved with them, you find points of contact, from which communication in dialogue form can be initiated.

For instance in 2004 I had the opportunity to fly to Kabul for a drama festival, in which Helena Wildmann's production of "Return to Sender" was performed. I am very pleased that Helena Wildmann is attending this conference, and equally that Rita Sachse-Toussaint, Director of the Goethe-Institut in Kabul is here. With a certain amount of satisfaction, I was able to draw some conclusions from this drama festival in Afghanistan: that it was a good example of intercultural communication. It was an invaluable opportunity for exchange, since at each performance an audience of around 600 Afghan people watched a play by German dramatist Bertold Brecht. It was also a good example of communication within Afghan society. The need of the audience within the protected environment of such a performance to express its feelings and its opinions was remarkable. And it was possible to get a good impression of the differences within Afghan society, for instance the generational conflict among the younger and the older members of the audience.

In my experience every culture has such gaps and openings, they offer tie-ins for intercultural communication processes. This conference has been shown a whole series of successful examples. With all of them, the pre-requirement is that protected spaces are provided where the people's need to express themselves can freely unfold. Therefore for me, such

cultural initiatives represent two things: having sufficient self-confidence to react positively to the unfamiliar and also to always accept the differences, but equally to take on board the opportunities that every unfamiliar culture offers for a dialogue. The objective is to expand these opportunities, and to cultivate them on a sustained basis.

Any kind of bouncing your attention from one current crisis region to the next can even turn out to be counter-productive.

It is absolutely correct within all this to recognize the limits to cultural involvement. Peace initiatives require above all the political will to see them through; without a political framework they will run into the sand. And allowing for the way that the modern world is currently organized, economic relationships are often automatically driven forward more than cultural ones. That is the main interest of many politicians. That is the way it is. But there is also reason to demonstrate in a controlled way the special importance of cultural initiatives and what it is that only they can create.

The framework of culture enables people to come together without political issues or economic issues being paramount. Within the cultural framework it is possible to create something which is independent of the ups and downs of political developments. It is about creating an atmosphere of confidence. An atmosphere in which critical questions are possible. And one in which the natural horizon represented by a person's own cultural traditions can be left behind, at least on an experimental basis.

That is in fact what the arts can do. But what, when looked at in the cold light of day, is the art of a country? It manifests the key issues in a society. One learns from it about the perspectives people use in looking at their immediate environment, but also about their internal make-up as a whole. This is particularly demonstrated by the varied cultural encounters between Germany and Japan. We come together not just as representatives of German or Japanese culture. When we meet, we do so as individuals with a full range of thought processes, perceptions and feelings. In order to provide space for this aspect, we need the arts. In them is expressed what we will continually encounter. And that enables us to experience clearly in which ways we differ and in which ways we are similar. Both the search for differences and also the search for points in common are in my view important tasks for cultural exchange. I know no area more suitable for doing this than the arts.

Admittedly, as a result the conception of cultural initiatives itself turns into something like an art-form, or if this idea is regarded as too ambitious, then it can become a painstaking form of craftwork. People need cultural sensitivity to know which artists in which cultures should be able to provide something like an initial spark. It is necessary to have a feeling for those discussions in another country which really have something to contribute. That cannot be planned. And it is absolutely certain that there is no universal formula which will work equally well in all the countries in the world.

Finding ways of using this kind of craftwork is the task of such cultural facilitating institutions as the Japan Foundation and the Goethe Institute. In my experience: know-how which takes a long time to develop is required, if cultural initiatives are to be successful. Experienced staff are needed. And a network of influential contacts and connections. For the task of getting cultural initiatives off the ground, it is also important that everything that has to be done is put forward as necessary in the home country.

I am coming to the end of my remarks. Long-term cultural traditions and the complexity of the cultural situation at the present state of globalisation form the challenges which cultural exchange has to react to. What is achieved when these challenges are faced, takes two forms. Firstly it creates a sort of early warning system, which indicates in good time when in relationships between societies any stress-points are emerging. This is because they are visible in the area of cultural activities long before they break out into society as a whole. An early warning system of this type is therefore necessary because it is often impossible to know in advance what a problem area will comprise.

Secondly, there are many opportunities for encounters and discussions in order to exchange experiences. That is very important. I believe that in these encounters lies the essence of that “something more” which has to be found and is needed if peace is really to be created.

Globalization, Peacebuilding and Cultural Exchange

Kazuo Ogoura

I. Preface

- (1) Globalization is a process of increasing interdependence and political involvement. This process leaves, in its wake, the destruction, distortion, reconstruction or redefinition of regional, national, local and other group identities.
- (2) The pattern of international disputes and conflicts witnessed over the past 20 years or so after the end of the East-West confrontation are in part the consequences of globalization as well as the causes of some aspects of globalization.
- (3) If one combines the above two theses as the starting point for reflecting upon the peacebuilding process and the role of cultural exchanges therein, one may be able to advance at least three different (but not necessarily mutually contradicting) approaches.

II. The First Approach (Socio-Psychological Approach)

The first approach is to view the peacebuilding process as creating or re-establishing or redefining the group identity. Through disputes and conflicts, national or group identities are sometimes shattered and destroyed or artificially reinforced and distorted. The peacebuilding process is, therefore, a process of redefining and reconstructing one's own identity.

In Africa, for instance, where tribal or ethnic or local disputes are widespread, peacebuilding as associated with the sound, sustainable nation building, is a process of harmonizing the rich diversity of African identities with economic and social development on the national level. In order to promote such a process, one should first of all, attempt to convert the mindset or paradigm with which we discuss African problems.

One such attempt is the Japan-Africa Journalists Conference held in Cameroon in 2009, where journalists discussed the role of the mass media in creating or reinforcing the distorted international paradigm for approaching African problems. Redefining the African identity in the international community should or could be the first process of peacebuilding in Africa, where the rich cultural tradition of diversified identities clash with the artificially created "national" identity imposed upon Africa by colonial powers.

In the Middle East, ethnic and religious identity has been at the forefront of socio-political problems as the waves of economic interdependence and political democratization are spread. Under these circumstances, it is very important to provide chances for the people in the Middle East to express their identities in the international community not in the form of confronting the "West" but in a more peaceful manner. In other words, we have to create a "protected or shielded intellectual or cultural space" where the people in the Middle East can express themselves without being persecuted or politically abused. To invite to Japan Muslim female journalists of different countries to discuss the gender problems of the Muslim world is one example of such an effort to create "shielded space" because Muslim

female journalists can be freed from the intellectual framework of Western feminism as well as from the conventional Muslim concept of the Middle Eastern ladies in order to redefine their female identity.

Another example of redefining national or ethnic identity through cultural exchanges can be found in the American attempt to open a one month course of cultural dialogue in Hanoi between American students and Vietnamese counterparts. Through this process, both Americans and Vietnamese reconstruct the former enemy's image - very much distorted due to the Vietnam (or American) War - thereby indirectly redefining their own identity as a member of the international community.

It is, on the other hand, sometimes necessary to carry out cultural activities in order to mobilize ethnic or national energy for socio-economic development. The conservation and restoration efforts of the cultural heritage of some old African kingdoms can be said to belong to such a category of activity as they help restore and redefine African identity destroyed by Western colonialism.

All these arguments imply that cultural exchanges or activities can be a good tool or occasion for correcting group identity destroyed or distorted as the result of military conflicts. They are at the same time, helpful in restoring, redefining or reinforcing group identities which again may be useful for realizing national or group unity and stability.

III. The Second Approach (Security-Related Approach)

The second approach is a more traditional or conventional one: one can divide the peacebuilding process into four stages. Somewhat similar to the process or cycle of disaster prevention and restoration, the peacebuilding process can be divided into four phases: prevention of disputes, prevention of escalation of conflicts, restoration or rehabilitation and preservation of memories or remedy measures for the future.

The promotion of mutual recognition and understanding among the people in the areas of disputes is generally associated with the first phase of peacebuilding; the process of observing objectively oneself or one's group can sometimes help prevent disputes from further escalation.

The peace kids soccer programme under which high school students from Israel and the Palestine were invited to the Hiroshima A-bomb Memorial can be cited as an example of indirectly encouraging the process of observing the opponents more objectively.

With regard to the last phase of peacebuilding, that is, the conservation of memories of the disasters of war, one has to take note of the important role of cultural activities in soliciting victims of the war to express their painful experiences. One of the significant effects of the drama workshop for children in East Timor was the willingness of the reluctant children

to start speaking on their trauma in the process of drama making, which helped the people record and conserve the psychological wounds inflicted upon the young people and the way in which they could be healed gradually.

IV. The Third Approach (Human Security Approach)

Peace can be defined not simply as an absence of conflicts but as an environment for human life where a good, natural and human environment is assured. In this case, cultural activities can be viewed in a borderless space and cultural activities can be mobilized to enhance social welfare or to protect natural environment. National and international dimensions of human security can thus be merged into one, such as in the case of the efforts for disaster prevention.

Educational drama activities to raise public consciousness among mountain tribes in the Philippines for the need to preserve natural environment can have a “borderless” significance. A Mongolian musician’s activities to perform, with a traditional Mongolian musical instrument, music composed by herself and inspired by her chagrin as she witnessed the desertification of her country’s green plains, have also both national and international political significance.

V. Some General Remarks

(1) All these different approaches for peacebuilding as seen from the relations with cultural activities can be analyzed from the standpoint of their functional or operational implications, particularly in relation to the activities of organizations such as the Japan Foundation.

One point which we should keep in mind is the recent change of the relationship between culture and society. Nowadays, many cultural activities, particularly those cultural and intellectual activities where public finance or public service is involved, are required to be associated with other social, more pragmatic activities such as welfare, environment or industrial technological development. How to take this factor into consideration in carrying out international exchange programmes is a task to be tackled perhaps with a new perspective.

(2) Another point which we have to reflect upon and which is related to the first point is the accountability of our activities. Socio-political utility of cultural activities is increasingly demanded for the public sector as part of the reaction to the spread of commercialized entertainment activities. Under these circumstances, how to assess the effect of our activities for peace-building has become an important question to be addressed in the future.

(3) The third point is the risk taking. Some activities related to peacebuilding in areas of conflict run the risk of actually being involved in the physical conflicts. In this connection, how to encourage or discourage voluntary activities related to peace-building and carried out

by citizen's groups is also a point to be considered both at the national and international level.

In this respect, we have to think about the relations between conflicts and culture. Although cultural activities cannot be called potential sources of conflicts, they are prone to be utilized or mobilized to serve a particular political purpose. How to prevent cultural activities from being utilized for a political purpose so that at the end, they may worsen, instead of mitigate hostilities among peoples, is also a question to be addressed.

Another problem related to the fundamental relationship between peacebuilding and culture is the so-called peace movement activities. If, as in the case of many peace movements, we start from the assumption that war itself is an evil and peace can be reached only when no one tries to glorify the cause of war, then, cultural activities such as the drama performance abroad by Japanese university students on anti-war and anti-nuclear weapon causes should, under such an assumption, be more encouraged. This brings to focus a more general question as to whether the peacebuilding process itself should be freed from the promotional campaign for political ideologies, as the difference of ideologies has traditionally been one of the major causes of war.

On the Roles of Cultural Exchange Activities in the Peacebuilding Process

Kenichiro Hirano

This expert meeting and symposium are particularly concerned with the development of tension and conflict in various regions around the world, an issue that threatens human peace and security. The process from tension short of confrontation to confrontation, to fighting and back to peace building can be fundamentally seen as a concern of the two parties involved in the conflict. A third party may intervene from outside to try and help the two parties resolve the problem and bring about peace. This role is usually taken by NGOs, governments, public and private organizations from individual nations and international bodies. Various “cultural initiatives” are employed during such intervention. This meeting is interested in finding out what kind of cultural initiatives are needed to settle disputes and bring about peace. Let me just add that I use the term “intervention” with no negative implications in my speech. I do not think I need remind you that since the end of the Cold War, intervention has become a tool in the resolution of domestic disputes in international relations.

The process of conflict begins with confrontation and ends with peace building. Here I will divide this process into a number of stages, which are hopefully applicable in general as well, and examine what kind of cultural initiatives the intervening third party should take at each stage, as well as the characteristics of those initiatives.

In its interim report, “The role of cultural initiatives for peace,” a joint study group of Aoyama Gakuin University Joint Research Institute for International Peace and Culture says that the peace building process consists of four stages - (1) conflict prevention, (2) during conflict, (3) after conflict and (4) post-conflict reconstruction. I would like to change this slightly. With knowledgeable assistance from Ms. Hiroko Inoue, who is a postgraduate student at Waseda University’s Graduate School of Political Science, and studying the conflict in East Timor and the international intervention employed there, I propose that we shall look at the peace building process in four stages – (1) pre-conflict (confrontation), (2) during conflict, (3) end of conflict, and (4) post-conflict reconstruction.

As you see, I have slightly changed the way I refer to the four stages. I do so, because I want to look again at the concept of conflict prevention from a broader and longer perspective. It is said that cultural exchange, international exchange and international cooperation are projects that take 50 to 100 years to succeed. Some might say that one cannot talk about culture or conduct cultural activities in absence of security. This claim might be right. However, long-term prevention of conflict is the true potential of culture. This idea remains true today. Those who want to apply culture to the resolution of conflicts and participate in peace building should be reminded of this. Although “cultural initiatives” work effectively in the short term conflict resolution and peace building, we should not give it too much attention, for we may end up forgetting the importance of cultural exchange and international cooperation, which are effective in long-term conflict prevention.

Now, before the start of conflict (stage 1), the aim of the parties involved in the conflict and outside parties concerned with it is to eliminate confrontation or at least to make it harmless. “Cultural initiatives” are necessary to achieve this aim, but what are the features of such initiatives? From a cultural perspective, confrontation is understood as “cultural confrontation” based on differences in cultures. One cause of confrontation between two ethnic groups that are supposed to be one nation is difficulty in accepting each other’s culture. It takes a long time to build “culture” as one nation, and it also requires people themselves to engage in it. If a third intervening party forces its own culture upon the conflicting parties, the situation will only worsen.

Once the two parties have begun to notice cultural differences between themselves, and politicians use it to their advantage, it is already too difficult to eliminate their confrontation and bring them back to their original condition. All we can do here is to make the situation less dangerous. And to that end, the third party can help them understand each other’s culture. This encourages them to deepen their understanding of culture in general. For that purpose, the introduction of another culture may be an effective “cultural initiative.” This will enable everyone involved to understand not only themselves but also others and, although both sides still have difficulty in uniting, this will encourage them to do their best to co-exist and live together in peace.

At the stage where two parties have already started to fight (stage 2), the third party in the first place must find ways to alleviate the shocks caused by conflicts on the people. We have the reports of attempts at “cultural initiatives” by which to heal psychological trauma. It is also said that sufferers’ knowing that outside parties are worried and concerned about their situation can have healing effects.

The world should not ignore this situation. Measures should be taken immediately not to let the conflict go on for a long time and a third party must intervene to find ways to stop fighting. What kind of cultural initiatives should be applied here? It is important to let the concerned parties realize that they once had cultures that were effective in eliminating and settling disputes, rather than a culture of conflict, and the third party can help them understand this. It is also important for the third party to present the vision of a new culture for the future once the conflict is over.

At the end of the conflict (stage 3), all-out efforts should be made to settle the disputes and prevent the recurrence of conflict. It is at this stage that it is necessary to build trust between the two parties. And it is possible, if they work together as they once did, to build a new society for themselves. At this point, the third party can let them know through various cultural activities that it is possible to recover their rich cultures with some hard work. We should try our best to help children laugh again and enjoy life.

During the recovery period (stage 4), culture is no doubt very important to restore a safe and peaceful society. There must be programs and plans to overcome cultural disagreements

between the parties concerned, and the third party can join them by carrying out its own cultural activities. Many examples of such actions can be referred to. Here, I would like to contemplate on what such actions should be based.

Logically speaking, there are two routes to restoration in conflict-torn areas - to return to the original state and to build a new society. Areas that have experienced strong hostilities and fierce fighting are unable to return to the way they used to be. So, the issue becomes what kind of society they will be able to build and how. Nonetheless, recovery to the original state should still be a better option if people want to rebuild their safe society based on their own culture. I would like to come back to this point later in my presentation.

To overcome cultural confrontation, the process from confrontation to conflict first needs to be reexamined and reflected upon from a cultural perspective. In other words, at this stage the parties involved still need to try to understand each other's culture. It may also be necessary to conduct a socio-engineering type analysis to determine which cultural elements should be excluded and which ones should be encouraged to grow for the future. I believe that the third party can be of assistance in such endeavors.

Now, generally speaking, forms a new society can take in recovery will be amalgamation, integration, isolation, separation and division of the two parties that composed the original society. Amalgamation, being the original state completely restored, is not only impossible, but would be a step backward in conflict resolution. The same would be true if a third party were to intervene and try to create a new society based on its own model. On the other hand, division is the end result of all efforts failing at conflict resolution, yet it is a possible form the post-conflict society can take. Needless to say, restoration efforts must also be made for each of the divided societies in the way that is being examined here.

I cannot clearly explain the difference between isolation and separation. Perhaps, separation is a structure in which the two sides are completely separated by political and geographical lines, while isolation is partial separation. There may be some cases in which it becomes necessary to take measures for isolation in cultural aspects.

As far as a new society's cohesion is concerned, integration is the most preferable form. However, if it is done too quickly with too much leaning to one of the conflicting parties, a politically one-sided situation will result and trigger a return to violence, rendering efforts useless. If the third party dominates the procedure and forces integration based on its own new model, the result will be the same. In this case, there will be even stronger opposition and resistance. Cultural integration, if done forcefully, could bring about the same result. Thus, we should not force any culture upon the parties involved because they will most certainly resist and go back to violence. This is what we should be most careful in our cultural approach and this is what I most want to emphasize in this panel discussion.

I should say that a society on the recovery phase is perhaps most likely structured in

a combination of integration and isolation. Integration and isolation are two opposing structures. How we can effectively combine these two forms is the final question. We can think of two ways of combining them; one is a spatial combination of isolating confronting elements in some areas, while integrating others in other areas, and the other is a temporal combination of gradually moving from isolation to integration. And, as you know, culture is most dexterous at these two combinations.

It is their own familiar culture that assures people’s security and identity. It is true that culture often includes negative elements that ignited confrontation and disputes and “evil” elements that should be removed to build a new society. But, since people’s long-cherished cultures exist in many parts of society closer to them, those cultures should be isolated for some time and then brought forward to be effectively utilized. In this way, the society can be partly restored to its original state. If people can respect each other’s culture and live together in a multicultural environment, then they can be sure that their restored society will keep on.

However, this is not all that there is to social restoration at the end of a conflict. Efforts must be made toward integration on all levels in the new society. While democratization and elections are institutions essential to social integration, they can provide a newly integrated culture that gives people something more to live for. By working together, people create such new culture, and by mixing themselves with different cultures and collaborating, they can produce a completely new (third) culture. The combination of spatial and temporal isolation with integration is achieved by people living together, working together and creating together. By providing appropriate outside assistance and support for such activities, third parties can fulfill their responsibility to intervene “correctly” in conflict zones for peacebuilding.

The peacebuilding process and the role of culture exchange (comparative table)

【Peacebuilding Process】	① Pre-war (confrontation)	② During war	③ War end	④ Recovery
【Aim of intervention】	- Resolve/eliminate confrontation	- Ease the impacts of war	- Reconciliation	- Reconstruct the area: return it to its original state or build a new society
【Role of cultural intervention】	- Eliminate cultural confrontation - Promote cultural understanding	- Mend psychological wounds - Convey global concerns - Show the vision of a new post-war culture	- Build trust - Revive original rich culture	- Verify the war process → Understand each other’s culture - Integration and isolation: Spatial/Temporal combination
【Cultural relationship form】	- Living together →		- Working together →	
				-Multicultural Coexistence -Working together -Creating together

Thoughts on “Fostering Peace through Cultural Initiatives”

Megumi Nishikawa

Globalization is increasing the significance of art and culture. By nature, they transcend national boundaries and function as a common language. During the Cold War, however, they did not fulfill that role since the world was divided politically and economically, and national borders were virtually impossible to break down. The end of the Cold War has led to the dissolution of those borders, and the increasing role of art and culture as a sort of lingua franca.

Nowadays various citizens' groups including NGOs are engaged in support activities in unstable areas, utilizing art and culture as a medium. Political and economic aid generally helps restore order, improve living environments and support the lives of local people materially. Cultural and artistic activities provide mental and psychological support, build up trust and offer a beacon of hope. The former could be considered an external or physical approach, and the latter, internal or psychological.

During Cold War regional conflicts, it was thought that when order was restored and proper living environments provided, people would regain hope and be willing to work toward reconstruction. And indeed, citizens concentrated efforts on external elements such as restoring order and developing infrastructures. Nevertheless, observations on post-Cold War regional conflicts in Cambodia, Yugoslavia, Rwanda, East Timor, and Afghanistan have revealed that even if the minimum living standard is ensured and immediate dangers are removed, true stability cannot be obtained as long as people's hearts remain empty.

Ethnic conflicts and civil wars leave deep scars in peoples' hearts, and they cannot be healed easily. Those people might appear to be leading normal lives on the surface; yet, they are tormented by negative emotions like bitterness, regret, desire for revenge, emptiness, and a sense of stagnation. Such feelings create an attitude of living only for the moment, a lack of public spirit and indifference to society, which in turn has a negative impact on reconstruction of local communities. No political or economic measure will bear fruit if people are unable to keep a positive frame of mind. In this context, we can say that the post-Cold War era is the time to bring peace to people's hearts.

Cultural and artistic activities are believed to heal emotional scars, establish trust among community members and give hope because those activities appeal to our feelings and emotions. Through such activities, a sense of global unity is fostered. Those striving to support others through this type of activity and the beneficiaries find a common cause.

This being so, what should be taken into consideration when considering cultural and artistic approaches in unstable regions? I believe it is important to be there for people in need, and think and speak from their perspective. People in disputed or unstable areas are left with

complicated feelings. Intrusively telling such people what to do could have an adverse impact on their minds.

Last year I went to northern Thailand along the borders of Myanmar and Laos to examine a rural development program. Dubbed the Doitong Project, this long-running program has since 1987 been encouraging the minority hilltribe people who had been growing opium to change crops, and has eradicated opium cultivation. Mr. Kun Chai, the director of the Meifalung Foundation running the project, also carried out opium eradication campaigns in Myanmar, Afghanistan and Indonesia in 2002 in an attempt to “share the success of Doitong with other countries”. He has been invited to opium eradication conferences held by the United Nations Office on Drugs and Crime many times to introduce his endeavors.

I asked him in detail how he went about dealing with the hilltribe people. He said, “The purpose of the project was rural development. But what we actually had to work on was not infrastructure but psychology, in other words how to bond with the local people.” The way he built trust with people who had viewed the central government with distrust, will be relevant to the cultural and artistic approach we are going to take, so let me discuss it here. His approach consists of three pillars: “prioritize local communities;” “local procurement” and “flexibility”.

The first principle means to follow the customs and traditions of a given country or region and listen to what people are really hoping for. We have to listen to the other party rather than insisting on our own views. Furthermore, it is important to respect their religious devotion and local customs even if they appear backward to outsiders. We must avoid forcing existing support packages or our ideas on local people and grasp their needs and feelings so that we can build up support together.

The second principle means to make efforts to effectively use local resources and create added value. It is necessary to procure local resources, devise a way of using them effectively, utilize them, give advice on resource utilization and create something new. This enables people in the region to supply their own needs when engaged in cultural and artistic activities in the future. Otherwise, our efforts will come to nothing since they will not be able to do anything without outside support.

The third principle is flexibility. When we are on site, things may not go as we have planned in advance. In such a situation, we should not cling to the original plan. We must have courage to flexibly respond to a variety of circumstances. These three principles led Mr. Kun Chai’s Doitong Project to success.

In a way, taking cultural and artistic initiatives in unstable regions can be seen as cross-cultural communication which involves integrating our own thoughts, methods and cultural approaches into a local culture and winning people’s sympathies. It will be a great opportunity to compare our own culture with others and have another look at it from a

broader perspective. A cultural and artistic initiative is not a dichotomy between a giver and a beneficiary. Rather, it is a win-win approach that also benefits the giver. I hope that Japanese people will be more enthusiastic about taking part in these types of activities and that the Japan Foundation will facilitate them.

Raising Three Fundamental Issues

Yasushi Watanabe

As a cultural anthropologist, I am inspired by two words: “peace” and “culture.” However, these very same words put me on my guard.

1. On “Peace”

“Yanomami – Life in the Depths of the Primitive Amazon Forest” is a special program aired by NHK last month. To produce it, NHK negotiated tenaciously with the Brazilian government and tribe elders for nearly ten years and was finally allowed to be the first television station to stay with the tribe for 150 days. The program started with a shocking scene: A newborn baby is buried in a termite nest and burned while being devoured by termites because his or her fourteen-year-old mother decided to send the baby back to heaven as a holy spirit instead of raising him or her as a human being. The tribe is constantly in a state of war due to intense internal conflicts, so subjection of women is still prevalent. Yanomami means “human being.” It is striking that the Yanomami people refer to the TV crew as non-yanomami, or subhuman.

What does “peace” denote to the Yanomami people? To what extent can we accept their concept of peace as what we deem peaceful? We value human rights, freedom and democracy, but we should note that political philosopher Isaiah Berlin warned against adverse effects of hastily pursuing the ideal in a lecture titled “The Pursuit of the Ideal” in 1987. How far can we push our relativism and universalism?

Issue 1: When are we allowed to exercise our right and responsibility to foster peace through cultural initiatives? What is the basis of the legitimacy of our action? How should we select and prioritize whom to give a helping hand?

2. On “Culture”

Favorable outcomes of globalization are the ubiquity of industrial markets and information, compression of time and space, and relativity of nation-states. Nationalistic expressions such as “Made in Germany” and “Made in Japan” do not reflect today’s transnational, hybrid production processes. Probably, we have finally come to be able to talk about mankind for the first time. Such circumstances should be appreciated, and culture can be an important medium to this end.

In doing so, we must well consider to what extent mankind is universal – namely, whether the concept includes an idea that “yanomami” means “human beings.”

Furthermore, people tend to react to this kind of rapid change in circumstances by trying to

protect and conserve certain cultures like nationalism and fundamentalism as the essential or the primordial. Conflicts and wars do not arise from cultural differences. Rather, in many cases, cultural differences are simplified and rooted in society through failure of a government or an industrial market and used as an excuse for war. Culture may be abused as a barrier to peace rather than properly used as a medium for peace.

Issue 2: The role of Fostering Peace through Cultural Initiatives is to make people aware that various social issues we face, such as conflicts and poverty, should not be attributed to cultural differences – in other words, to guide people not to use culture as a scapegoat. To be more precise, our goal is to reduce hostility and recover self-esteem in society. To eradicate social problems, overcoming failure of a government or an industrial market is a must, and one should not place too much hope in cultural initiatives.

3. The Role of Cultural Organizations.

The benefit of Fostering Peace through Cultural Initiatives is limited to a certain nation or group of people as a matter of course. We need to develop measures to raise awareness explained in Issue 2 among the public, especially policy makers, opinion leaders and gatekeepers. We must keep firmly in mind that right judgments and policies cannot be made from wrong understanding.

It is an obligation of government-affiliated cultural organizations to consider and pursue national interest. As a result of the recent globalization, a nation's benefit overlaps with other public interests for which we should strive such as those of civil society, community coalition and international society, and thus national interest and international interest are often inseparable. That is, international interest is included in national interest. If culture is manipulated in the narrow-minded and hasty pursuit of national interest, it will likely serve as a barrier to peace rather than a medium. Issue 1 was raised to avoid such a situation.

Generally speaking, Japan's cultural programs appear to focus on extensively improving policy environment and interaction environment, and are not seen as direct links to diplomatic strategies. Therefore, discourses to convey the unique characteristics of Japanese mentality, traditions and culture come first, which I think is very Japanese. I have heard that the Goethe Institute clearly distinguished "presenting culture from Germany" and "presenting German culture" and that the former was adopted as a guideline to accommodate cultural diversification (transnationalization or heterogeneity). I would like to support this stance.

It will be necessary to seek ways to deter and alleviate the negative impact of Fostering Peace through Cultural Initiatives on regions where our project activities are carried out. We should collect a wide variety of regional examples including areas where cultural heterogeneity through migration and international marriage is frequent, where nation building, such as establishing a common language and promoting education, is a pressing need, where freedom of religion and speech is not ensured, where poverty is rampant and

economic foundation is sacrificed for culture, and where cultural conservatism is profound. Furthermore, it is essential to examine real situations of such regions and possible impacts of Fostering Peace through Cultural Initiatives.

Issue 3: How can we gain understanding and support from citizens and political leaders for our program “Fostering Peace through Cultural Initiatives”?

Speech on May 15th

Dr. Hans-Georg Knopp

We are all agreed that to support peace processes in the world, and if necessary even to initiate them by using cultural initiatives is a good, necessary and important thing to do. But it is also absolutely appropriate always to remain realistic and to keep in view the limitations with all cultural involvements. Without an appropriate political framework, peace initiatives can run into the sand. And allowing for the way that the modern world is currently organised, economic relationships are often automatically driven forward more than cultural ones. That is the way it is. But there are also reasons for confidently pointing out the special importance of cultural initiatives and what they alone can create.

The cultural framework allows people to come together without political issues or economic interests being paramount. Within the cultural framework, it is possible to create something which is independent of the ups and downs of political developments. It is about creating an atmosphere of confidence. An atmosphere in which critical questions are possible. And one in which the natural horizon represented by a person's own cultural traditions can be left behind, at least on an experimental basis.

This last point is especially important. I am absolutely convinced that cultural exchange always provides an opportunity to learn more about ourselves. There is the opportunity to analyse things that have previously been regarded as self-evident.

That is sometimes a process which is not entirely straightforward, but it is still a necessary one, and essential for the self-identification of a society in a world which is becoming increasingly complex and bewildering.

It is a pre-requisite for the high level of empathy, which must be contributed to the bringing together of cultures and of states, i.e. the ability to think oneself into initially unfamiliar points of view and into global perspectives. Without this ability it would be very difficult to master the cultural challenges of the 21st century.

To acquire empathy is in my opinion a vital objective of cultural initiatives. The interesting thing is that obviously the better they succeed, the less they are associated with clear intentions. Openness between cultures cannot be created by command and also it cannot be simulated.

How is it to be done? I believe that can only be answered in the abstract with difficulty. It is necessary to examine quite objectively individual examples. In doing so, it is important to note that cultures are not in any way firmly fixed in defined blocks. My experience is that as soon as you actually become involved with cultures, you find points of contact, from which communication in dialogue form can be initiated.

Within the framework of this conference, as I see it, a whole series of remarkably successful examples have been presented.

For instance in 2004 I had the opportunity to fly to Kabul for a drama festival, in which Helena Wildmann's production of "Return to Sender" was performed.

I am very pleased that Helena Wildmann is attending this conference, and equally that Rita Sachse-Toussaint, Director of the Goethe-Institut in Kabul is here. With a certain amount of satisfaction, I was able to draw some conclusions from this drama festival in Afghanistan: that it was a good example of intercultural communication. It was an invaluable opportunity for exchanges, since at each performance an audience of around 600 Afghan people watched a play by German dramatist Bertold Brecht. It was also a good example of communication within Afghan society. The need of the audience within the protected environment of such a performance to express its feelings and its opinions was remarkable. And it was possible to gain a good impression of the differences within Afghan society, for instance the generational conflict among the younger and the older members of the audience.

In my experience every culture has gaps and openings, they also offer tie-ins for intercultural communication processes. With all of them the pre-condition is that protected spaces are provided where people's need to express themselves can freely unfold. Therefore for me such cultural initiatives represent two things: they include having sufficient self-confidence to react positively to the unfamiliar; and also to be able to take on board the differences, but equally to accept the opportunities that every unfamiliar culture offers for dialogue.

The objective is to expand these opportunities, and then to cultivate them on a sustained basis. Any kind of bouncing your attention from one current crisis region to the next can even turn out to be counter-productive.

I have been impressed by the great interest that has been devoted in Japan to the German attempts to achieve reconciliation with its former enemies from the wars of the 20th century. There have been in the Goethe Institute in Tokyo a wide variety of gratifyingly well-attended events, many held in co-operation with the Japan Foundation. At this point, I would like to express my gratitude for that.

Historical memories have long, very long lives, above all the historical memories of old wartime enemies, of what were indeed terrible, for many people, traumatic events. Dealing with such memories is an important objective for cultural initiatives. Between my country, Germany and our immediate neighbour, France there are many such cultural initiatives – and perhaps something can be learned from them.

There are over 2000 town-twinning agreements between German and French towns. Without even thinking of French cuisine or French fashion - French literature, French films fascinate very many people in Germany. On the other hand, French philosophers were often inspired

by German thinkers. There is now an international history book which is used for teaching purposes in both German and French schools – it is by the way a project which is to be warmly welcomed and that has led to interesting events being held here in the Goethe Institute in Tokyo.

Even when the situation is as satisfactory as it currently is between Germany and France, despite so many varied cultural initiatives, memories from wartime show themselves to be astonishingly long-lived; the past is still present today. This does not in any way mean that cultural initiatives have had no effect. Quite the contrary, it only demonstrates that it is possible to create in the memory a common awareness that nothing like that should ever happen again. And it also demonstrates that people cannot get enough of such cultural initiatives. If that is the case between Germany and France, where a state of peace has existed between the neighbouring states for more than sixty years - how much more validity then must this thought have in areas of the world where the memories of war are much more recent!

Or in colonial situations where European armies arrived with their aggressive superiority complex!

For me, the example of Germany and France demonstrates: even if only because of the long life-span of cultural conflicts, it is sensible to plan cultural initiatives designed to preserve peace on a very long-term basis. But because of the complexity and unpredictability of cultural conflicts, it is necessary to draw conclusions – and both the Japan Foundation and the Goethe Institute are already doing that. Cultural initiatives should be planned transparently with a high degree of willingness to take into account the relevant partner's point of view. And it is necessary always to be ready for surprises.

With short-termism, a demand for fast results, it is impossible to build up the confidence which is required in order to be able to handle in a judicious way unavoidable surprises from cultural exchanges.

The work that has been described at this conference shows: what is needed is a sensitivity to know which artists in which cultures should be able to provide something like an initial spark.

It is necessary to have a feeling for those discussions in another country which really have something to contribute. That cannot be planned. And it is absolutely certain that there is no universal formula which will work equally well in all the countries of the world. To a certain extent it is possible to say that it is not only those things that are realised as a result of cultural initiatives which are art or culture. Even the conception of cultural initiatives is itself something like an art-form, or if this idea is regarded as too ambitious, then it can become a painstaking form of craftwork.

Finding ways of using this kind of craftwork is the task of such cultural facilitating institutions as the Japan Foundation and the Goethe-Institut. My experience is: know-how which takes a long time to develop is required, if cultural initiatives are to be successful. Experienced staff are needed. And a network of influential contacts and connections is needed. For the task of getting cultural initiatives off the ground, it is also important that everything that has to be arranged is put forward as necessary in the home country.

Such facilitation should not be regarded as too easy. Expectations should not be aroused that peace can be very quickly achieved through cultural initiatives. It is a feature of these initiatives that they are sometimes rather complicated and that the results are not immediately apparent.

Cultural exchange is comparable to a research process where the partners in the research look for appropriate ways of expressing the results. That is particularly of immense importance with cultural initiatives for creating peace.

They can in the end take on a similarity to overland exploration where the way forwards through unknown territory is trod with great caution. In English-speaking countries, there is a useful expression for this: we agree to disagree. It probably needs to be used frequently. The ability to take on board the positions of another party without giving up one's own position is one of the basic requirements for intercultural communication: with cultural initiatives in problem areas it can develop into a necessary art-form. Instead of looking for a consensus, dissent in the link-function should be expected. If you are successful, you are richly rewarded. It is especially through differences that people learn how to understand and express themselves better.

And there is something else that it is essential not to be silent about when communicating the importance of cultural initiatives. Cultural exchange costs money. Many powerful people in my country therefore regard it as a delightful luxury – something that you do if some money is left over.

And something that goes as a nice adjunct with the economic and political relationships between two countries, but does not take on anything like the same degree of urgency or importance as apply to the economy or to politics.

I would like to look at it rather differently. For me, cultural exchange is in its own right one of the pillars on which relationships between countries rest. It is not a secondary programme. It is rather an independent form of communication between societies, which makes processes possible which would barely exist, if at all, should there not be the possibility to invest in cultural exchange.

As things stand, there is plenty of need for such investment. By no means all of the international and intercultural relationships operate so satisfactorily as those between

Germany and Japan: sadly, quite the contrary. If we look around the world, we must note that in many areas, we are only now engaged in actually setting up the foundations for a fruitful intercultural exchange. Much building work still has to be done. And in some regions of the world, there are grounds for concern that the work will not be at all easy. Occasionally, there is the impression that great efforts are required to prevent existing contacts from being totally destroyed.

It is still too early to draw a conclusion from this conference. But it is already clear to me now how important it is to exchange views on all these matters. In fact, for my organisation, the question of how, using cultural initiatives, peaceable relationships between different societies can be constructed and supported is very important.

And I greatly value the opportunity to be able to visit the Japan Foundation here for a general exchange of experience - and also the varied, and as I see it, successful work which our organisations undertake on a regular basis. Discussions between people, direct exchange, is I believe very important in the process of intercultural dialogue. It is impossible to replace person-to-person exchanges with anything else. To some extent, one could say: to make them possible between equals is the essence of our work.

The frequently referred to concept of the battle of the cultures is inappropriate because it is too crude to reflect the real challenge.

In the final analysis, it is certainly not cultures that communicate, but rather individual people, one with another. Intercultural communication stands for the idea that individuals can make creative exchanges in a situation where the cultural backgrounds that have moulded them differ widely. What is required for that purpose is constructive contacts with cultural diversity and with different value systems.

Please allow me to observe: I can already say from my standpoint that this conference is a good example of creative exchange. It is not only in crisis-ridden regions, but also where there is a state of peace – as between our two countries – that such an exchange is important. For this reason, I would like to express my sincere thanks to you for having us here as your guests in Tokyo. It is a great honour for us and very encouraging to have such an important partner in the developing of cultural initiatives, which can advance peace a little in this world.

When Everything Else Fails - Possible Roles of the Arts in Conflict Resolution in the Middle East

Fareed C. Majari

So far, Western diplomacy in the Middle East has proven incapable of providing a viable solution to the conflict between Israel and its neighbors. In response to this failure, players in the field of international cultural cooperation have found themselves confronted with rising expectations in regards to their potential to bring about dialogue and détente between the entrenched parties. In this personal account, I will illustrate the Goethe-Institut's experience in trying to fill this new role.

In order to travel from Jordan to the Palestinian Territories, one has to cross the Allenby Bridge, a border crossing manned by both the Jordanian and Israeli Authorities. The bridge is located in the desert not far from the northern shore of the Dead Sea. It is a forlorn place. Here, the Jordan River is a pitiful trickle, the desert is sizzling hot and the whole place is infested with swarms of flies reminiscent of those that beset the Pharaoh. What is worse, the border crossing is notorious for the unequal treatment received by foreigners and Palestinians, for whom there is a special terminal. In May 2008, by invitation of the Goethe-Institut, German choreographer Henrietta Horn and her dance company toured the Middle East. After performances in Beirut, Damascus and Amman, the dancers planned to continue on to Ramallah. I met Henrietta and her dancers at the bridge in order to bring them to Ramallah. When I arrived, it turned out that something had gone wrong. One of the dancers, a Korean, had been replaced by her Taiwanese colleague. Unfortunately, somewhere along the lines of communication, this piece of information had been lost. Taiwanese citizens need a visa in order to enter Israel. The chances that the following night's performance would take place as planned were slim. The Israeli Army and military police that staff the border crossing do not have a reputation for making the life of those wishing to visit Palestine any easier. In the middle of the terminal, under the eyes of travelers and soldiers alike, Hsuan Cheng who, to cap it all, was one of the lead dancers, began to teach another dancer how to dance her part. At this point, we were all utterly convinced that she would be sent straight back to Jordan. However, to everyone's surprise, after ten hours of waiting and rehearsal on our side and intensive communication with their superiors on the Israeli side, a young Israeli lieutenant broke the news that we all could pass and wished us a pleasant stay.

In the summer of 2003, I invited German conceptual artist Thomas Kilpper to conduct a sculpture workshop in the West Bank city of Jenin. The situation was very tense then. It was shortly after the second Intifada and the Israeli "Operation Defensive Shield" of April 2002, during which the Jenin refugee camp was completely razed. The number of casualties is disputed; for their part, Palestinians speak of a massacre.

When Thomas Kilpper arrived in Jenin, Israeli tanks were raiding the city almost every night. Together with youths from the city and the refugee camp, Thomas built a larger-

than-life scrap-metal horse. The raw material for this sculpture was taken from the rubble of homes, wrecked cars and the twisted ruins of the local muqata'a (headquarter of the local government). The idea was to breathe new life into the destroyed material. Furthermore, the horse is a symbol of mobility and strength in Arab culture.

On one side of the horse's body, there is a piece of white sheet metal with the word 'as'af (ambulance). This sheet had been salvaged from an ambulance of the Red Crescent in which a local emergency doctor had died after it had been hit by an Israeli rocket grenade. When completed, the horse was towed through the streets of Jenin. The young artists proudly paraded their



Thomas Kilpper: The Jenin Horse, 2003

work, accompanied by an ambulance and riders on Arabian thoroughbreds. For the final part of his project, Kilpper toured The Jenin Horse through the West Bank, to Ramallah and back again to Jenin. The workshop participants insisted on joining the artist on this tour. For them, Ramallah emanated the spirit of a cosmopolitan town. The five-meter high sculpture was towed through the West Bank by a farmer's tractor. The 90 km tour took a total of 11 hours because the horse's progress was delayed many times by numerous Israeli checkpoints and roadblocks. Eventually, the young Israeli conscript soldiers let the troupe pass freely, dismissing any fears it might be a "Trojan horse." To this day, the horse stands tall in a square in Jenin.¹ Ironically, the sculpture got its first gunshot holes not from the Israeli army but from the leader of the Al-Aqsa brigades in Jenin whose stronghold the camp is and who mistook it for one of the many "peace projects." Nobody was hurt and the commander later apologized to the artist.

What can we "learn" from these two stories? Does art bring out the human side in us? Can art help to foster dialogue and détente between entrenched foes? Doesn't it sound too good to be true?

I would like to return to yesterday's debate and particularly to Ambassador Ogoura's remark that at least in foreign cultural politics, we ought to bid l'art pour l'art farewell. In my view, we must be careful not to use the arts as political or diplomatic tools. Some artists who intend to help the peace process run this risk. Artists have always taken a political stance and "engaging art" has always existed. Many if not most works of art of lasting significance take sides and show the suffering that results from injustice and occupation or condemn the horrors of war.



Francisco de Goya: El 3 de Mayo de 1808 en Madrid

Fortunately, art has not become less political in recent years. Artistic reflections and concepts aim more and more to enlarge their influence in society. Research based art now has taken over terrains that had previously been the sole domain of journalism, social science and political practice. An example is German artist Lucas Einsele's project "The Many Moments of an M85 - Zenon's Arrow Retraced". This work in

progress traces an imaginative trajectory of the Israeli cluster bomb M 85 which was used in the 2006 Lebanon war. The in the core of the project are photographs of people whose lives were touched by the bomb: The farmer, the surgeon, the demining expert, the engineer, the factory worker, the politician and the soldier. "They all do their best, from their perspective. War is not the result of obvious evil but of personal, commercial, political, societal interests. It is not only the result of general interests, but of individual interests. The artist intends to change our conception, our actions, and, at least symbolically the (seemingly) inevitable detonation of M85. By zooming into the parts and dimensions of the trajectory, by looking at it, in every detail, we might find - and see, and feel - the moments when Zenon's arrow stands still on its long way, when it becomes visible as that what it is: Another cruel and futile product of man." ²

It was Tina Clausmeyer, who was an intern at the Goethe-Institut in Ramallah and whose master thesis is a case study of the Goethe-Institut in the Palestinian Territories, who drew my attention to the work of Nicolas Bourriaud. This art critic and curator defines relational art as "an art that takes as its theoretical horizon the realm of human interactions and its social context, rather than the assertion of an independent and private symbolic space" and which "points to a radical upheaval of the aesthetic, cultural and political goals introduced by modern art." ³ This kind of art produces relationships through personal encounters with symbols, forms, actions, and objects by which meaning is elaborated collectively rather than in the privatized space of individual consumption.⁴ Our horse project in Jenin clearly matches Bourriaud's definition. It helped to strengthen social cohesion in a community that is troubled by tensions between the town of Jenin and the nearby refugee camp. The Goethe-Institut and its local partners acted as a "matchmaker and mediator" and administered the project in a bottom-up approach.⁵ The summer with the German artist offered the participants activities in an economically and culturally deprived city. We hope that they encountered hitherto unknown ways of social interaction, alternative role models and perspectives rather than the ideal of dying as a martyr, a very prominent ideal at this time. But the effect of cultural programs is almost impossible to gauge.

Art has always dealt with conflicts. But how can art be conducive to conflict resolution and reconciliation? You will find abundant literature on art and conflict resolution related to social work (e.g., projects with young delinquents or for violence-ridden neighborhoods), but not much on the resolution of conflicts between peoples or states. Art projects may work well to foster reconciliation after a conflict has been resolved politically or militarily. However, would anyone seriously consider art as a remedy to war or civil war? Was William Kelly, a community art practitioner from Australia, exaggerating when he claimed that “a painting can never stop a bullet but [...] a painting, a piece of writing, a piece of theatre can stop one from being fired”?⁶

The Goethe Institutes in the Palestinian Territories and Israel (and sometimes Lebanon and Syria) are frequently approached by artists or activists who propose trilateral (German - Israeli - Palestinian) art projects that bring artists from both sides together in order to overcome prejudices and thus contribute to mutual understanding and peace. These people find themselves in a predicament. On the one hand, they intend to bridge fault lines and divides, to reconcile and combat adversary images. On the other, what is needed in this geographical and political context is not rapprochement and convergence, but disengagement and separation. Even if one favors a one state solution (one state for Israelis and Palestinians, for Jews, Muslims and Christians), as do many artists and intellectuals on both sides, one has to accept that this is a long-term objective, which can only be accomplished through disengagement and a transitory, probably prolonged step in which two separate states exist side-by-side. A better understanding of the nature of the Palestinian-Israeli conflict and about the respective other is undeniably a desideratum. Political change inside Israel is crucial for a revival of the stalled peace negotiations, but this political change will not happen as long as ignorance and indifference prevails in the Israeli electorate.

Trilateral cultural initiatives look good from afar but are difficult to implement “on the ground”. They often come across as condescending to our Palestinian partners, who point out that the conflict is not primarily about getting to know each other better but about occupation. I was once asked, “Would you invite a burglar who just broke into your home and who is pointing a gun at you while he steals your belongings to sing a song with you?” Our Palestinian partners also question the Germans' legitimacy to act as arbitrators, vis-à-vis Germany's soft stance on Israel that has again been underscored by Chancellor Merkel's visit to Israel. Her unconditional support for Israel has been lambasted by Palestinians and critical Israelis alike. “It looks to me as if the Chancellor defines friendship as not intervening,” says Yossi Beilin, the leader of Israel's liberal Meretz Party and one of the architects of the Oslo accord. “That's not friendship. A real friend gets involved in the peace process.”⁷ Last but not least, direct contact between Palestinians and Israelis is technically and legally impossible. With the exception of those with Israeli or Jerusalem I.D. papers, Palestinians cannot travel to Israel or East Jerusalem. Israeli citizens are not legally allowed to visit the West Bank or Gaza and Palestinian institutions, such as universities are restricted from cooperating with Israeli institutions by a legally binding boycott on Israel. Contact between Israeli citizens and citizens of Arab countries like Lebanon or Syria is also prohibited by the

laws of these countries.

Despite all the obstacles, the “West-Eastern Divan” is a youth orchestra in which musicians from several countries of the Middle East play together. This cooperation has been made possible by diplomatic passports provided by the Spanish government. Egyptians, Israelis, Jordanians, Lebanese, Palestinians and Syrians all play in this remarkable orchestra. The orchestra was founded in Weimar in 1999 by the Argentine-Israeli conductor and pianist Daniel Barenboim and the late Palestinian-American academic Edward Said. The ensemble was named after an anthology of poems by Johann Wolfgang von Goethe. Barenboim was awarded the Goethe Medal in 2007 for fostering an understanding between the Israelis and Palestinians. “The Divan is not a love story, and it is not a peace story,” Barenboim said, “It has very flatteringly been described as a project for peace. It isn't. It's not going to bring peace, whether you play well or not so well. The Divan was conceived as a project against ignorance; [...] it is absolutely essential for people to get to know the other, to understand what the other thinks and feels, without necessarily agreeing with it. I'm not trying to convert the Arab members of the Divan to the Israeli point of view, and I'm not trying to convince the Israelis to the Arab point of view.”⁸ Because of his artistic reputation the “maestro,” as he is respectfully called in Ramallah, gets away with something for what others would be called to order. It must also be noted that there are voices in Palestine that demand a boycott of his concerts and accuse his Palestinian partners of collaboration and appeasement. Likewise, he was harshly criticized in Israel, firstly for defying an unwritten ban and conducting works of Richard Wagner with the Berlin Philharmonic Orchestra, and secondly for his work with the Divan Orchestra and his criticism of the occupation.

We have already slipped into politics, and a very brief description of the conflict between Israel and the Palestinians is warranted at this point. Primarily, this is a conflict about land and the scarce water resources, which come mostly from aquifers located under the West Bank. As is often the case, material interests are blended in with ideologies and religion. For Israel, security of its citizens is a major issue. Currently, the Israeli government under Prime Minister Benjamin Netanyahu, who took office in March 2009, pursues a policy of rolling back all previous accords and a policy of settlement expansions in the West Bank and East-Jerusalem. The future of Jerusalem (Al-Quds) is a touchstone for the sustainability of any peace plan and the policy of “Judaisation” of this city leaves one fearing for the worst. This hawkish approach is also underscored by the tough measures against those who were involved in the preparation of the 2009 edition of the Arab Capital of Culture Program, which declared Jerusalem the Arab cultural capital and which is organized by UNESCO and the Arab League and is designed to promote and celebrate Arab culture and encourage cooperation in the Arab world.

In my view, the Palestinian Authority has fulfilled all its obligations without getting anything in return. There has been a lull in armed attacks from the West Bank on Israel for a couple of years now. Palestinian politicians have made painful concessions while at the same time risking their own political survival. Strongholds of armed resistance, such as Jenin, are

now peaceful and controlled by a European trained police force that is widely lauded for its enforcement of the law.

Gaza, however, is a different story. The Gaza war, which resulted in a large number of civilian casualties, could have been avoided. While I believe HAMAS deliberately provoked a war, the consequences of which it clearly anticipated, and moreover took the civilian population hostage in pursuit of its irresponsible politics, Israel's response to randomly and inaccurately fired Qassam missiles was completely out of proportion. As Gideon Levy of the Israeli newspaper Haaretz commented, Operation Cast Lead was a “war deluxe” [in which a] large, broad army fought against a helpless population and a weak and ragged organization that fled the conflict zone and barely put up a fight.⁹

While HAMAS's role in provoking an armed Israeli response should be condemned, it requires some nerve to suggest that the rocket fire from Gaza can serve as a justification for further annexation of the West Bank and East Jerusalem.

Since June 2002, a wall - or a border fence - has been under construction along the line dividing the heartland of Israel and the Palestinian Territories in the West Bank. This wall is even higher and more monstrous than the Berlin Wall. In Israeli politics, this construction has been justified as a means to prevent assassins from infiltrating into Israel. Israelis most commonly refer to the barrier as the “separation fence”, “security fence” or “anti-terrorist fence”. Palestinians most commonly call it “the barrier” in Arabic جدار (jidar = wall) or invoke the English “Apartheid Wall”. In a 2004 ruling, the International Court of Justice declared the construction of the wall “contrary to international law”. Critics of this border installation claim that it was purposefully designed to incorporate Israeli settlements into Israel, with the resulting de facto annexation of parts of the West Bank. For the Palestinian population, this boundary has painful consequences; families are separated, workers lose access to jobs in Israel and hence their livelihood, and children can no longer reach their schools. The border fence seems to be a part of a broader strategy aimed at establishing facts, which deprive any future Palestinian state of viability. A Palestinian state, yet to be established, would no longer have any outer boundaries nor be connected to the Gaza Strip.

In terms of public relations, the wall has not been a success. It has estranged many people, and it has inspired artists from all over the world. There is even a web site where one could order graffiti sprayed on the wall on one's behalf. In the last couple of years, the Goethe-Institut has been inundated with project proposals dealing with the wall.

In his User's Guide to Photographing the Separation-Barrier-Wall, Professor Meir Wigoder from the University of Tel Aviv describes the dilemma of such art works: “For many decades, artists and photographers have been exploring ways to subvert the picture-plane. They have chosen tactics of erasure to point out the allusive character



of the image.” In our example, numerous attempts have been made to de-materialize the Separation-Barrier-Wall: window frame perspectives have been drawn on it to show the view on the other side, which the wall has been hiding; hanging domestic wallpaper changed a section of the wall from a cold exterior to a warm interior; white paint has been coated on it to create a minimalist purified ground, which counters the opaqueness of the wall's concrete surface;



写真 Steve Sabella

graffiti attest to the dynamic gestures of brush strokes whose liveliness counters the deadly implications of the cold stone; artists have gathered beside the wall to hang their images of protest, thus turning it into an art gallery; films have been projected on it, attempting to turn the wall into a transparent cinema screen that transports the audience to the imaginary realms of other illusory spaces; and video activists have placed cameras on top of it, pointing the lenses in opposite directions and screening the views on both sides of the wall in order to render it transparent. All the creative attempts to de-materialize the wall, nonetheless, only reinforce its existence. The wall's surface is stronger than all the creative political gestures of defiance. The graffiti on the wall, reading “This Wall will Fall”, cannot exist without the surface-support of the wall.¹⁰

The art project “Challenging Walls” was launched along the separation wall and was manifested through a large-scale 60-meter photo installation and an international conference in July 2007. As the brainchild of Israeli and West-German born artist-photographers Ruthe Zuntz and Michael Reitz, “Challenging Walls” presented artistic statements by artists who have lived in many wall-divided environments, namely Germany, Cyprus, Northern Ireland and Israel/Palestine. The project was funded by institutions such as the European Commission, the Institute for Foreign Affairs (IFA) and the European Cultural Foundation. Partners in Israel were the Van Leer Institute, the Jerusalem Film Festival, and the Jerusalem Cinematheque. Despite the Palestinian embargo against Israel, Al Quds University supported the project and Palestinian photographer Steve Sabella contributed to it.

The photographs were projected on the wall that divides Jerusalem and the Palestinian town of Abu Dees. The event was carried out in coordination with the Israeli Border Police, so



participants were allowed to enter the security strip which is normally off-limits. A coach hired by the Goethe-Institut to bring visitors from Ramallah however was half empty. Many Palestinians I talked to were reluctant to join. They felt that their dignity was compromised by a project that pretended normality and

relied on third-party intervention (the international organizers) to secure Palestinians some hours of freedom of movement in their own land.

To commemorate the 20th anniversary of the fall of the Berlin Wall, the Goethe-Institut is currently sending plastic bricks to countries with a similar past or present situation: China, Cyprus, Israel, Korea, Mexico, the Palestinian Territories and Yemen. In these places, the bricks serve as a canvas for artists, intellectuals and young people to tackle the phenomenon of walls and fences. The symbolic “Journey of the Wall” will be part of a planned domino effect at the “Festival of Freedom” on November 9, 2009 at the Brandenburg Gate.¹¹ Students from the Faculty of Arts at Birzeit University near Ramallah will take part in this project. I have both reservations and afterthoughts regarding our project because it predetermines both form (the plastic bricks) and content (the wall phenomenon), thus giving the participating artists relatively little leeway for their own art. It reminds me of an art class at school in which students are given material to paint on. The project is symbolic and the plastic bricks represent the wall and the vision of a future without barriers. Political art tends to use symbols, and in Palestine images of the (often uprooted) olive tree, the *kūfiyyah* (traditional headdress typically worn by Arab men), and the wall are so abundant that I doubt anything artistically interesting can come out of using them. I cannot help suspecting that this project does nothing but give us a warm and fuzzy feeling and politicians the opportunity to celebrate their alleged role in tearing down the Berlin wall. Ironically, these are the same politicians who have always turned a blind eye on the prolonged occupation of Palestine (and the fence that separates Mexico and the USA where dozens of would-be immigrants perish every year). Walls and fences infringe upon human rights and should artistically be dealt with accordingly. Plastic walls never live up to the concrete walls they pretend to represent. An alternative to tumbling plastic bricks could have been the erection of an exact replica (made from real concrete and real steel) of the separation barrier and other still existing walls and fences exactly where the Berlin wall once stood. It would remind us that the responsibility for peace and human rights is universal and international and that politicians ought to demand they are torn down just as they did with the Berlin wall.

Which of the cultural initiatives I have mentioned have helped to foster peace? Obviously none, I would say, looking at the dire political situation in the Middle East. I am aware that the question is naïve because the impact of the arts in social and political processes is not measurable. Thomas Kilpper's *Al Hissan - The Jenin Horse*, which I mentioned at the beginning, addressed only Palestinian individuals, groups and stakeholders and did not attempt to include Israelis. We hope that it contributed to a civil society and strengthened forces that favor negotiations rather than armed struggle. The “wall projects” included artists and audiences from both sides of the wall but were criticized as patronizing. The most successful project so far clearly is the “West-Eastern Divan Orchestra”.¹²

I would argue that the only promising way cultural institutions can pull their weight is by fostering a liberal climate in their respective host countries. A society in which the arts flourish and are a vital part of public discourse is much less likely to adopt belligerent and

aggressive policies.

However, cultural initiatives cannot end injustice and occupation. They cannot relieve politicians of their duties. Particularly in the Middle East, Western governments must overcome their tendency to put their own *raison d'etat* in the foreground and to apply double standards. They must, if need be, call a spade a spade.

Fareed C. Majari

Since February 2009, Director of the Goethe-Institut in Lebanon. Previous posts: Director of the Goethe-Institut in the Palestinian Territories (2002 - 2009), Cultural Programs Coordinator at the Goethe-Institut in Moscow, Russian Federation, Project Manager and Software Developer at the Goethe-Institut's headquarters in Munich, Visiting Professor at the University of Connecticut. Teacher of German at the Goethe-Institut Munich, High School Teacher. Studies: Slavonic studies and English (Marburg and Coventry, U.K.), Film (Moscow)

- 1 For more information and pictures: <http://www.kilpper-projects.net/the-jenin-horse/gb/description.htm>
- 2 Lucas Einsele: "The Many Moments of an M85 - Zenon's Arrow Retraced", concept note, 2009
- 3 Bourriaud, Nicolas (2002) *Relational Aesthetics*, Dijon: Les presses du réel: p. 14
- 4 *ibid.*: 107ff.
- 5 Tina Clausmeyer: *Engaged Art' - How Can Artists Become Mediators in Conflict?* (unpublished)
- 6 William Kelly, "Acknowledgements", *Violence to Non-Violence: Individual Perspectives, Communal Voices*, An Anthology compiled by William Kelly with prints from The Peace Project, Harwood Academic Publishers, Craftsman House, Sydney, 1994, p.xvi.
- 7 Der Spiegel Online, Friday, November 20, 2009, <http://www.spiegel.de/international/world/0,1518,541892,00.html> (retrieved 03/04/2009)
- 8 Ed Vulliamy: "Bridging the Gap, Part Two", *The Guardian*, 13 July 2008 <http://www.guardian.co.uk/music/2008/jul/13/classicalmusicandopera.culture> (retrieved 03/04/2009)
- 9 Gideon Levy, *Haaretz*, 15 January 2009 (English edition)
- 10 Meir Wigoder: *A User's Guide to Photographing the Separation-Barrier-Wall* (lecture given in July 2007 at the conference "Challenging Walls" at the Van Leer Institute in Jerusalem)
- 11 <http://www.goethe.de/ges/prj/mar/lae/enindex.htm>
- 12 It should be noted that after this paper was presented and before it was printed a visit by Daniel Barenboim and his orchestra to Ramallah had to be cancelled because of criticism of his alleged support of Israel's war against Gaza.



添付資料 Appendix



参加者略歴 姓のアルファベット順 2009年5月現在

Introduction of Panelists (Alphabetical Order, as of May 2009)

クリストフ・バルトマン Christoph BARTMANN



ゲーテ・インスティトゥートのミュンヘン本部、文化情報部長である。文化情報部はゲーテ・インスティトゥートの世界中の人文科学、情報・図書館、文学・翻訳、映画、舞台・舞踊、視覚芸術、音楽に関するプログラムのコーディネーションを行う。これまでは1991-1995年にゲーテ・インスティトゥートが当時新たに設立したブラハ事務所の文学・人文科学部に勤務、1995-1999年に文学・人文科学部勤務、1999-2006年はコペンハーゲンの所長を務めた。デュッセルドルフ大学とウィーン大学にて歴史学とドイツ学を学び、ドイツ文学の博士号(Ph.D.)を保持している。

Dr. Christoph BARTMANN is the head of the 'Culture and Information' department in the Goethe-Institut's main office in Munich. His department coordinates the GI's worldwide programs in the fields of the humanities, information and libraries, literature and translation, film, theatre/dance, visual arts and music. He has been working for the GI in different places and positions, for example as head of the GI branch in Copenhagen (1999-2006) and as a staff member in the literature and humanities department (1995-1999). From 1991 to 1995 he worked in the language department of the then newly founded GI in Prague. Bartmann studied History and German Studies at the universities of Düsseldorf and Vienna and holds a Ph.D. in German literature.

福島 安紀子 Akiko FUKUSHIMA



国際交流基金特別研究員。青山学院大学国際交流研究センター研究員も兼務。1994年米国ジョージ・タウンズ大学高等国際問題研究大学院(SAIS)より修士号(国際関係論、国際経済学)。1997年大阪大学より博士号(国際公共政策)。1994年総合研究開発機構(NIRA)国際研究交流部主任研究員。2001年7月同機構主席研究員。2006年9月より現職。慶應義塾大学法科大学院非常勤講師(2006-2007)、カナダブリティッシュコロンビア大学客員教授(2002-2003)。その他、防衛施設中央審議会委員、防衛戦略研究会議委員、経済産業省APEC研究会委員、経済産業省産業構造審議会貿易協力部会委員等を兼務。日本国際政治学会、国連学会等所属。主な著作に「Japanese Foreign Policy: A Logic of Multilateralism」(英国マクミラン社、1999年)、『レキシコン：アジア太平洋安全保障対話』(日本経済評論社、2002年)。

Dr. Akiko FUKUSHIMA is a Senior Fellow at the Japan Foundation and Visiting Scholar of the Joint Research Institute for International Peace and Culture at Aoyama Gakuin University with a Ph.D. from Osaka University and M.A. from the Paul H. Nitze School of Advanced International Studies (SAIS), Johns Hopkins University. Her carrier includes Adjunct Professor of the Law School at Keio University, Director of Policy Studies at the National Institute for Research Advancement (NIRA) and Visiting Professor to the University of British Columbia Canada. Dr Fukushima also serves as a member of numerous committees, including the Defense Ministry's Council on Defense Facilities and the APEC Study Group of the Ministry of Economy, Trade and Industry. Her publications include Japanese Foreign Policy: The Emerging Logic of Multilateralism (1999) by MacMillan and A Lexicon of Asia Pacific Security Dialogue (2003) by Keizai Hyoronsha.

ウリ・ガウルケ Uli GAULKE



1968年ドイツ、シュヴェーリン生まれ。脚本家、映画監督。作品には「ピンク・タクシー」(2009)、「夢の中の戦友」(2006)、「ハバナ・ミアモール」(2000)などがある。ベルリン、カンヌ、メルボルン、ロサンゼルス、シンガポール、釜山、テルアビブ、アムステルダム、ニューデリーなどの国際映画祭に出品。ドイツ映画最優秀ドキュメンタリー賞を2001年に受賞したほか、ハンブロンナ視聴者賞なども受賞。大学ではフンボルト大学で物理学を、ベルリン工業大学で情報学を、ベルリン自由大学で舞台科学を学ぶ。

Uli GAULKE was born in 1968 in Schwerin. Writer and director. His films include creative documentary "Pink Taxi" (2009), "Comrades in Dreams" (2006), Havana Mi Amor (2000), Quién es el último - Who Is Last in Line (1997).

His festival presentations include Berlinale, Cannes, Melbourne, Los Angeles, Singapore, Pusan, Tel Aviv, Amsterdam, New Delhi. He has received awards such as German National Film Award LOLA for Best Documentary 2001, German Cinematography Award, Bavarian Documentary Film Award for Best Documentary, Audience-Award at Filmfestival Pamplona (SP). He studied physics at Humboldt University Berlin, Information at Technical University of Berlin and studies of theatre science at FU Berlin.

ロナルド・グレーツ Ronald GRÄTZ



ドイツ、シュトゥットガルトにある対外文化関係研究所(ifa)事務総長。1958年ブラジル、サンパウロ生まれ。1984年に哲学の分野で大学の学位取得後、出版社キャンパス・フェアラクにて営業副部長および編集長として1987年から勤務。1989年から1990年にサンパウロにおけるUNESCO制度校の副所長を務める。ミュンヘン、ゲッティンゲン、カイロにおけるゲーテ・インスティトゥートに勤務した後、教授法支援コンサルタントおよび教員としてスペイン、バルセロナのゲーテ・インスティトゥートに1994年から4年間勤務。その後、モスクワのゲーテ・インスティトゥートにおいて、ニュー・メディアに関するコンサルタントおよび東ヨーロッパおよび中央アジア地域における地元プログラムのディレクターを務める。2002年から2005年は理事長補佐および理事会メンバーとしてゲーテ・インスティトゥートのミュンヘン本部に勤務。2005年から2008年ポルトガルのゲーテ・インスティトゥート所長。2008年から現職。文学、音楽、対外文化政策に関する講演、著書多数。

Ronald GRÄTZ is Secretary General of the Institute for Foreign Cultural Relations (ifa) in Stuttgart / Germany. Born in 1958 in San Paulo, Brazil. After receiving his university degree in philosophy in 1984, Mr. Grätz started his career as a deputy sales manager and editor at the Campus Verlag in Frankfurt in 1987. From 1989 to 1990, he was Vice-Director of this UNESCO scheme school in São Paulo. After working for the Goethe-Institut in Munich, Göttingen and Cairo, he served as consultant for pedagogic support and teacher at Goethe-Institut in Barcelona, Spain from 1994 to 1998. Then he became a consultant for New Media and director for the local programme activities for Eastern European region and Central Asia at the Goethe-Institut in Moscow. From 2002 to 2005, he was advisor of the president and the board of directors at the head office of the Goethe-Institut in Munich. From 2005 to 2008, Director of the Goethe-Institut in Portugal. Since 2008, he holds the current position. He has lectured numerous times and has publications particularly in literature, music, and foreign cultural politics.

平野 健一郎 Kenichiro HIRANO



東京大学名誉教授、早稲田大学名誉教授、早稲田大学特命教授、関西大学C-COE客員教授、人間文化研究機構地域研究推進センター長（非常勤）。1937年茨城県生まれ。1963年に東京大学大学院社会学研究科国際関係論専攻修士課程を修了し、米国ハーバード大学大学院に留学。1967年に同大学院歴史・東アジア文明専攻博士課程修了（1983年Ph.D.取得）。1969年上智大学外国語学部専任講師兼国際関係研究所研究員。1970年から東京大学教養学部助教授、教授。1998年東京大学定年退職。1998年早稲田大学政治経済学部教授、2008年早稲田大学定年退職。専門分野は、国際関係論、近代東アジア国際関係史、国際文化論。主要著書に、The State and Cultural Transformation: Perspectives from East Asia, United Nations University Press, 1993 (editor), 『国際文化論』（東京大学出版会、2000年1月）、『戦後日本の国際文化交流』（監修）（勁草書房、2005年1月）、Japan and International Intellectual Exchanges in the 21st Century, The Japan Times, 2005 (co-editor)、A New East Asia: Toward a Regional Community, co-editing with Mori Kazuko, National University of Singapore Press, 2007、『東アジア共同体の構築3・国際移動と社会変容』西川潤と共編、岩波書店、2007年9月などがある。

Professor Kenichiro HIRANO is Professor Emeritus, Tokyo University and Waseda University, and Director, Center for Area Studies, National Institute for Humanities. Born in 1937 in Ibaragi prefecture, Japan, he graduated from the University of Tokyo (B.A. in International Relations) in 1961 and studied History and East Asian Civilization at Harvard University's Graduate School of Arts and Sciences from 1963 to 1967. He received Ph.D. from Harvard University in 1983. After having taught international relations at Sophia University and the University of Tokyo from 1969 to 1998, he taught International Relations at the School of Political Science and Economics, Waseda University, from 1998 to 2008. His fields are international relations, the history of international relations in modern East Asia and international cultural relations. His major publications include: The State and Cultural Transformation: Perspectives from East Asia, United Nations University Press, 1993 (editor), International Cultural Relations (in Japanese), University of Tokyo Press, 2000 (Korean translation of this book was published in Seoul in 2004), International Cultural Exchanges in Post-war Japan (in Japanese), Keiso Publishers, 2005 (editor) Japan and International Intellectual Exchanges in the 21st Century, The Japan Times, 2005 (co-editor), A New East Asia: Toward a Regional Community, National University of Singapore Press, 2007 (co-editor), People's Transnational Movements and Social Changes in East Asia (in Japanese), Iwanami Publishers, 2007 (co-editor).

井上 廣子 Hiroko INOUE



大阪生まれ。奈良を拠点に、ベルリン、デュッセルドルフ、ムンハイム等で制作。1974年沖縄で2年間染・織技法研究。染物アーティストとして活躍していたが、1995年、阪神淡路大震災の折に、虚無感を感じ、人間の心をテーマとし、社会性にこだわる作風が変わる。以来、1998年大阪トリエンナーレ（大阪府、ゲーテ・インスティトゥート、デュッセルドルフ市後援）彫刻'98がデュッセルドルフ市特別賞受賞。2000年「スピリットを写す—日本の現代写真」に作家として参加（国際交流基金事業）。ロシア、ヨーロッパを3年巡回。作品は現在南アジアを巡回中。2002年Live-Art Scholarship 2001 最優秀賞受賞。2003年東京のゲーテ・インスティトゥートドイツにて個展。2004年文化庁文化交流使として1年間ウィーンに滞在。2007年度外務省日・オーストリア21世紀委員会委員。

Hiroko INOUE is a formative artist born in Osaka, living in Nara. She created works in Berlin, Düsseldorf, Vienna, etc. She studied textile-dyeing in Okinawa for two years since 1974. Started career as a textile artist, she completely changed her artistic style in the face of the Great Hanshin-Awaji Earthquake occurred in 1995. Her feeling of hopelessness led her to incorporate issues of human hearts and social issues in her art works. She has received special award from Düsseldorf City in the 9th International Contemporary Art Competition in Osaka Triennale (supported by Osaka-Prefecture, The Goethe-Institute, and Düsseldorf City) in sculpture. In 2000 she participated in "Shoot the Spirit"-Photographing beyond the objectivities in Japan, toured in Russia and Europe, organized by the Japan Foundation. Her works are now being shown in South Asia on a tour. In 2002 received Live-Art Scholarship 2001 Best Award. In 2003 private exhibition at Goethe-Institut Japan in Tokyo. In 2004 stayed in Vienna as Special Advisor for Cultural Exchange by the Agency for Cultural Affairs, Japan. In 2007, Board member of Japan-Austria 21st Century Committee by the Ministry of Foreign Affairs of Japan.

エーバーハルト・ユンカーズドルフ Eberhard JUNKERSDORF (欠席)



映画製作者。ユンカーズドルフ氏は、55以上の映画を製作している。主なものに、フォルカー・シュレンドルフ監督がオスカーを獲得した「ブリキの太鼓」"The Tin Drum" (Die Blechtrommel)、「ボイジャー 運命の航海者」"Voyager" ("Homo Faber")、マルガレッテ・フォン・トロッタの「ローザ・ルクセンブルク」、「約束」"The Promise" ("Das Versprechen")、ヴェネチア国際映画祭金獅子賞を獲得した「鉛の時代」、さらにラインハルト・ハウフ監督・原案の"Knife in the Head" ("Messer im Kopf")、ベルリン国際映画祭で金熊賞を受賞した「シュタムハイム」などがある。1995年にはミュンヘン・アニメーション社を設立し、1997年に"The Fearless Four" ("Die Furchtlosen Vier") を製作。2002年にノイ・ビオスコップ・フィルム社を設立し、オスカー・レーラー監督・脚本家のベルリン国際映画祭コンペ出品作品"Angst" ("Der alte Affe Angst") を製作、さらに"Jester Till" ("Till Eulenspiegel", 2003) はアカデミー賞の最終選考まで残った。

Eberhard JUNKERSDORF has produced more than feature 55 films, including Volker Schloendorff's OSCAR-winner "The Tin Drum" (Die Blechtrommel) and "Voyager" ("Homo Faber"), Margarethe von Trotta's "Rosa Luxemburg", "The Promise" ("Das Versprechen") and "Marianne and Juliane" ("Die Bleierne Zeit") -winner of a Golden Lion at Venice, as well as Reinhard Hauff's "Knife in the Head" ("Messer im Kopf") and "Stammheim"-winner of a Golden Bear at Berlin. In 1995, he founded the production company Munich Animation and co-directed the animated feature "The Fearless Four" ("Die Furchtlosen Vier") in 1997. In 2002, he founded Neue Bioskop Film and produced Oskar Roehler's Berlinale competition feature "Angst" ("Der alte Affe Angst"), and "Jester Till" ("Till Eulenspiegel", 2003), which was short-listed for an Academy Award in 2003 in the category Best Animation.

ハンス = ゲオルグ・クノッフ Dr. Hans-Georg Knopp



2005年よりゲーテ・インスティトゥート事務総長であり、また2008年より25カ国、27の文化交流機関が集う欧州連合加盟国文化機関(EUNIC)理事長でもある。ゲーテ・インスティトゥートは世界各地で文化活動を行うドイツ連邦共和国の文化機関。世界に147の事務所を持ち、図書館、情報、文化協力、語学講習、教員研修を行っている。1995年から2005年はベルリンにある世界文化ハウス (House of World Cultures) 所長を務めた。同ハウスは現代芸術を牽引するセンターであり、芸術的な境界を越える事業の実施場所ともなっている。美術、演劇、音楽、文学、映画、メディアを通じてヨーロッパ外からの文化を紹介し、ヨーロッパの文化との公開の対話の場を提供することを目的としている。文化間協力と異文化紹介の両方を行う事業を優先して行っている。毎年25万人の訪問者があり、ベルリンにおける主要施設のひとつとなっている。1991年から1996年にはシカゴにおけるゲーテ・インスティトゥート所長を務め、米国中西部とドイツとの交流の責任者であった。1986年から1991年にはゲーテ・インスティトゥート本部において海外の教育省との連携によるドイツ国外における教員研修プログラムの長を勤めた。それ以前は、シンガポール、ジャカルタ、コロンボ、ムンバイにあるゲーテ・インスティトゥートでも勤務している。1974年にインド研究の分野でマールブルク大学から博士号 (Ph.D) を取得 (副専攻は社会学・政治学)。1966年から1974年は、チュービンゲン、ウィーン、マールブルク、ギッセンにおいて、インド研究、アラビア/ペルシャ研究、社会学、政治学を研究。1945年ドイツ、ベルンブルク生まれ。

Dr. Hans-Georg KNOPP is President of EUNIC ('European Union National Institutes for Culture' with 27 national cultural institutions as members from 25 European countries) since April 1st 2008, as well as Secretary General of the Goethe-Institut e.V since August 1st 2005. The Goethe-Institut is the Federal Republic of Germany's cultural institution operational worldwide. With its 147 institutes worldwide it is working in the fields with library, information, cultural cooperation, language courses and teacher training. From 1996 to 2005, he served as Director of the House of World Cultures, Berlin. The House of World Cultures is a leading centre for the contemporary arts and a venue for projects breaking through artistic boundaries. The House of World Cultures has set itself the task of presenting cultures from outside Europe through their fine arts, theatre, music, literature, film and the media and engaging them in a public discourse with European cultures. It gives priority to projects that explore the possibilities of both intercultural co-operation and its presentation. With its yearly 250 000 visitors it is the major institution in Berlin. From 1991 to 1996, he was Head of the Goethe-Institut Chicago and was responsible for the cultural exchange between MidWest USA and Germany. From 1986 to 1991, he was employed by the Head Office of the Goethe-Institut in Munich as Head of the promotion programme teachers training outside Germany in cooperation with the Ministries for Education outside Germany. He has also worked in the Goethe-Institut's field office in Singapore, Jakarta, Colombo, Goethe-Institut Bombay. He earned a Ph.D. in 1974 in Indology (sociology and political science as subsidiary subjects) at the University of Marburg. From 1966 to 1974, he studied Indology, Arabic/Persian studies, sociology and political science in Tübingen, Vienna, Marburg and Giessen. Born in 1945 in Bernburg, Germany.

ファリード・マジャーリ Farid MAJARI



2009年2月からレバノンのゲーテ・インスティトゥート所長。以前は、パレスチナ地域長 (2002-2009)、モスクワのゲーテ・インスティトゥートの文化プログラムコーディネーター、ミュンヘン本部の事業部長およびソフトウェア開発を担当。コネチカット大学客員教授。ミュンヘン本部でドイツ語教師。専門は、スラブ研究と英語および映画である。

Farid MAJARI has been director of the Goethe-Institute in Lebanon since February 2009. Previous posts: Director of the Goethe-Institute in the Palestinian Territories (2002-2009), Cultural programs coordinator at the Goethe-Institute in Moscow, Russia, project manager and software developer at the Goethe-Institut's headquarters in Munich, visiting professor at the University of Connecticut. Teacher of German at the Goethe-Institut Munich. Studies: Slavonic studies and English (Marburg and Coventry) Film (Moscow)

門司 健次郎 Kenjiro MONJI



1952年福岡県生まれ。1975年東京大学卒業、外務省入省。広報文化交流部長として、外国の市民、世論を対象とする広報文化外交を担当。外務省では、フランスで研修後、国際協定課長、安全保障政策課長など専ら条約と安全保障を担当。在外は、オーストラリア、ベルギー、英国、EU代表部 (在ベルギー) に勤務。2003年より条約局審議官、防衛庁 (後に防衛省) 防衛参事官を経て、2007年3月より2008年7月まで在イラク大使としてバグダッドに勤務。2008年7月より現職。「酒サムライ」及び日本酒輸出協会顧問として日本酒の海外普及にも尽力。

Mr. Kenjiro Monji is Director-General for Public Diplomacy, Ministry of Foreign Affairs of Japan since July 2008. He was born in 1952 in Kitakyushu City in southern Japan. He graduated from Tokyo University, Faculty of Law, in 1975 and entered the Ministry of Foreign Affairs in the same year. He spent two years in France 1976-1978 to study at University of Montpellier and National Administration School (ENA) in Paris. Mr. Monji served mainly in the areas

of treaties and international law and of national security, holding such posts in Tokyo as Director of the International Agreement Division, Director of the Security Policy Division, Deputy Director-General of the Treaties Bureau of the Ministry of Foreign Affairs and Director-General for International Affairs of the Ministry of Defense. He had been posted overseas in Australia, Belgium, United Kingdom and to the European Union as Deputy Chief of Mission before being appointed as Ambassador of Japan to Iraq from 2007 to 2008. He has a title of Sake Samurai awarded by Japan Sake Brewers' Association's Younger Council and Advisor of Sake Export Association of Japan.

永岡 泰則 Yasunori NAGAOKA



陶芸家。朝鮮陶磁に魅せられ、韓国の古窯を巡り採取した陶辺を手本として作陶している。白磁・青磁・粉引・三島・黒高麗・無文土器等を製作している。1952年福岡県飯塚市生まれ、1981年美濃焼の地、土佐市にて修業。1988年同市曾木町にて独立。1998年恵那市串原村に移転し、現在に至る。

Yasunori NAGAOKA is ceramic artist. Based on his fascination with Korean ceramics, Nagaoka models his works after fragments of ceramics he has collected during visits to ancient kilns found throughout Korea. His works include white and celadon porcelain, kohiki (ceramics with a white powdery coating covered with transparent glaze), mishima (ceramics covered with distinctive continuous patterns and a white coating), and kuro-kōrai (collective term for black ceramics with celadon glaze over iron glaze or paint) wares, and earthenware vessels without ornamentation. Born in 1952 in Iizuka City, Fukuoka, Nagaoka started his training in 1981 in Tosa City, the

birthplace of Mino ware. He started his own workshop in 1988 in Sogi Town, Tosa City, and then moved on to his current base in Kushihara Village, Ena City, in 1998.

西川 恵 Megumi NISHIKAWA



毎日新聞社外信部専門編集委員。長崎県生まれ。1971年、東京外国語大学(中国課)卒、毎日新聞社入社。地方部、社会部を経て、79年に外信部。82～84年テヘラン支局、86年～93年パリ支局、96年～98年ローマ支局。98年～01年外信部長。01～02年論説委員。02年4月から現職となり、コラム「西川恵のグローバル・アイ」を毎週執筆。著書に『エリゼ宮の食卓』(新潮社、97年度サントリー学芸賞)、『国際政治のキーワード』(講談社)、『ワインと外交』(新潮社)など。共訳に『超大国アメリカの文化力』(岩波書店)。青山学院大学非常勤講師、フランス政府農事功労賞(07年)、フランス国家功労賞(09年)。

Megumi NISHIKAWA is Foreign Policy Commentator, Mainichi Shimbun (The Mainichi Newspapers). Originally from Nagasaki, Nishikawa graduated from Tokyo University of Foreign Studies in 1971 with a degree in Chinese Studies, and joined the Mainichi Newspapers Co., Ltd. the same year. He worked in the local news and city news sections of Mainichi Shimbun before joining its foreign news desk in 1979. He was a correspondent for the paper in Tehran from 1982 to 1984, in Paris from 1986 to 1993, and in Rome from 1996 to 1998. He worked as the paper's foreign news editor from 1998 to 2001, and then became an editorial writer in 2001. He has held his current position since April 2002, and continues to write his weekly column, "Megumi Nishikawa's Global Eye." Nishikawa's main works include "Élysée-kyū no Shokutaku" ("Dinners at the Élysée Palace," published by Shinchosha, awarded the Suntory Prize for Social Sciences and Humanities in 1997), "Kokusai Seiji no Ki-wādo" ("Keywords in International Politics," published by Kodansha), and "Wain to Gaikō" ("Wine and Diplomacy," published by Shinchosha). He is also one of the joint translators for "Chō-taikoku Amerika no Bunka-ryoku" ("Culture in America," published by Iwanami Shoten). Nishikawa also teaches part-time at Aoyama Gakuin University. He was awarded the France Order of Merit for Agriculture (l'Ordre du Mérite Agricole) in 2007 and the France National Order of Merit (l'Ordre National du Mérite) in 2009.

小倉 和夫 Kazuo OGOURA



1938年生まれ。東京大学法学部卒業(法学士)、英国ケンブリッジ大学経済学部卒業(経済学士) 1962年外務省入省、文化交流部長、経済局長、外務審議官等を歴任。また駐ベトナム大使(1994-95)、駐韓国大使(1997-99)、駐フランス大使(1999-2002)。外務省を2002年11月に退官後、総合研究開発機構客員研究員、青山学院大学教授を経て2003年10月に国際交流基金理事長に就任。主な著書に『東西文化摩擦 - 欧米vs.日本の15類型』(中央公論社 1990年)、『パリの周恩来 - 中国革命家の西欧体験』(中央公論社 1992年/吉田茂賞受賞)、『「西」の日本・「東」の日本 - 国際交渉のスタイルと日本の対応』(研究社出版 1995年)、『中国の威信 日本の矜持』(中央公論新社 2001年)、『吉田茂の自問』(藤原書店 2003年)『グローバリズムへの叛逆』(中央公論新社 2005年)など。

Amb. Kazuo OGOURA is President of the Japan Foundation, and a former Ambassador to Vietnam, Korea, and France. Graduated from the University of Tokyo's Faculty of Law and the University of Cambridge's Faculty of Economics, he joined the Ministry of Foreign Affairs, where he served in various positions, including Director-General of Cultural Affairs Department (1989-92), Director-General of Economic Affairs Bureau (1992-94), Deputy Vice-Minister for Foreign Affairs and Japanese G7/G8 Sherpa (1995-97). He is also an Invited Professor of International Politics in the Economics and Business Department of Aoyama Gakuin University (2003-). His publication includes *Pari no Shu Onrai* (*Enlai Zhou in Paris*) (1992), *Chugoku no Ishin, Nihon no Kyoji* (*Dignity of China, Pride of Japan*) (2001), *Yoshida Shigeru no Jimon* (*Shigeru Yoshida Searches his Heart*) (2003) and *Grobarizumu e no Hangyaku* (*Rebellion against Globalism*) (2004).

リタ・ザクセ = トゥサーン Rita SACHSE-TOUSSAINT



2008年2月からカブールのゲーテ・インスティトゥット所長(アフガニスタン)。カブールへ渡る以前は、大阪のゲーテ・インスティトゥットにおいて、言語部長として日本におけるドイツ語学習を促進するべく、大学・学校との連携、教員研修等を行い、A1レベルのドイツ語の教科書の共著も行った。1981年から1998年は第二言語としてドイツ語を学ぶ人を対象としたドイツ語教師として、ドイツのフライブルクとマンハイムのゲーテ・インスティトゥットにて勤務。1998年から2003年にはドレスデンのゲーテ・インスティトゥット所長を務めた。学生時代はフライブルク大学で中等・高等学校における教員の役割について学位を取っている。

Rita SACHSE-TOUSSAINT is Director of Goethe-Institut Kabul, Afghanistan since February 2008. Before serving in Kabul, she was Director of Language Department at Goethe-Institut Osaka, Japan, where she cooperated with universities and schools, was in charge of teacher training, and co-authored a course book A1 for facilitating German language education in Japan. She has been a teacher for German as a foreign language at Goethe-Institut in Freiburg and Mannheim, Germany from 1981 to 1998. She also worked as Director of Goethe-Institut Dresden in Germany from 1998 to 2003. She studied teaching profession for secondary school at Albert-Ludwigs-University Freiburg.

ウーヴェ・シュメルター Uwe SCHMELTER



1945年ドイツ、グライフスバルト生まれ。ドイツ文学、美術史、音楽をボン、ケルン、パリ、ウィーンで学び、1975年にボン大学にて中世文学・美術史における博士号 (Ph.D) を取得。1975年から1981年にはドイツ文学とドイツ語の准教授としてサンパウロのボンティフィシア・カトリカ大学およびリオデジャネイロの連邦大学に派遣された。1981年にゲーテ・インスティトゥートのミュンヘン本部映像部門長として就職。その後マニラのゲーテ・インスティトゥート所長 (1985-1991)、ミュンヘン本部にて報道・広報部門長 (1991-1994)、コペンハーゲンのゲーテ・インスティトゥート所長 (1994-1999) を歴任。1999年にはソウルでゲーテ・インスティトゥート所長に就任し、韓国および北朝鮮の任務にあたり、2004年6月、平壤にゲーテ情報センターの開設を行った。2005-2006年の日本におけるドイツ年の文化プログラムの準備後、2005年に東京のゲーテ・インスティトゥート所長および東アジア地域代表に就任。2008年5月からはEUNIC JAPAN (ユニーック・ジャパン、欧州

連合加盟国文化機関日本支部) の長も務めている。彼は30年にわたる職業活動において異文化間対話と平和構築のための文化政策・文化事業の戦略および概念の立案・実施に一貫して携わっている。

Dr. Uwe SCHMELTER was born 1945 in Greifswald, Germany. After majoring in German literature, history of arts and musicology in Bonn, Cologne, Paris and Vienna and getting a PhD-degree in Medieval Literature and History of Art at the University of Bonn in 1975, he was dispatched as an associate professor for German Literature and Language at the Pontificia Universidade Católica and the Universidade Federal in Rio de Janeiro from 1975 to 1981. In 1981 he joined the Goethe-Institut as head of the feature and experimental film department at the headoffice in Munich before heading the Goethe-Institut Manila from 1985 to 1991 whereafter he was head of the Department for Press and Public Relations in the Munich headoffice until 1994 and head of Goethe-Institut Copenhagen (1994-1999). In 1999 he was assigned as head of Goethe-Institut Seoul, a post that made him a unique delegate with dual assignments both in South Korea and North Korea. He was instrumental in opening the "Goethe Information Center" in Pyongyang in June 2004. After organizing the cultural programme for the German Year in Japan 2005/2006 as General Manager, he has been assigned in 2005 as Director General of Goethe-Institut Japan in Tokyo and Regional Director for East Asia. Since May 2008 he is also chairman of the "EUNIC Japan Cluster" (European Union National Institutes for Culture) in Tokyo. His professional activities of the last 30 years concentrate in developing and implementing strategies and concepts for cultural policy and activities as mediating tools for intercultural dialogue and peace building.

白濁 八洲彦 Yasuhiko SHIRAKATA



砥部焼伝統工芸士、一級技能士。端正な造形の白磁と、記念碑的な大作で知られている。ロクロの技にこだわり、薄物作りから超大物作り、砥部の土を活かした白磁の仕事を続けている。1939年愛媛県伊予郡砥部町出身。1955年砥部焼の道に入る。1968年青年海外協力隊でフィリピンのソルソゴン州に行く。1970年独立、八瑞堂創業。1978年一級陶磁器技能士 (ロクロ部門)。1981年砥部焼伝統工芸士 (ロクロ部門)。1990年皇太子殿下御来県白磁壺献上。1991年松山新空港巨大モニュメント (三美神) 製作。1995年国連欧州本部 (ジュネーブ) へ生命の碧い星製作。2001年経済産業大臣表彰 (伝統工芸産業功労賞)、愛媛県知事表彰 (ロクロ成形優秀技能賞)。

Yasuhiko SHIRAKATA is a Tobe ceramic master of traditional craft (First Grade certified skilled worker) known for his fine white porcelain masterpieces. With special attention to the use of the potter's wheel, he continues to create

beautiful thin works, as well as large monuments from local clay. Born in 1939 in Tobe Town, Iyo County, Ehime Prefecture, he has been in this profession since 1955. In 1968, he worked in Sorsogon Province, The Philippines as a member of the Japan Overseas Corporation Volunteers. In 1970, he became independent and started Hachizui kiln. He was certified as a first-class ceramist (potter's wheel section) in 1978 and as a traditional craftsman (potter's wheel section, Tobe porcelain) in 1981. When Crown Prince Naruhito visited the prefecture in 1990, Shirakata presented him with a white porcelain jar. In 1991, he made the giant Sanbisin monument for the new Matsuyama Airport in Ehime. In 1995, he created Blue Star of Life for the United Nations European Headquarters in Geneva. In 2001, Shirakata received the Minister of Economy, Trade and Industry Award to recognize contributions to traditional craft industries, and the Pottery Wheel Technology Award from the Governor of Ehime Prefecture.

高橋 毅 Tsuyoshi TAKAHASHI



国際交流基金参与。日本研究・知的交流事業及び欧州・中東・アフリカ地域担当。2008年より現職。国際交流基金に参画する以前は、米州開発銀行理事として米国ワシントンDCに勤務 (2005～2008)。1975年から日本国財務省 (当時大蔵省) 勤務。1984年～87年は経済協力開発機構日本政府代表部勤務。1990年以降、東京税関成田税関支署長、アジア開発銀行予算人事局長、米州開発銀行駐日事務所長、公正取引委員会事務総局官房審議官 (国際担当) 等を歴任。1952年生まれ。1975年一橋大学経済学部卒。

Tsuyoshi TAKAHASHI is Special Assistant to the President at the Japan Foundation since 2008. He supervises the Foundation's programs for promoting Japanese studies and intellectual exchange, as well as its activities in Europe, the Middle East and Africa. Before joining the Japan Foundation, he was Executive Director at Inter-American Development Bank (IDB) in Washington D.C. He joined Ministry of Finance in 1975. From 1984 to 1987, he was appointed as Attaché (Second and First Secretary), Japanese Delegation Office to OECD, Paris. Since 1990, he served as Director at Narita Customs of Ministry of Finance, as Director of Budget, Personnel and Management System Department at Asian Development Bank (ADB) in Manila, Philippines, as Representative of Inter-American Development Bank (IDB) Office in Japan, and as Deputy Secretary-General for International Affairs, Fair Trade Commission. He was born in 1954. Graduated from Hitotsubashi University with a bachelor of economics in 1975.

ヘレーナ・ヴァルトマン Helena WALDMANN



演出家・振付家。ベルリン在住。応用演劇学専攻。技術はハイナー・ミュラー、ジョージ・タボリ、ゲルハルト・ボーネーラに師事。観客を舞台の隣に招き、舞台視点を曲げて第4の壁（観客と演技者との間にある目に見えない壁）に焦点を合わせる試みを行った結果、1993年から1999年に製作された「Krankheit Tod」、「Vodka konkav」、そして「CheshireCat」などは国際的に評判を呼ぶ。2000年以降の彼女の振付の政治的な力は亡命者や国内移民を巻き込んだことによって生じている。例えば、6人のイラン人女性によって製作された「Letters from Tentland」、ドイツ、ザールブリュッケンで製作された極端なスポーツをテーマにしたバレエ「Crash」、そして欧州の移民政策に関する彼女の批評であり、6人の亡命イラン女性によって作られた「Return to sender」などがある。これらは皆、政治的な前衛芸術として世界的な旋風を巻き起こしている。1954年ドイツ、シグマリゲン生まれ。

Helena WALDMANN, director and choreographer, living in Berlin educated in Applied Theatre-Studies. She studied her craft with Heiner Müller, George Tabori and Gerhard Bohner, amongst others. In her research in the field of the gaze she moved the audience directly next to the stage, twisted the stage perspective or closed up the fourth wall - as a result, works such as 'Die Krankheit Tod', 'Vodka konkav' and 'CheshireCat', created between 1993 and 1999, were internationally acclaimed. The political force of her choreographies post 2000 results from a mimicry of exile and inner immigration, as seen in 'Letters from tentland', produced recently in Tehran for six Iranian women, 'Crash', her ballet about extreme sports produced in Saarbrücken, and 'Return to sender', her commentary on European immigration policy, formulated by six exiled Iranian women. All these works are creating a worldwide stir as political avant-garde theatre. Born in Sigmaringen, Germany in 1954.

渡辺 靖 Yasushi WATANABE



慶應義塾大学環境情報学部教授。1997年にハーバード大学から社会人類学の博士号を取得。ケンブリッジ大学およびオックスフォード大学にポストドクターとして在籍した後、2006年より現職。専門は文化政策、文化外交、およびアメリカ研究。著書『アフター・アメリカ』でサントリー学芸賞受賞。国際交流基金安倍フェローとしてハーバード大学ウェザーヘッド国際問題研究所に所属。2005年に日本学士院学術奨励賞受賞。2007年にケンブリッジ大学ダウニングカレッジフェロー。米国の文化交流機関であるアメリカン・センターとの比較の視点から著書においてゲーテ・インスティトゥートの活動にも言及。近著に『アメリカン・センター：アメリカの国際文化戦略』、Soft Power Superpowers: Cultural and National Assets of Japan and the United States.など。

Professor Yasushi WATANABE, Professor, Faculty of Environment and Information Studies, Keio University, earned a Ph.D. in Social Anthropology from Harvard University in 1997. After a post-doctoral research at Cambridge and Oxford Universities, he joined Keio University in 1999, and currently as a full Professor, is presently working on such subjects as Cultural Policy, Cultural Diplomacy and American Studies. His books include After America: Trajectories of the Bostonians and the Politics of Culture, which won a Suntory Prize for Social Sciences and Humanities and a Hiroshi Shimizu Award of the Japanese Association for American Studies, and The American Family: Across the Class Divide. He was a recipient of Abe Fellowship which he held at the Weatherhead Center for International Affairs at Harvard University. He was awarded a Japan Academy Medal in 2005. He served as a Fellow at Downing College, University of Cambridge in 2007. In his book, he refers to the activities of the Goethe-Institut in comparative views with American Center, the cultural exchange agency of the United States. His most recent books include American Community: Between the State and the Individual, Soft Power Superpowers: Cultural and National Assets of Japan and the United States.

●もよおし●
 ◇シンポジウム「平和のための文化イニシヤティブの役割」日独からの提言」 15日15時、東京都港区赤坂7のドイツ文化会館。芸術活動や青少年交流が、国際・地域間関係の信頼醸成に果たす役割を、アジアや中東で文化交流に携わってきた日独の芸術家、知識人などの体験を交えて議論する。国際交流基金、ゲーテ・インスティトゥート主催、毎日新聞社共催。無料。問い合わせは国際交流基金「平和のための文化」事務局(☎03・53369・6071)へ。

毎日新聞告知記事
 2009年5月13日
 「もよおし」

西川恵のGLOBAL EYE

平和のための文化の役割

日、独の文化交流機関を指導した。同氏は「国際交流基金とゲーテ・インスティトゥートの(GI)が最近、「平和のための文化イニシヤティブの役割」日独からの提言」と銘打ったシンポジウムを開いた。世界各地で完全な平和とは言い難い「戦争未満」の状況が現出している。アフガニスタン、比ミンダナオ、インドネシア・アチェ、ボスニア、ルワンダ……こうした地域

を指導した。同氏は「イスタリフ焼がアフガンを代表する特産品となって地元が潤い、地域復興の一助になればと願っています」と語った。ドイツ側はアフガンの首都カブールで、07年以来開く演劇祭と映画祭について報告した。GIのアフガン所長リタ・ザクセトウーサンさん(女性)は「アフガンの文化の再構築が他の分野と同様に重要なのは、文化があっ

手痛いしっぺ返しを受けた。日独両国は相手に寄り添い、広い意味での文化をテコに民心と社会の安定を図ろうとする。米国の文化政策に対するアンチテーゼでもある。ただNGOや民間団体と違って、独立行政法人の国際交流基金やゲーテ・インスティトゥートは課題も抱えている。不安定地域の事業だけに、人命にかかわる事態になれば「なぜ派遣したのだ」と世論の批判を浴びる。文化がどれだけ平和に貢献したかの成果を客観的な統計で出しにくいのも、この種の事業の理解を広める上でネックだ。シンポに私も参加して感じたのは、紛争後の信頼醸成や個の誇りを高める上で文化は極めて重要で、人々の内面の安定と充実があってこそ、諸施策は実を結ぶ。文化を政治、経済、社会の脈絡で考え、使いこなしていく。グローバル化時代の文化のありようを示唆する。(専門編集委員)

人々の内面の安定がカギ

文化はどのような役割を果たせるか考えようというのが狙い。両機関は紛争地で文化事業を実施しており、幾つかの事例が報告された。

国際交流基金によるアフガン伝統のイスタリフ焼の支援事業では、実際に携わった砥部焼伝統工芸士の白濁八洲彦氏らが現地を訪ね、またアフガン陶工を日本に招き、窯の造り方、焼きの入れ方、新しい造形品の開発など

てこそアイデンティティと社会的価値を再定義することができると語った。日、独のアプローチの違いは国民性を反映している面白いが、大戦敗戦国である両国が「平和のための文化の役割」を共に探ろうという試みも意味深い。

米国のブッシュ前政権は「民主主義の拡大」を掲げ、上から押し付ける形で価値の伝播を図り、

毎日新聞掲載記事
 2009年5月30日
 「西川恵のGLOBAL EYE」

特別対談

文化交流活動は 社会のなかで どんな意義を持つのか

ジャパン・イン・ステイト・インスティテュート
の00の若手は、平日、東京と「平和のための文化エ
ンタテインメント」自給からの「暮らし」を「イン
ステイト」から「自給」へ移しました。その置き換えを「こ
うな」意義と小倉和重氏が、同国の文化活動
を支える者から、改めて文化交流の意義を考へます。

文化活動をほかの社会的活動と
どう結びつけるのか

小倉 文化活動を、福祉や環境政策
などのはかりな活動と見なすか

結びつけることができるのかとい
い、関心が高まっています。こ
れは、カウチング（説明責
任）の問題に関係しています。と
ういふ、文化活動が社会に立



小倉和夫
[おくら かつお]
ジャパン・イン・ステイト・インスティテュート理事長

東京大学経済学部長、カンブリッジ大学経済学部長
兼、1982年に外務省に入社、駐ベトナム大使、
駐韓国大使、駐フランス大使などを務めた。
2003年より、青山学院大学にて「日韓文
化の対比」をテーマに「中国の価値 日本への対比」など
の自問「中国の価値 日本への対比」など



Hans-Georg
Knopp
ドイツ・イン・ステイト・イン
スティテュート理事長

1974年にドイツ連邦で「ドイツ・イン・ステイト・イン
スティテュート」を創設。1982年に外務省に入社、駐ベトナム大使、
駐韓国大使、駐フランス大使などを務めた。2003年より、
青山学院大学にて「日韓文化の対比」をテーマに「中国の
価値 日本への対比」など

トは広い意味で、文化や芸術が
社会に対して持つ役割について、
常に真剣に考へてきたと思いま
す。例えば、音楽は演奏する職員
は地球温暖化問題とテーマとした
展覧会を2回も開催しました。彼
は芸術が持つ役割と影響力につ
いて精進し、社会に問うける行な
うことで、結果的に的確な行動を
実現できたと思います。

私たちは会議を主催して、社会
問題を取り上げました。現在
私たちに4つの主要なテーマが
あります。一つはすでに触れた
地球温暖化問題です。二つ目は1
989年に欧州で起きた無血革命
です。ドイツでは毎年、その20周
年を記念する式典が盛大に行な
われました。あれから20年経過し
世の中はどのように変わったの
か。

三つ目は知的財産です。このテ
ーマには、エネコロでも州連合
(Länder)でも大きな関心を集められ
ています。知的財産の保護はだけ
でなく、知的財産はすべての人に開
かれるべきかといった問題です。
また、インターネットは芸術や文

化にどの程度の影響をもたらすの
か、インターネット時代の今日、
芸術や文化に何を期待できるの
か。

四つ目は組織社会です。数多く
の国々で見られる組織社会の発展
とその本質についての議論です。
よりよい組織インフラの構築に働
かし、発展途上国やインドでは
知識社会がどうまで発展できる
のでしょうか。また、私たちがこ
れらの国々から何を学び、彼ら
私たちが何を学ぶのでしょ
うか。

これらのテーマについては、ま
まさまざまな地域や機関に駐在する職
員に、地元の文化機関が有らな
らば、その国々から報告書を送つて
もらい、その上でドイツにいても
関心事となる内容を選んでいく
わけです。

小倉 とても興味深いですね。ジャ
パン・イン・ステイト・インスティテュートは現在、
自分ならリソースを組織できる
分野を、三つから四つ、構築しよ
うとしています。一つは組織で、
二つは社会組織。これは福祉政
策そのものというより福祉的意義

を持っていることを一般の人々に示す
には、部分的にでも、文化活動
が福祉や環境政策の向上に影
響を与えていることを明確に示す
必要があるからですね。ゲーテ・イ

ンステイト・イン・ステイト・イン
スティテュートは、こうした活
動をどのように位置づけているの
でしょうか。

小倉 あまでも私の個人的意見
ですが、ゲーテ・イン・ステイト・イ

を持つ分野ということで、例えば
展覧会を持つ方々を対象に大々ア
ン・演奏会の開催といったこと
です。三つ目は災害の防止。または
災害後の復興です。私には日本
国民の関心度について調査を欲
しています。

クワウ 私がかんバイ（ボンベ）
に勤務していたとき、出先のある
病室を訪問するために医師たちを
ミンベーンから連れまわす。私
は展覧会を持つ人たちの募集に
アーティストプログラムを、戦後のワ
リアン・イン・ステイト・イン
スティテュートやプログラムを
しました。現在もこれに携わ
ることをやっていますが、経済援助
から資金が提供されたため、私
たちは教育学的な活動を行な
うことが求められます。これが
ゲーテ・イン・ステイト・イン
スティテュートが文芸交流の
プログラムを文芸交流の
プログラムです。

に深く関係したプログラムです。
開発活動の目的とはどのような
協力関係を築くのか

小倉 ゲーテ・イン・ステイト・イン
スティテュートは、ドイツの
国際協力機構（GIZ）日本
の国際協力機構（JICA）に相当
する機関とは、どのように役割
の分担をしますか。

クワウ 携行は、必ずしも明確で
はなかった。例えばアムステル
ダムではスラムでのエイズに対する意
識の向上を望むアーティスト・イ
ン・ステイト・インスティテュート
が招かれたことがありま
す。GIZを介したプログラムを結
ぶ、長い期間を要する活動であ
るため、その後ヨネマスアルク
の私たちが関与し引き継ぎました。
また、カンボジアのアーティスト・イ
ン・ステイト・インスティテュート
が「Artists Speak Out（我々の声）」とい
うプログラムを主催しました。こ
れは、かつてカンボジアの強制収
容所に収容された女性たちが、
そこで経験してきた女性たち
を示すことのできるものでした。
私には開発途上国でこうした
活動を支援しています。これらの

「Culture and Development pedagogical trainings, infrastructure (文化発展のための教育プログラム、またはインフラ)」と呼ばれています。

小説 興味深いプロジェクトを紹介していただきました。日本では経済的活動をなう「ICG」が、諸国の経済や社会の発展に貢献していますが、今言われたようなプロジェクトに参加することはあまりないと思います。ICGは橋梁、学校、教育施設、病院の建設を主眼しますが、劇場、美術館は主要対象とは言えません。

私は、シヤパン・アウンテーションと「ICG」が協力してはどうかと考えています。つまり、日本政府がある国の劇場に照明設備や機材を提供し、場合、私たちが日本の芸術家を派遣したり、当事者を日本に出向かせることで、劇場より効果的な運営を促すわけです。私達はこうした協力について協賛する特別チームを編成しようとしています。

クワ アフリカのアフリカのカールが、シアター・インスティテュートが企画されています。

カールには日本企業が建設した劇場があります。現在ではすっかり老朽化していますが、ドイツの伝統的な様式を持つ劇場です。そこで、私は「劇場のよきもの」を建ててはどうかと提案しました。つまり、伝統的建築方法による文化的空間で、人が集まる会議を開け、映画上映、演劇を行なえ、運動のための設備や図書館などの施設も備えたいと提案しました。必要に応じて、建設費を軽減する必要があると思います。

このプロジェクトは議論を経て、結果的に「ゲーテ・インスティテュート」の監督で進めることになりました。私達は初期計画を立て、建築家や建築家を集めて、アフリカに基金の出資によって、作業に取り組みることになりました。このプロジェクトでは、GTZがパートナーとして、私達はプロトタイプを担います。そのために、私達は建築家を養成します。これが本日の協力活動だと思います。ハートは別の団体に任せて、ゲーテ・インスティテュートはプロトタイプに取り組むという構図です。

しかし、GTZは劇場を建てる前には、それを迎える文化や伝統とどう関係づけるかなどについて、監督者である私たちの考えに耳を傾けなければならぬのです。これが、ゲーテ・インスティテュートが誇る文化に貢献する力だと思えます。

産業界の文化活動に於ける役割

小説 次に文化活動と産業界との関係についてです。私達は日本企業がドイツで行った国際貢献



国際シンポジウム開催記録

平井ののための文化・インフラの役割
～日独からの視座～

日時 2009年6月15日(金)
会場 国際交流センター(ベルリン)
主催 グーテ・インスティテュート
共催 毎日新聞社
協力 青山学院大学国際交流センター

プログラム

基調講演 小泉和夫(シヤパン・アウンテーション代表)
ハンス・ウルフ(ドイツ)
ウーテ・インスティテュート代表

第1セッション ● 実践者による報告及び評価
モアローネ ● ウーテ・インスティテュート代表
ウーテ・インスティテュート代表

第2セッション ● 産業界による報告及び評価
モアローネ ● ハンズ・ウルフ代表

第3セッション ● 文化活動と産業界
モアローネ ● ハンズ・ウルフ代表

第4セッション ● 文化活動と産業界
モアローネ ● ハンズ・ウルフ代表

第5セッション ● 文化活動と産業界
モアローネ ● ハンズ・ウルフ代表

第6セッション ● 文化活動と産業界
モアローネ ● ハンズ・ウルフ代表

第7セッション ● 文化活動と産業界
モアローネ ● ハンズ・ウルフ代表

第8セッション ● 文化活動と産業界
モアローネ ● ハンズ・ウルフ代表

第9セッション ● 文化活動と産業界
モアローネ ● ハンズ・ウルフ代表

第10セッション ● 文化活動と産業界
モアローネ ● ハンズ・ウルフ代表

事業について、概観的調査を実施します。文化、教育、福祉、環境などの事業に関連した活動に関して、とても興味深い結果を得ることができました。

日本企業がこんな活動、どの分野にリソースを投入したのか。またそのとき、どのような関係を築いたのか。それを明らかにして、私達はドイツで事業を展開する日本企業とくつから協力を進めようと考えています。

例えば、そのなかにはIT機器が導入されているドイツの教育機関に現用機器を提供することに関心を示す日本企業があります。

教師の派遣には消極的です。その点についても、私達はシヤパン・アウンテーションが貢献できるわけです。

また、ドイツの企業を日本に招きたくて、費用の全額負担に躊躇する企業もありません。そこでも何らかの形でシヤパン・アウンテーションが協力できると思います。

また、地元のプロジェクトを支援している日本企業が、3年経過した時点で返却を促すという場合がある場合があります。そうした場合には、私たちが手を引くこともあり得るでしょう。また、

この池のパターンもあります。ゲーテ・インスティテュートは、ドイツ企業との協力関係について、どのように考えています。

クワ 私は今、美意識の問題に関するプロジェクトに取り組んでいますが、すでに産業界が関心を寄せています。例えば、化粧品業界です。アフリカで美しいとされることとは異なる場合があります。そこで私達は、両者にとって共通して重要な価値やテーマを見つけて、中国人の方にクリエイティブを依頼し、大きなプロジェクトを立ち上げました。

小説 CSR(Corporate Social Responsibility: 企業の社会的責任)という概念で言うと、日本企業は会社としてその責任を果たしていますが、ドイツではこの概念はそれほど広まっていらないように見えます。むしろドイツでは企業が別に基金を設立し、そうした基金が企業とは別に積極的な活動を展開しているからでしょうか。

私達は、社会企業家のレスポンス(反応)という考えに基づき、日本とドイツの企業家とのかかわり方を、またはシンポジウムを開催する計画を立てています。

政の交代は文化政策に
どんな影響があるのか

小島 私はケーテ・インステイトウィ
トが予算の増額を要求したことにつ
いて、真摯の気持ちで聞いていま
す。文化の重要性について聞え
ることは簡単ですが、実際は資金
を確保するには力が必要です。

ウラウ シェイクインアムステルダム
大臣(社会民主)が、連任者たち
とはまったく異なる考えを持って
いたことが大気を感じます。大臣
は文化に対する理解を深く、連任
政府レベルで新しく高度な文化
政策にも多大な貢献をしました。連
邦文化基金(Federal Cultural
Foundation)など、彼が努力なく
して実現した計画がなくな
ります。

小島 文化分野を司る大臣がその分
野への予算の増額を要求できない
のなら、大臣としての資格がない
といつた意識を、日本にも根づか
せなければなりません。

ウラウ 文化圏におけるドイツの外
交政策に問題がなかったのは、明
確な目標がなかったからであると

も言えます。多面的な解釈が存在
する機会もあつてでしょう。誰もが
独自の視点で文化というものを持
積している状況なのです。大臣が
自分派は難しい、私たちはそれに
従います。これは、文化という分
野にこそは素晴らしいことであ
らう。しかし、戦略的に一つのこ
とを達成しようとするには、必ず
失敗します。

小島 あなたが以前、おっしゃた
ように、文化交流とは結局のところ
個人の意識に依存しているの
でしょう。各個人が文化について
高い感性を養育を持っていないけ
れば、相互間の文化交流は実効を
きかないと思います。

ウラウ 私は一般の観客者も文化交
流の意義をきちんと理解してい
ると思っています。私たちがケーテ・イ
ンステイトウィトの存在意義を認
明するならば、文化が必要である
ことをいつも指摘しています。文
化への関心を受けている人たちは
人口の10%程度ですが、ほか
の人々もこの団体の存在について
は好意を持っています。

私は、文化的記憶が個人を社会

に結びつけていると考えていま
す。以前、規範について意見表
められたことがありました。そこで
私は少し矛盾した表現ですが、今
日では柔軟性のある態度を怠る
と受けました。つまり、私たちは
急速な変化が起きている現代社会
に生きており、これでは異なる
「大旅行」をしなければならま
せん。

かつての英国の上流階級の人々
は「大旅行」といってヨーロッパ
を旅することです。その偉大な歴
史や遺物に慣れ親しんだので、
私たちが現実的な話として、トル
コ人の執筆者に習事や経験しなく
てはなりません。ムスリムやイス
ラム教の考えをもっとよく知る必
要があるのです。

こうして私たちが歩み寄り規範
は変わっていくでしょう。それは
段階的で、とてもゆっくりとした
変化になるでしょう。また他つく
りとした変化もある部分があるの
です。なぜなら、人は流れを捉
え、概念を持って、社会がバラバ
ラになつてしまふ可能性があるか
らです。

小島 今年、ドイツは連邦議会選挙
の年ですが、連立政権をつくる政
党の顔ぶれが大きく変わった場
合、どのようなことが起きるでし
ょうか。ケーテ・インステイトウ
ィトはどのような影響を受け、そ
れに継続的な持続可能性を見出
せるでしょうか。

ウラウ 僕は、自由民主党を中心
とした政権になると、政策は変化
が起きるでしょう。自由民主党は、
常にこうした政策や経済界の声を反
映させる政策ですから、私たちが
文化を柱とした政策を通して動
議的意義を支えるために行動するこ
とに変わりはありません。もろろ
ん、こうした考え方は誤りではな
いと思えます。

新しい大臣が「ケーテ・イ
ンステイトウィトの歴史を誇
り出した」。一般市民やメディア
は驚いていないでしょう。なぜな
ら、ケーテ・インステイトウィト
は一般国民の間に、よい意味での
存在認識をすでに確立しているか
らです。

(2009年5月14日、東京・音田
ホテルにて収録)

写真
Photos





シンポジウム報告書

「平和のための文化イニシアティブの役割 ～日独からの提言～」

編著・発行：国際交流基金

担当：日本研究・知的交流部 欧州・中東・アフリカチーム

160-0004 東京都新宿区四谷4-4-1

TEL: 03-5369-6071, FAX: 03-5369-6041

2009年12月発行

Conference Report “Fostering Peace through Cultural Initiatives: Perspectives from Japan & Germany”

Edited and Published by The Japan Foundation

Europe, Middle East and Africa Section, Japanese Studies and Intellectual Exchange Department

4-4-1 Yotsuya, Shinjuku-ku, Tokyo, 160-0004 JAPAN

TEL: 03-5369-6071, FAX: 03-5369-6041

December 2009

発表原稿の内容は執筆者個人の意見であり、主催者や報告書発行元の意見を代弁するものではありません。

The contents presented in individual materials represent views of each author and do not represent the views of the organizers or publisher.

